

蓮華往生鮮血其

全

特40

65

明治十八年八月八日板權免許
明治十九年六月十五日發兌

蓮華鮮血臺全

發兌 五樹堂梓

○蓮華往生鮮血臺序

如是我聞昔釋尊其甥ありける難陀尊者へ諭す且天上は愛樂儀
見せし以次は地獄の躰想を志め終に佛道に赴けし之將勸善懲
惡不同し心なるべしや柳葉亭繁彦氏近時一編の著作あり題蓮
華往生鮮血臺と云ふ這は天明年間上總國二官并於て俠客法華
大助の活眼より惡事露頭して刑責處せし事と聞之中山の偽
行者奸僧養道の事實を據り例の點筆を採つて起稿するも其
是を熟讀して其善事を心に備へし法に願く人乃ち天上の愛
樂を享けん爾るがが惡事不意に注ぎ邪道に沈倫する人ハ乃ち
地獄の苦や来らん正法に不思議あり只自己の迷よりして不思議
生ぶ文明を以て唱ふ今世と雖も蓮華往生の如き術策小罹り未だ
舊弊の陋習を脱却せざる輩や多し繁彦氏の活眼茲ふありて蓋し
此著のありしを知る定ふ氏ハ操觚者中の釋尊あるがが

蓮臺のめ机小憑り

改進新聞の

雜賀柳香述

○蓮華往生鮮血臺序

明治十九年六月廿八日 岩谷省齋付

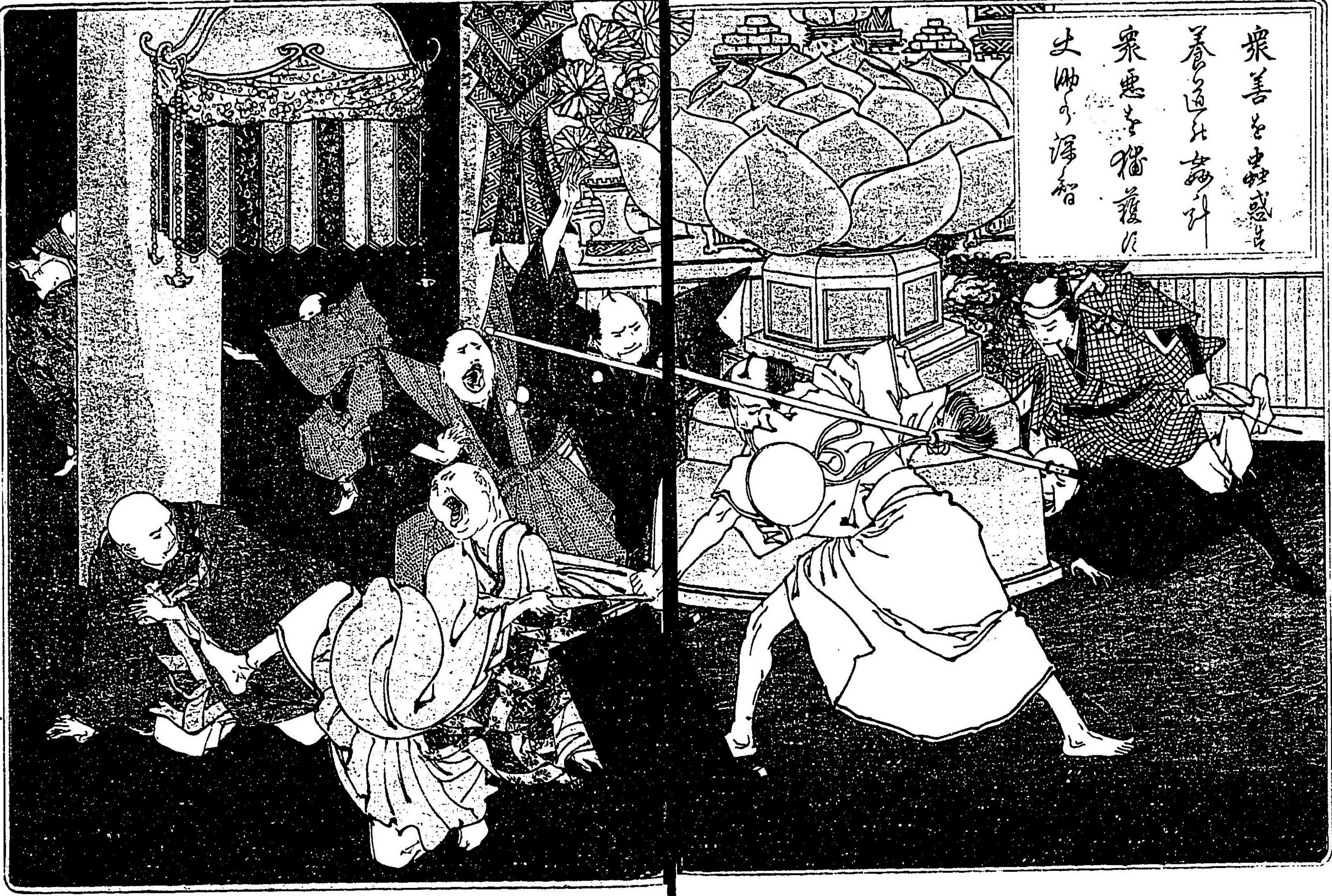
如是我聞昔釋尊其甥よりける難陀尊者へ論す。且天上に愛樂の
見ゆ。め次は地獄の懸想をさめ。終に佛道に赴き。是將勸善懲
惡。不同じ心なるべし。や。柳葉亭繁彦氏近時編輯の著書あり。蓮
華往生鮮血臺と云ふ。這へ天明年間。上總國。常陸。於て伏客法華
大助の活眼より。惡事露頭して刑に處せし。と聞く中山の偽
行者奸僧養道の事實を據り。例の絶筆を採り。起稿する。り。其
是を熟讀して。其善事を。不倫。法に願。人乃ち天上の愛
樂を享けん。爾る。め。不惡事。不意。注。邪道。沈倫す。人乃ち
地獄の苦や来らん。正法。不思議。只自己の迷。不思議
生。文明を以て唱ふ。今世。蓮華往生の如く。術策。罹り。未だ
舊弊の陋習を脱却せざる輩。多し。繁彦氏の活眼。茲にあり。盡
此著の。一。知る。寔。氏。操觚。著中の釋尊。あり。め。

蓮臺のめ机よ憑り

改進新聞の 雜賀柳香述

道華於生與丘

衆善在由感
養之通其
衆惡在猶獲
失物之深





○道華往生鮮血壺

第壹回 柳葉亭繁彦著

徳川第十世將軍右大臣贈正一位太政大臣俊明院殿家治公
天下の武將と仰がれ給ひ國家の政務を掌握し萬民鼓腹去
て太平無異を諷ふ天明の始めの頃かどよ下總國葛飾郡
關宿の城主久世大和守重之朝臣と聞ひしは世祿五萬石を
領す御譜代歴々の名家あるが當時の大守ハ殊に文學武藝
又御心を竭され天下幸ひにして干戈の憂ひ無く萬民業を
執て家族を養ふ又足るもの蓋し徳川家の神祖東照公の賜
物ふれ共和漢古今の例を引に治極まれば亂を生ず國家の
典廢は豫め天數ありと聞べ何れのと時鐘を腋夾み鎗を取
て軍門に生死を争はんも計り知れず是武門に生れたるの
常職なり恚れば太平の恩澤に甘んじ分限を忘るゝ事無く
文を右に武を左りにして片時も怠慢有可らず汝等宜しく
我意を承け少しも誤る事無れど太守既に斯の如く訓誡た
もふ御心ふれば藩内の老壯各個我身を省て皆文武の道を
研究するを悦べりとぞ然るにその重之朝臣の臣に高瀬五

大夫有則と云者あり高百五拾石を給り藩の總方を奉養め
其家極めて富貴なるのみ成せお花お梅五之助と稱る、姉
第三個の子實ありて父に仕ふること最も厚く別て姉のお
花は其齡既に拾八歳と成り春の花の情けを籠め秋の月の
憂ひを含み容貌嬌嬌ある未通女なるに絲竹の調べ走り書
も拙からず戈と云ひ景容と云ひ類稀かり連老たるも若き
も雨夜の品定めには必ずお花が上を評して當世無二と稱
へるあり或は餘りに美麗く心の高きを惡て妬む者さへ
多かりけり爰に又同藩にて同じ程の祿を食み御馬役を奉
職る安達郷左衛門景明と云ふ者有しが五大夫とは年齡も
優り劣らず素より懇意に往來する朋友なりければ天明元
年正月元日年始の御禮を濟せ家老用人其外の重役を回勤
なしたる飯路五大夫方へ立寄り政府の習儀を陳べ益々益
益入魂の交際を望ばん事を請望むに日來より親睦深き郷
左衛門あれば何か異議の有可き夫者某も同藩なり連娘お
花を呼び蓋の用意をさしつ心腹無く打語ひ居たりしに郷

左衛門忽ち嘆息して云ふやう昔時先君御邊と某を御前へ
召れ汝等兩個常に忠義の心厚く余に仕る事神妙なり願ふ
に年齢も似合しく文武の業も同等ければ汝等兄弟の交際
を爲し猶も忠義の志操を怠ること無れど恐篤ある上意有
て御邊へは祐乗の作なる月に兎の藏合ある持付の御剣と
又某へは御秘藏の御具足を賜り御邊も某も今に太切に保
護を加へて子々孫々の末迄も家の重寶とは爲したり然る
に先君御他界の後疾くも三十余年の星霜を重ね御邊も
頼に涙を寄せ某又誓ひ霜を置て翁さびたるを如何せん選
莫御邊の幸ひも三個の愛兒有て容儀才能尋常に超越られ
しと聞く御邊昔時の縁由を忘れ給はせんば娘一人を給は
り某が豕兒辨之助に配する事を許されなば永く一家の交
際を賜し愛よつけ悦ばしむにつけ如何斗りか樂しく心強
き事成ん奈に御邊某が衷情を恤み此事叶へ給はらんやと
云ふ意中花が優れて艶麗なるを見て娶にせまはしと思
ふ老の一鉄心ありけり五太夫是を聞て呵々と打笑ひ寔に

御邊の述懐の如く御邊も某も小助の五十路を過ぎ既往將
來を考ふれば心細き限り成り御邊斯の如き好意有れば何
事某に於ても大慶なりと頼も願承なしたりければ御左衛
門限り無く打悦び心勇まて盃の數を重ね暇を告て立歸り
直ちに辨之助とて其齡十九に成ける壯漢を身邊近く招
き今日五太夫と約束爲したる事を物語り松飾ども取除た
らんには結納をおくり婚姻の用意せんよ此旨心得よと
嚴かに差示すぞ辨之助は豫て高瀬が姉娘のお花が窈窕
たる未通女なる事を知しかば心中妙かに悦び唯々として
座を退き只管婚姻を待説しが此事誰云ふと無く一家中の
評判と成り中原の鹿彼壯漢の爲に獲らるゝ迎羨むも有り
猜むも有りて驚歎まで噂し合り案下某生愛に又滯主久世
侯の御家例とて毎年正月十一日藏開きの式終りてのち家
中の壯士を桃の御殿と稱する馬檢所の庭に集へ武藝の試
合を爲しめ優れて上達の者へは秩祿を増與し式の金銀時

服等を給與る事有ければ此年も又正月二日家老馬島工太
夫より御内の向々へ書取を以て通達すに是より以前高
瀬五太夫の伴五之助助未だ拾二歳成とも伶俐者なれば太
守童小姓と爲し給ひ君寵日を追て重りける故常に君側
在て奉公懈怠無く勤め居たるにぞ太守五之助を近く召て
懇ろに宜ふやう汝既に拾二歳に及び武藝の業も熟せしと
聞ば今年は馬檢所の試合に出て著き働きなし手續の程を
願はず可しと有難き恩命を給ひければ五之助謹んで御請
なし家に飯て父五太夫に語り奈にもして目覺り働させ
んと其日遅しと待暮すに五太夫熟々と思ふやう彼剣術を
始め武藝の心懸け厚しと雖晴ある御前試合なるに鎧鎧張
座埃を蹴立馬術を争つん事杯は別て心元無し何とか手
段を設け是さへに勝を占て一時に名譽を博しあば如何斗
り婚しからんと千思萬考案じ煩ひしが信中意中思ひ付
事有て其翌日伴五之助を伴ひ是も又高百石を領し大守の
御馬師範役を勤る小泉半左衛門方へ詣り我思ふ由を述べ

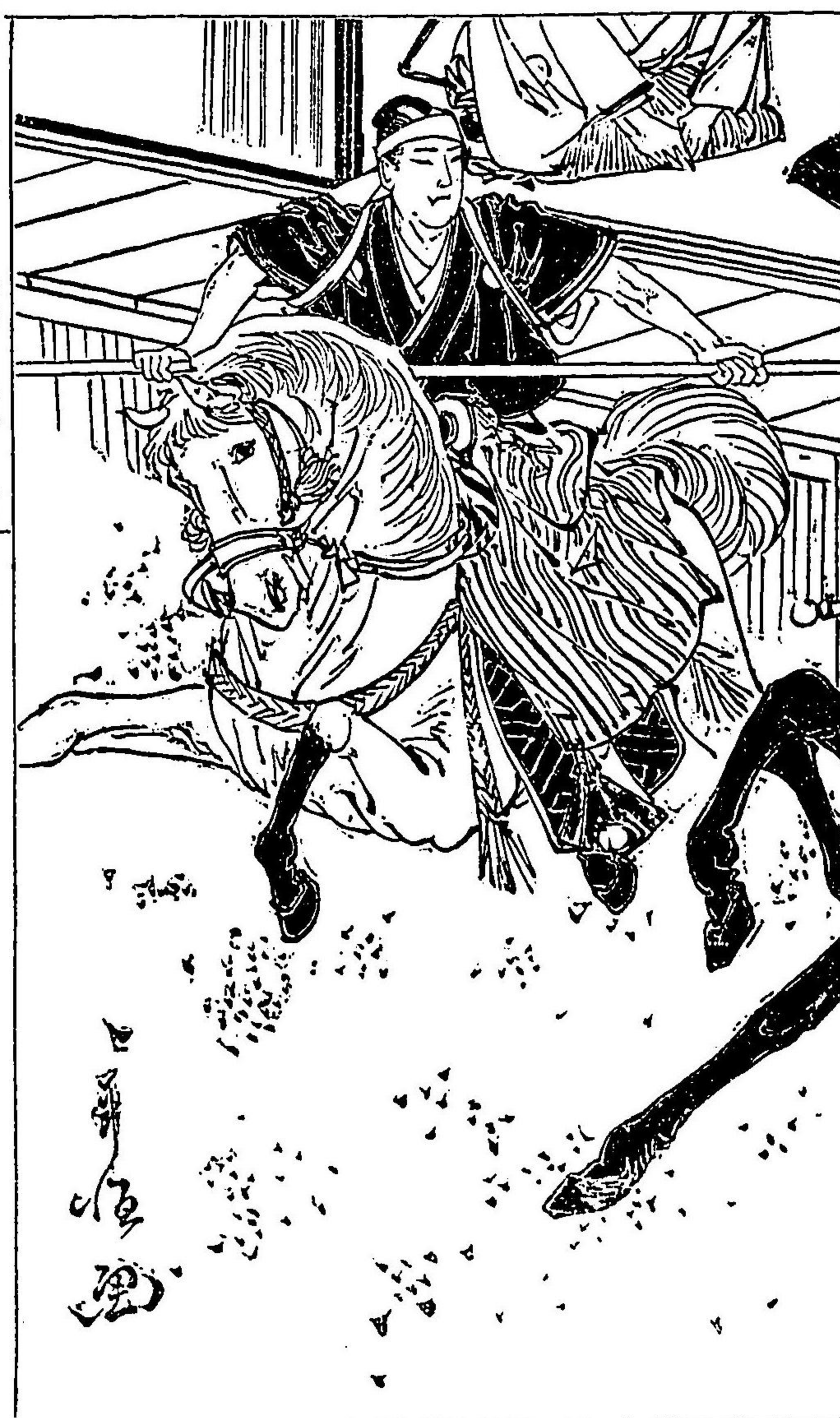
主個半左衛門の差圖を頼と存するぞ叮嚀に云入しかば
時して半左衛門閑室へ兩人を通し委細聞取て呵々と打笑
ひ御心安かれ某傍に在て介添參らせあは決して彼れハ
取すまじと最誇乎に承諾しかば五太夫世も婚し氣なる
顔色して厚く頼み聞ゆるうち疾く用意せしと思しく蓋を
進め道者今仙の初便りに到來せし迎自魚の葉杯處決まで
排列整應分に過たりしが半左衛門一盞を傾け五太夫に指
し献酬漸く時移りしに小泉笑を含めて五太夫に打對ひ寔
やらん御邊は才貌俱に優れたる娘を兩個まで生せ給ひし
と聞り若し某が湖嶽にして伴半之丞が痴鈍なるを棄給は
ずばお花どのを賜はり度然らば伴の娶となして長く番揚
の好を結ばん此事疾にも聞ぬ參らせんと思ひしか共機曾
無に惱みしに今日聞らざるも御邊の光臨を得て百箇の浮木
に籠り海月の骨に逢たるが如し奈に承諾給ふやと切に請
望みしかば五太夫心中に思案するに昨日安達が伴の爲よ
我娘壹人貰ひ請たしと云し其名を指さすと雖必ず姉

娘お花を得んことを思ひし成可く加勝彼は斷琴の交際
 有て親しと恰も一家の如し恚れば約を變じ言辭を違へ
 花を半之丞に與へあは我を恨ん事目前に見るが如し然
 れ其五之助君命に依て
 始めて馬檢所へ出塵花
 ある勝負を争ふに其介
 添と委ぬる半左衛門斯
 く打付に聞ゆるものを
 無下に謝絶たらんには
 是も又我を恨みて五之
 助の爲に或は不測の災
 有んも計り知れず彼も
 棄置く是も拾ひ難し運
 者奈にして好んと暫く
 差備さて考へしが安達



は昔よりの親友あり殊にお花を得まほしと云ず娘一人
 を給はれと云ひしを幸ひ妹お梅を與へんと云とも彼に言
 語の足ざる處有は我を賣るに道なし例令彼何程に頭を云

張とも我又分別を施し
 謝絶するに何條難事
 や有ん家の跡目の五之
 助が一世の名譽には代
 難しと子を不便む心よ
 り影護く思へども終
 り半左衛門の望みに應
 じお花を半之丞に與へ
 ん事を承諾其日は我家
 へ立版どしが斯る事と
 は夢にも知ず安達郷左
 衛門は同く八日再び五



太夫方に到り契りし如く愈々お花とのを賜らば翌日は黄
 道吉日なれば結納を参らす可し一旦言辭を番ひし上り今
 更變替有可き筈は無れども念の爲なれば某罷越たりと云

ふに五太夫豫て期したる事あれば聊かも驚かず宜ふ趣き
 心得たり然は有れ御邊襲に某と約束せられし娘お梅人を
 得んとの事無は某乙娘お梅を以て令息に参らせんと思へ

り然るに今御邊は姉嬢お花を娶は嫁らんと契約せし如くに宣ふは近來迷惑千萬あり勿論彼も是も俱に他は娶らする者れば約束せし者だに無ば左右の辨は費さねど彼の既に御馬役小泉半左衛門の悴半之丞へ遣す可き協請整ひ居る者ある故今に於て如何共詮術なし但し乙嬢お梅を得んとこの事成ば前約を違へず速かに送り参らせんと案の外なる挨拶は郷左衛門只と呆れて兎角の言語も出ざりしが五大夫が心底奈に共訝しく最初に我と誓ひたる時は我が花とい言され共彼の外人を交へず况や彼お花を顧みて御邊の望みに應ぜんと云しに未だ舌の根の乾ざるに事を左右に托して承諾を變たるは必定他も事情有る事成可しと心中は悟りしかば強ては言語を發せず何様御邊の宣ふ通り我心専らお花とのを懇望せし成とも願に其名を指的ざりしかば此誤謬を惹起せり然るも猶舊交を思ひお梅どのを賜はらんとは某も又満足すれ共如何せんお花どのを迎ふ可死由悴も告置たれば今にして斯の仕合なりと

は親甲斐にも説示し難し畢竟此婚姻は相應からぬ事有て世に云ふ御縁の無もの成ん某も最早諦めたりと怒氣面色に顯はれて馳て飯ると其儘に辨之助を呼近付け五大夫が變心の光景を語り先君御在世の御より三拾余年互ひに草逆の交際を結び親族に優して頼母しかりしと彼平常の好を破り前首を食て我に耻辱を與えたる心腹何共以て心得難く飽まで武士の意地を立なば空觀打過可き事成され共私の遺恨に依て騒動を起しなば太守へ不忠と成のみ成す義信に疎き者とも知す交際を結びたる我眼の恐なるを顯はすに近ければ狂て立飯り來れりと涙をばらりと流して演述なすよと辨之助も又大に驚きて婚姻の變替を腹立ものから今更に詮方無れば僅かに胸に納めて是より斷念に及びたれ共懸ひ人にも誇りたる事さへ有ば我身ながら心取しく思ひ快くとして引籠り居たりしに疾や藏開きの當日に成りければ止事を得ず法の如く裝束あして定め刻限を俟ち馬檢所へ到りて見るよ正面一段高き所には大

守大和守重之朝臣麻上下にて着坐有る其傍らに家老馬島九大夫を始め夥多の近臣順序を紊さず兩側に列坐し最麗花に見えたりけるが暫く有て使番の者壹人月番の御馬師範役小泉半左衛門へ令を傳ると等しく御庭東溜の幕を上げ壹人の美少年藤色の曙染の振袖を著し茶袴の袴を穿け小刀を帯て静々と御前へ進み目禮をなすと大守遙に樹して疾々と上意有ければ彼少年下郎に持らせたる緋縮緬の襷を綾どり奥州駒の太しさに白覆輪の鞍を置馬上素然に打跨る是なん例の五大夫が一子五之助にて生年僅が十二歳雪より素き双腕に手綱かい探り常走を試み一聲高く叫びつ、廿五間の馬檢所を具一文字に往來するに馬は勝きし逸物なり乘人の辭に珍らしき馬術の功者成りければ大守を始め満坐の人々這者一段の觀覽なりと各個膝の進むを覺えず稱贊の聲浪打て暫た動搖も止ざりけり借も高瀬五大夫が一子同苗五之助は小泉半左衛門親子が盡力到らぬ限も無れば數十回疾驅を試み終に乘了て御前

へ罷り出けるにぞ太守殊に稱譽し給ひ汝未だ幼稚の身を以て平素の心懸宜しく今日の舉動天晴かり連衣服大小等を給與りける故五大夫親子謹んで君命を奉じ不時の面目を施しけるが是より先彼辨之助は溜に在て五之助が今日の首尾を目撃爲るに付てもお花が縁組の破談より心中五大夫を恨み居たれば心懸く眺め居しに小泉半之丞萬事を周旋するを見て一層憤怒に堪ず彼お花を迎ふ可き約束を結びし爲め内縁に引れ斯くの如く五之助の介添を爲すもの成んと忽ち猜忌の心を起せしか共少しも色に顯はさず斯て御馬檢所に於ては使番君命を傳へ此回は家中の壯士を二手に分け各個白綾の鉢巻して刀物を携へ劍術槍術の試合數十番有たりしが正に歎ひを胚胎爲可き時節成可く彼小泉の悴半之丞と郷大夫の悴半之助は期せとして試合の對手を成しかば辨之助心中大に悦び我此試合を以て半之丞を懲しめ此頃の鬱憤を散せんと静々と庭前に進みしに半之丞の斯る事とは知され共辨之助の相へては武術

の達者なり。今日、北ある君前に於て彼に打負たらんに
は残念なりと思ひ充分用心を爲しけるが下郎二人鞍置馬
を引來りしにぞ終つ二人此馬に打跨がり一聲大駭て疾駈
しが兩人共一世の大事と心を込めて乗たりしかば互ひよ
優り劣無く勝負は對等と成たりけり然ハ打物の手合爲ん
とて脚婆付ある鎧を腋夾み双方暫く睨合しが纏て透をや
得たりけん一上一下と争をひしに實に龍虎の怒れるに異
ならず然と弁之助が拾術半之丞の上より有は突然來るを引擲
曳と一聲叫ぶと等く半之丞の鎧は半空に卷上られ吐嗟只
今突墮されんと皆手に汗を握りしが半之丞も然る者なれ
ば馬を左りへ乗廻し突然來る弁之助の鎧を左手より拂ひ退
其儘無手と引組たり双方共に小力有は霎時が程の揉合
ひしが初度の後れは半之丞の及び難しと思惟せしにぞ法
例を矯て逆手を出し勇み懸れる弁之助の肚を丁と即智の
當身に何かの塊可き弁之助云と云さ真逆さに馬より墮
と落たりしが三魂六魄天地に歸し敢無く絶息あしたりけ

やう其方半之丞事去十一日御前試合の節車性の舉動
に及び高瀬郷左衛門仲辨之助を撰發候段豫ての御法例に
背き不届に思し召れ屹とも仰せ付らる可慮父半左衛門年
來の勤功に思召代られ格別の御慈悲を以て切服仰せ付ら
る、條明十五日を以て自宅に於て執行ひ相果たる後速か
に届け出可く但し檢使の義は別段の御沙汰に及ばせ有難
く存可き旨口達なしけるにぞ半左衛門委細御請なし我
家へ立歸り半之丞へ申し聞せけるに半之丞の素より覺悟
の上なれば聊かもわるびれず是が用意を爲にける茲に藩
主久世侯の領地下総國葛飾郡關宿に養傳寺に號す法華
宗門の梵刹有り代々藩主の香華所を金殿玉樓參差と
して彌が上に高く聳へ奇麗壯觀一國に拔群たるが當時の
住職の法名を日功と稱し道徳堅固よして微妙博識ありけ
るが毎歲正月十五日の大江戸に來り大守へ年始の御禮
を爲す寺法なれば該年も寺人の青所化と下郎兩個を將て
同十四日愛宕下の上屋敷をころろと例に依て藩士何某

れバ今日の勝負は是迄なり逆督一同に御暇給はり給ひし
監察の役人中山金三郎當番の醫師竹中道庵兩人君命を依
て弁之助の死骸を檢案するに左の腋紫色に變じたるは
柔術の逆手も依て正しく半之丞の爲に性命を殞せしは相
違無しと兩人より件人の趣を現在に言上なしたりけれバ
大守大に怒せ給ひ半之丞技藝未熟なるを掩はんが爲の豫
て禁制の逆手を以て朋輩を殺したる事卑怯千萬奇怪至極
也との外の御腹立にて直と父半左衛門へお預けと成り
追て御沙汰の下るまで専ら恭順爲可き旨最嚴重に仰せ
出されけるにぞ父半左衛門太く畏りて半之丞を召連れ自
宅に引取り上の仰せを待たりしに同月十四日家老馬島工
太夫より父半左衛門に即刻登瀛致す可しと走り使を以て
告越たれば半左衛門は是必ず半之丞に死を給ふ旨を仰せ
渡さる、成可しと情々として御殿へ罷り出けるに案の如
く元老馬島工太夫を上席と爲し監察兩個傍に在りて其
体尤肅然たりしが工太夫登通の密取を恭しく披きて言

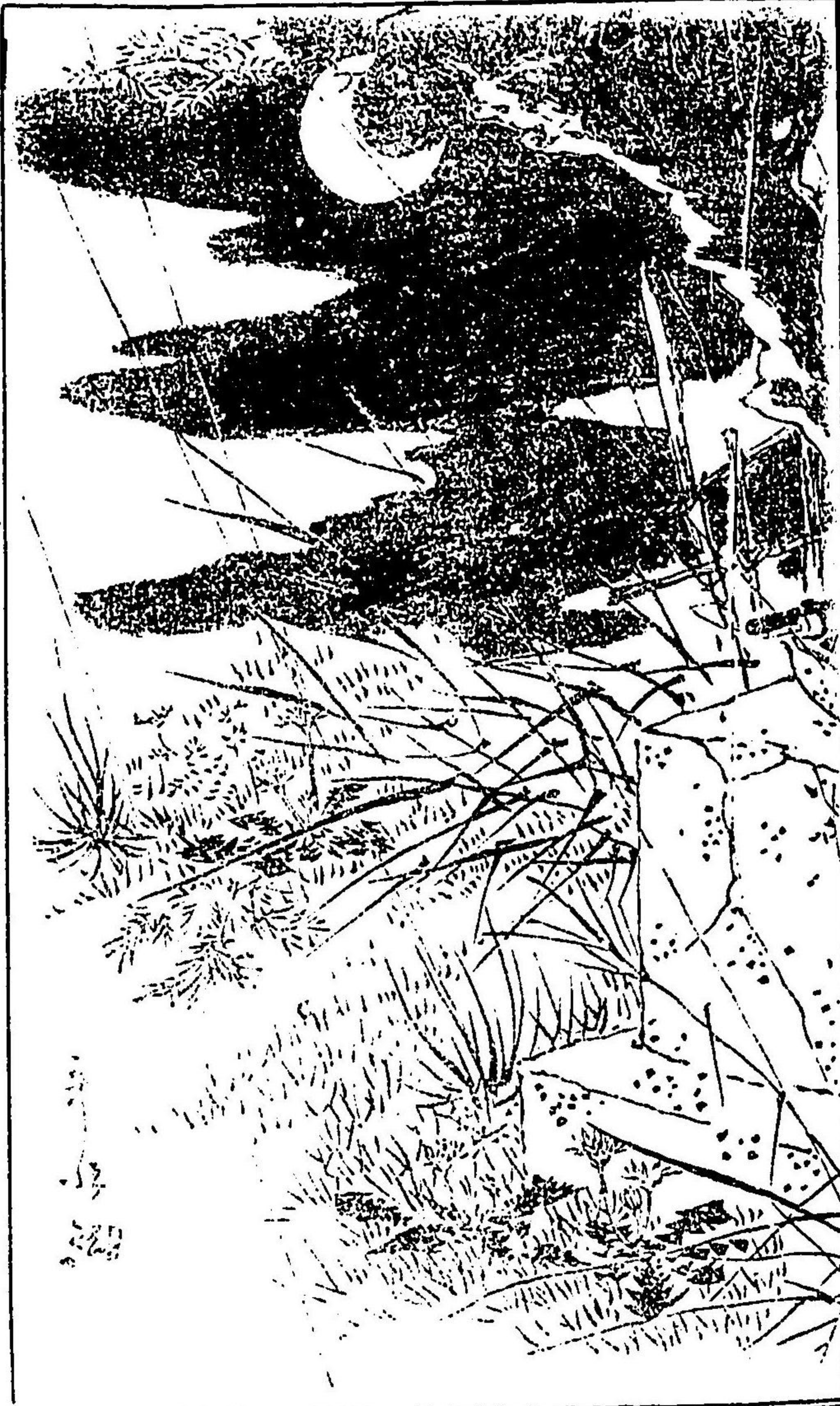
方へ到着せしが圓すも倉開の當日小泉半之丞が安達弁
之助を撰發せし科は依り明十五日自宅に於て切腹仰せ付
らる、旨を聞上人墨染の袖を浸し貫道偶然年始の佳節に
參合せ此事を聞くこと佛縁深きの致す所如何も以て不便
なれば宜しく君侯は執達して彼が一命を救ひ得させんと
翌日御禮相濟たるのち家老馬島九太夫は就て半之丞が助
命の事を歎訴し貫道不肖なれ共彼を申請り拙寺に伴ひ出
家遁世成しめ永く弁之助の菩提を吊ひ罪を九泉に謝せし
む可しと折入て申しけれバ工太夫實にもと思ひ詳了承
して大守大和守の存慮を伺ふに重之朝臣は素より半之丞
を惜み給へ共家の法儀に違ふを以て余儀無く切腹を命じ
給ふも如何もして助け取せんと思し、かバ故意と檢使の
御沙汰に及ばずと宣ひしに傍に半之丞を逃し遣んとす賢
慮成し故幸ひの事に思し召れ養傳寺の命乞を機曾として
半之丞の一命を助け永のお暇と成けるにぞ日功上人も太
く悦びて即日半之丞を伴ひ關宿に立歸りしかば靜か成

一室へ半之丞を置しめ父半左衛門より常分賄の料あり
 逆余六拾兩預り來りたれば是を半之丞の入用と宛て閑暇
 際は經文の工徳廣大無量ある事を示し専ら出家爲す可き
 用意を急がれけるが茲
 に高瀬五太夫の娘彼お
 花は父が免許を請て小
 泉半之丞の妻と成可き
 契約調ふが否や忽ちに
 此騒動を引起し無慚よ
 る半之丞に死を給ふ由
 を聞て日夜歎き哀を此
 緯索より武道の意氣地
 に出るとい言へ原因を
 推ば婚姻の相違ひより
 起り専ら我身の上に係
 れり然らば半之丞若し

を聞て一旦は命の恙を
 を悦びもそれ遠く此地
 を去ては空行く月の運
 轉逢瀬も頼まれず殊更
 墨染の姿と成り桑門と
 成り給ひるは琴瑟の縁
 は全く絶たり恚れば我
 も又誓をを下し尼とも
 成て心易く一期を經過
 んと父五太夫と物語り
 ければ五太夫頭を撞て
 言ふやう抑々此回の事
 畢竟我心に耻る事多く



切腹して相果さば自も又乃に纏て黄泉よて夫婦の縁を全
 ふす可しと既に覺悟を極めしに思ひ懸無く養傳寺の日功
 上人の命乞に依りて不測に命ながらへ關宿へ無きたる由



せめて御身尼法師とも成て婚道の潔さを示し呉るは我面
 を起す一個の種とも成んが婚姻は名のもとにて御身未だ半
 之丞に對面せし事たに無く彼又御身を知らず相互ひに墨染

の姿も成んも可惜ければ幸ひ彌生の上浣は遠祖の墓參
 りとして關宿へ赴きたき由去年の年の尾より其筋へ願ひ留
 たらば其際御身を伴ひ彼地より下り左も右も一回半之丞と

面會爲しめ然して御身の志望を適へさせなば御身の思ひ遣とも成り我父小しの遺願も無しと千般に説進めお花の尼と成事を推止めしが白駒の隙射るが如く疾くも三月と成りければ五太夫は妻の衣重と乙娘と梅伴五之助の家事を委ね竟に其詰朝お花を急がして關宿へ赴きたり嗚呼迷へる哉五太夫義には恩愛の絆に細みて朋友の誓に背き夫が爲に一場の葛藤を惹起したるを猶憶りすまに今又お花の爲に影護くも關宿へ伴ふが如き其欲する處絶て武士の所行に有すと心有も心無も皆人毎に言繼て後の噂と成りにけり猶も五太夫はお花と俱に日ならず彼地に着たりしかば先づ養傳寺に赴きて其壯觀を見るに頃は彌生の始めおれば境内の櫻花雪の如く咲亂れ瞻仰れば曇々たる石壇は陽炎高く燃玲瓏たる欄干は夕陽輝き渉れり既にして二三の門を入て庫裡の口に到り名刺を出して來由を陳べ半之丞に對面せん事を告るゝ役僧五太夫父子を一室に伴ひ茶菓を出して懇ろに待遇し稍や有て半之丞未だ誓りは

下され共身に鼠木綿の衣服を着し法師に異ならぬ体して徐々立出一別以來の口誼了きて云ふやう某過つて朋友を殺したる事其罪萬死も謝する能はず然るに大守父が多年の勤功を思し召れ助命の御沙汰を蒙りたる事大守が莫太の御厚恩なる事は云に及ばず當寺の住職日功和尚の賜物成押付別製染衣と体を變へ師の思にも酬ふ可く既に法名も養道と給ひ形こそ斯くの如く成ども疾や心中は出家と同じき某あるを何等の事の在しませして遠路を遙々尋ね來られしやと云ふに五太夫は後ろを顧みてお花を半之丞に紹介せ惜お花一旦の契約に背かず御身の爲に尼と成て婦道を全ふせんと云ふ其心慮憐れむ絶たれば一回は御身と逢しめ彼が志願を遂させたく惜こそ今回先祖の賜參を機會を伴ひ來れりと一伍一什を物語り頻に鼻を打かめば半之丞も岩木さらされお花が貞節の志しを聞て慈然として暫時言葉も無差俯きて居たりしが師の坊日功上人は半之丞が光景を透見して道心を素さん緯を踏み

給ひ法用は附托急に半之丞を招きければ五太夫も據ろ無く半之丞に打對ひ猶再會を約し明日來つて更に談合せん逆名殘惜がるお花を暫爾し聽て寺門を立離れるにぞ上人は半之丞を閑室へ呼び言語を低めて云ふやう汝義に罪を得て死す可りしを我不意出府して幸く恩免を蒙りたる身分成るに故無くして親族と離面會せん事君へ對して恐れ有り且幾程も有す通世の身と成もの親族の俗縁に曳れ道心を過すらば永劫罪障消滅の期無る可し汝知すや實相無漏の大海に隨縁真如の月は宿れ共五塵六慾の風波起り是が爲に影を止る事能はず然は有れ慈眼視衆生の弘誓三千大千國土に掩へば救世觀し給はざるは佛菩薩の方便なり汝速かに我が教化に隨ひ圓頂黒衣と成て後世の營みを爲す可きに徒らに俗情を起さば煩悩解脫の時有可らず恚れば此以後親族の尋ね來る共決して對面する事勿れと叮嚀に教訓し給ひければ半之丞顔赤らめて自個が部屋に引退さぬ恚て五太夫等の養傳寺を立出其邊の旅寓止宿し

翌日又々彼寺へ赴き養道に對面せん事を云入れたれ共此回は面會無く人を以て師の訓誡を告げ斯の如き事情成ば速に江戸へ御歸りの方然る可しとの事に如何共爲る事能はず雖て旅宿へ引返し留守したるお花へも云附せ三日過て彼地を發足し其日江戸街道水懸峠へ來應りしに多くの雲助ども五太夫親子を取巻強て獨を進めん爲め惡口雜言に及び果はお花が艶麗なる姿色を見て互みに目配して理無くも引立行んと爲しかば五太夫怒り心頭より起り忽ち一刀を引抜き四五人を對手に必至の勇を振ひ叫び挑み争ふ處へ何れよりや來りけん壹個の流玉五太夫が胸板を打抜きしかば何逆堪可き呀苦一聲上げたるま、後に挫と打倒れ無慚の最期を遂たりけり

○第二回

夫の借置養傳寺の住職日功上人の今回圖らずも高瀬親子が半之丞を尋ね來り閑談數刻に及びしかば未だ壯年成る養道お花が色香に迷ひて道心を素さんかと踏み給ひ厚く

訓誡して再四面會を許し給ひざりしが、恚ても心安堵給はぬよや一兩日經過て我思ふ由を發道に説示し一日も早く出家通世して菩提の道に分入可しと此日半之丞を剃髮なされしめ斯く景容を改めし上は汝是より飯高の檀林に赴き修行の功を積て天晴の名僧とも成可しと路野法の如く附與しめ猶心元無くや思ひければ、關宿發足の刻限を書たる書翰をさへ添て道中の懈怠を誡め給ふに、半之丞の養道は飽迄も庇蔭し給ふ師の坊の厚恩を數回謝し訣別を陳て飯高へ赴かんと直と發傳寺を立田又彼水懸畔へ來懸りしに頃しも三月の中流成故山水の眺望筆にも及び難ければ我も有る遠近を見渡し稍や下口に臨まんとして爲るに二三羽の鳥舞へ迎へ歸らずガバくと啼て其邊を離れざる光景何と無く訝しければ、發道何氣無く傍を差眼くに這者そも奈に此程我寺へ案内たるお花が父親高瀬五太夫朱に染みて死し居たりしにぞ愕然と走り寄り抱き上たれ共疲や絶命て半日も經過しと思しき散成は者嬰扁鵲の術有と

も救ふ可き便宜無く餘りの事に忙然として暫くは言語も出ざりしが、熟々と思ふやう是必ず盜賊の爲に斯る非業の最期を遂たる成ん然にても伴ひたるお花の如何爲しや彼も氣支ひなり是も痛しとして立ち去す泪に昏て居たりしが師の坊より時を限りて飯高へ赴く由を命じたる事成ば暫くも己が儘に止り難く去迎死骸を是なりにに捨置んも可借と辛くも傍らの窪き處へ五太夫の遺骸を藏し後日の徴しにと太やかなる竹を樹て懇ろは回向をなし終り思はずも隙を費したり疾く急がばやと獨りこち塵打拂ひて上總の方へと赴きけり話説分頭玆に氷蕪かる信濃の國筑間郡松本の城主内藤家の藩中に中根久兵衛と云者有しが平素忠良成る氣質にて奉公怠り無しも宿世の因果にや或夜主人の寶藏を看守りせし際盜賊忍び入て殿の用金三千五百兩を掠奪ひ取り跡白浪と逸失しかば此分頭立難くて竟に入牢の身の上と成り女房お捨娘お菊の兩人は久兵衛の科に依て領内を追放と成し故泣々お捨の實方同郡常磐木

村へ赴き訪に久兵衛の安否を窺ふに或は半死したりと云ひ又は刑場に性命を失ひしなど種々の評判して離に聞えねど右左一命は尙束なしと聽き親子悲歎に袖を濡し世を厭ふ心頗り又起りて親族の諫るをも聞ず親子千ヶ寺詣に体を換え住馴し故郷を後にして諸國を巡歴しけるが往々て飯高の檀林近く彷徨來りしに如何しけんお捨途上に撲地を臥て息も絶げ成故お菊打蕪さ干般手を竭して介抱せしかども素より路上の事あれば思ふに任せ老女困じ果て居たりしに年齢五十に近き達しげなる老女最前より物蔭よて親子の光景を窺ひ居たりしが此際忽ち走り出てお菊に力を併せ心切に勸り呉しかば地獄にて佛に逢たる如くお菊は限り無く打悦びて俱に看病したれ共急に癒可き体も無れば彼老女お菊に對ひ我家斯より幾程の道も有る最汚るしき矮屋されと斯て有んよりは勝せれば厭ひ給はずは諸俱に伴ひ參らせん誘給へ迎先に立お菊親子を慰むるにぞ兩個の嬉しく手を合せ離て老女に伴ふはれ

彼が宿所へ赴くは是なん飯高檀林の門前なる花賣お丑と稱る、嗚呼の惡婦よて美麗女兒と見れば言葉を説けて欺き透し金に換て道成ぬ不義の榮耀を身の幸と果無く世を渡る者成ければ今日思ひ懸すお捨お菊の兩人を見て是我爲の揚鏡樹ありと驟かに惡計を計較斯くは誘引來れるあり急てお丑の兩人を靜かなる一室へ入れ梓多九郎と云心体母に等しき兇者成をさる無き体に見せ懸け親子手厚く勸はり呉しかどもお捨が病苦日増に重り三月斗り過て歸らぬ旅へ赴むししかばお菊が歎き云は更なりお丑親子も甲斐々數待遇し野邊の葬送忌日々の消善他事無く供養なしければお菊もお丑親子が眞實なる志しを悦び些の由縁も無き我身なるを斯く懸るに心付け給ふ事何れの代にか此御恩を返し參らす可き殊更母お捨が長き病瀕の藥の代より葬送の事まで快く譽み給ひし事今の身に如何爲る共願ひ奉る途無ればせめて御身に代り檀林の僧侶のそなき洗濯より或の新に仕立る若物や幼稚針葉ながら

兎も角も勉て家計の費を補ひ参らせんとお丑に叩きけるにぞお丑腹の裡には種々の目論見有共色にも顯さずお菊に安堵させて寛に事を果さんと思ひければ請ふが任意是を許しける程にお菊其詰朝よりお丑の家へ持來る法師の衣類は何くれと無く我身の勤めと成て或は仕立物し或は解洗おとしけるが彼小泉半之丞の義道は義に師の坊日功上人の命に依り此飯高の檀林より來り多くの衆徒と交際り専々經文の修行懈怠こと無りければ早晩なくお丑の家へも往來あしお丑多九郎の更あり此頃食客たるお菊へも假初も物云ひ懸る際も有義道廿歳に及び素より稀成る美男なるに父が送りし金に事を欠ねば身の休毎時清潔にて他の法師と異り傳聞白川の安珍も斯やと思ふ斗りさればお菊出入度毎に悪からず思ひ初め哀れ女兒と生れし甲斐には憐る風流男を夫とし語ひなば如何斗り嬉しのらんと筋に心を悩しければ發遣の品とし云は他の品は打捨ても是を仕立又は解洗ひ爲る衣も彼人の身体に纏ひたる品

と思へば愛護して打ち措れず眞實に待遇けるを義道はお菊が然る意匠有といひ知され共句やかに愛敬づきたる体土地珍らしき女とは有繁岩木成らぬ身の意中よひ思ひし成可し實や清女が春曙抄の遠くて近き物と云る件りに極樂船の道男女の中と書たる如く男は陽に女は陰に其類異なるものながら相想ふよりの高貴の微賤にも侍り若き者の老たるにも娶ぎ百年の性命に換て語らふが概容の習慣成は彼よりや誘ひけん是よりや促しけん義道とお菊の兩個辛く人目の關を越て水漏さじといひ契る物から倦れ別れ袖をひたす涙は雨とまがへ共雲と成る夜は稀なりお丑は兩個の交情日に増し月も越て益々深く成けるにお丑は斯る事有といひ知れ共お菊が輓近の舉動何と無く異む事のみ多ければ彼を扶持し機會を得て遠き境へ賣て多くの資金に爲ん爲るに萬一私と男と語らひ走る事有んば勞して功なき業成ば最早迅速に手を下して懐る暖めんと思慮り梓多九郎へ云々と打叩くに多九郎膝を進めて我が分別

を語り恰好大江戸吉原の亡八三浦某の手代善兵衛と云る者先年少しの癖より悪意に成りたる夕昨日此地に來りし趣き難に圖らず聞置たれば翌日彼が許を搜索ねて宜敷談合致さんと示し合しけるをお菊思はずも聞て打驚き借は此家の主個恩を被て我を養ひ謀りて河竹の愛瀬に沈め金を掠取んとす計較成しか斯く聞上からはムザく彼等の術中に墮ち苦界に沈まん絆朽惜ければ如何もして其鋒先を免れんと種々よ心を悩しけるが恰も好此夜主個お丑が請合居たる仕立物の事にて檀林の法師何某へ急に云ひ入可き事有しを確と忘れ居たりしを思ひ出その事情云々と語り御身此品を携へ檀林に行て彼法師に逢て廻與し給へと壹個の風呂敷包を付與しかば渡津に船を得たるが如くお菊大に悦びしが悟れまじと景容にも出さず懸て彼品を携て檀林の寄宿所へ赴きしが憊る癖は日毎敷回有事成ば誰も異者無りし程にお菊道男に對ひて嗚昔發道ぬし此解衣をおこし給ひしかど切品不足成バ仕立可き様も無く

夫故對面して萬づ計り來れと主個の吩咐しま、此包持て來れり此事宜に執達給はる可しと云ふに道男承諾て奥へ入しが暫く經過て發道出來り先づ四邊を見るに人影も有ざればお菊の側へ寄りて何事の有ての斯は驚しく對面爲んと爲るよや最心配なしと云ばお菊も又前後を見廻し借主個親子が密々の談合云々と身賣の計較を物語り像て御身にも聞之參らせたる如く妾は信州松木の藩士中根久兵衛が娘にて父親無實の科に依りて入牢の身の上と成り一命終りしと聞母が捨と俱に廻國に出たりしに病弱の故を以て今の家に養なれ然斗りの恵を請つれば丹を打捨て走らん事人の道成すと雖彼等親子妾を人買に賣んと云は始めより善心もて養ひたるよは有す憊れば妾今彼家を走る共さまで影護事は有じ御身契りし事に背さ給はずは何國へ成とも妾を伴なひ給つて後ろ安く一生を過させ給へかしと疾々催り來る泪も袖も朽る斗り打泣にぞ發道も道理といひ思へ共彼が言葉に就て走らん共云難ければ一回

千般に宥め難しつれどお菊一聞に聞入ず然らば是非無
 し今夜子刻を合間に身支度調へ裏門へささる可し然あり
 巴中より出て相俱に關宿へ走り昔の姿と成て御身と添
 遂申さんと漸く承諾し
 かばお菊太く悦び攜へ
 來れる包みを養道よ遞
 與お丑が傳言を陳べ何
 某法師へ届け給はれと
 云ひ留堅く言葉を番ひ
 て立別れけるがお菊當
 夜主個の熟睡したるを
 見濟し身邊の品を細少
 き包と爲し竊かよ家を
 出て檀林の裏門に詣り
 養道の出來るを今や遅
 しと待居たるに寺々の



鐘聲に子刻を報じければ疾や幾程の間も無く養道の來
 る可れば淋しと思ふも少しの間なりと僅に勢ひ付て忍び
 居たりしに此夜は宵・結陰て如法開夜に等しく絶て月

の有る頃と思へぬ程
 成るに人跡稀なる田舎
 道なりけれバ暫時の斯
 ても有る果は時刻の押
 移るを氣遣ひ又ハ養道
 の心を疑ひ心成すも侍
 立居たるに豈正の犬大
 お菊が舉動の異しさを
 見て左右無くは進まず
 首を立前足を張て頻り
 に吼懸るさへ最恐ろし
 きに此聲を聞付て同じ
 程なる犬五六疋群々



と走來りお菊を中に取込て飛も懸らん光景成ばお菊氣も
 魂ひも身に添ず養道の來らぬを恨み啣ちながら此方へ身
 を避け彼方へ走り競ひ懸る犬の牙を通れんとして居たる
 處へ遙か向ふの方より濁たる聲を張上げ今様の唱歌唄ひ
 つ、來れる者有しが犬共群がりてお菊を取巻を見て始め
 て人有事を知けん足を止めて容子を窺ひ居る体なればお

菊哀しげ成る聲して頻りに救を求めしかば彼男借は犬の爲に難義爲給ふと思し我救ひ参らせん心強く思ひ給へとて田の畔に横り居たる竹押取り一聲叫びて振廻しけるゆゑ此勢ひに後込して多くの犬は八方へ自がさまん一逃行しかば蘇生たる心地して菊の纏て小腰を僕め身の幸ひを悦びて其信切を謝しけるに何思ひけん彼男は矢庭にお菊の側へ寄り右見右視しが猿臂を延し袖をバ丁と捕へしにぞ是はと驚くお菊が仰天幸く振切り逃んと爲る帯へ手を掛け引戻し冠りし手掛かなぐり捨て仁王立にぞ究立たるは一眸有る可き光景なり

○第三回

借もお菊は檀林の裏門にて養道の出来るを待居たるに思ひ懸無く多くの犬に取巻れ既に噛倒されんと爲し處へ登人乃男通り懸りしかば里に云ふ輪の剛の水を得たる思ひを爲し我にも有ず聲ふりたて頻りに應援を請求しに彼快く承諾ひて犬を八方へ追散し呉たれば膝を僕め手を摺

然筋は疎からぬ我るを何逆欺かる可き我思ふに此檀林の法師の中に御身心を通はす者有て今宵相俱に走らんと我母の寐息を窺ひ此處へ來りし成可し我今母の上を思へば御身を引連行て愛目を見せん粹素よとなれ共我も又些の人情有ば御身の爲悪しさと成ば如何でか然る無情事を爲ん御身の望みを通へさせんも我この意中に有ば宜に取成し参らせんに密通たる人は何某ありや窺かに告知し給へかし然ば云へ御身我心を疑ひ飽迄も包と成ば重ねては問ふに及ばず御身を引捨て我母の許へ連歸り君傾城の憂勤の身とせん事某が心の儘なり能く思慮て思ひ誤り給ひと云ふにお菊差俯きて應答も爲ざりしが此多九郎の慳貪邪智の白者にて些の鼻薬を與へなば母を欺さても我味方と成まじきにも有ぬ曲者成と慰ひ隠し立して重ねて愛目を見んより事事實を告て救ひを索めなば萬に一つ浮び頼も有可しと漸くに思ひ直し兼に養道が此寺に來りし頃より假初に云寄て堅く契りたる事より今宵人

て其信切を懇ろに謝したりしに彼男忽ち猿臂を延しお菊の袖を捕へ且其帯に手を懸りて矢庭に引戻さんと爲しかば是必ず剣奪を業と爲る緑林の類か然らずば手込よ爲して辛きめ見せんと爲る嗚呼の白徒成べしと思ふ物から慰ひ聲立救援を索むる共深更の事と云ひ殊更我身も又影護さ身の上成ば了得に人も呼難く如何にもして遁れ走らんと身をまかけ共軟弱女兒の力量よは引放つ可も有ず是や霜夜の蟋蟀聲も得上す音に泣くを彼男阿々と打笑ひ汝如何成る事情有て未だ夜深きに此近傍を徘徊ふや汝が景容と包みよ仍て大方は推量せりと云ふ聲は紛ふ方無ら主個が獨子の多九郎なれば虎の胆を連れて更に毒蛇の口よ逢ふ身の薄命を打歎さしが賺さる、丈けは賺して見んとお菊は故意と顔色を和らげ月の光りも薄ければ御身成とは絶て知らざりし情も危ふき今宵の災難折能くも和殿に救はれしに身に餘りたる悦びありと云ふを打消しつ、多九郎は四邊を見廻し御身言語を歸りて我を欺かんと爲れ共

目を忍ひ諸俱に走りて關宿へ到らんと言葉番へ子刻の鐘を合圖に忍び來りたる趣き始終詳らかに語り只管多九郎の機けを索むるを多九郎熱々と聞果しが訝しき顔色して云ふやう借は御身何事も知でや在す彼は關宿の武士にて去年女の爲に切腹爲可かりしを養傳寺の日功上人折節参り合して千般申寄り我弟子として出家爲す可き由懇ろに請求め給ひしかを大守も外成ぬ上人の命請に依り請に任して長のお暇と成たる由恧れば普通の法師と異り女兒を欺く術をも知てや正しく御身を贖して伴ひ行んと爲し成可し然れ共佛に仕ふる身の行ひに有ざれば忽ちに事顯はれしを面目無しとや思ひけん遇刻に檀林の暇を請て取物も取敢ず關宿へ送行したりと寺男の何某に確と聞たり還は今も云る如く御身を争へ購ひ出し彼地へ連行で遣き境の遊女杯も賣與へん計較成しを事顯はれて恧る次第に成行たる成ん是御身の爲には此上無き幸ひ成し然れば社夜の明る迄待たり迎如何でか茲へ出来る可き徳ても

未だ悟り給はずやと云ひければお菊も半は信じ半は疑ひ
 更に猶豫して決し難きを多九郎種々又慰め諭し御身心を
 安じ給へ我翌日は遣人關宿へ行て坊かに養道に對面なし
 彼寺男の云るに違はず
 ば御身の謀られたる仕
 返して御身の恥辱を雪
 ぎ參らせ若し夫は空事
 にて外に據る無死事情
 有ての事にて御身を謀
 りたるに有すんば我宜
 しく御身の爲に媒始し
 て參らせん萬づ某に委
 し給へと日來の邪見な
 るに引換ひ信切に云も
 不測なれと今更詮術も
 無れば慙く成上り御身



の情をもて母御の怒りを思め左も右も宜に計り給はる可
 しと泣々云けるに多九郎委細に聞取て打合照必ず共に
 氣支ひ給ふかと願てお菊を伴ひ我家へ歸りけるに例のお

丑のお菊の出奔爲しを
 知ざりしに今少し先漸
 くにて知て立騒きたる處
 成れば多九郎が伴ひ來
 れるを見て大いに悦び
 たれ共何事をかグド
 く云ひて其勢ひ凄じ
 かりしを多九郎目配し
 て我意中の目論見を知
 らしめ頻にお菊の爲に
 打詫ければお花も漸く
 に顔色を改め御身と妾
 素より親子にも有ねば



御身何方へ行給ふ共開い夫迄の事ながら抑々御身の母御
 途端に病臥し給ひし時より今日まで御身親子の爲に我費
 すどころ中々疎そかの事に有す恚れば御身正實の心有ば

我個親子の爲には身を粉に碎さても思に答へ徳に酬はん
 と思ひ給ふ可きに然は無くして我睡眠を幸ひ此家を脱走
 んとし給ひしは見体よの似合しからぬ肝の太さ妾此儘に

過可きには有ねと我兒多九郎の面よめで今宵は何事も得
 云す依て此後の心を願し我個親子の爲に一塵の功を立て
 何處へも行給ふ可く然無の我家一寸も離す事成難し倍と
 謙しみ給へど云ひて竟此夜は皆諸俱に打臥したり恠て
 多九郎は思ふ由を花に囁にければ花悦びて開は一段
 の大仕事あり汝氣遣ふに及ばず我堅くお菊を守りて再回
 走らす事無しと云ひければ多九郎も心落付き猶又お菊
 を傍はらに招き關宿へ發足よしを告て我家を立出たりし
 が深く心に計る事有ば先づ一個の笹折を索め多くの乾魚
 を此中に入れて關宿へ到りしが豫て養傳寺の和尚日功上
 人も昔年飯高の檀林に在し頃一面の知己あれば彼地に着
 るや否や直ちに養傳寺の庫裡に詣り飯高の多九郎密々告
 參らと可き事有て態々關若に來れり疾く對面をし給はる
 可しと懇ろに云ひ入しかば日功上人訝しくは思ひながら
 聽て閑室に請じ面會なしかれば多九郎寒暖の口誼を陳べ
 攜へ來れる彼乾魚の笹折を出し這は我心斗りの土産なる

に請納め給へかしと叮嚀に差出しければ日功何氣無く請
 頂きて志しの淺からぬを謝しけるが忽ち乾魚の惡臭室内
 に満々ければ不測に思ひ給ひけれども然も無き面色にて
 多九郎御身此地に來りたるは貧道に密々語らふ可き事有
 て詣參りと先聞たるが如何成る事にや速かに語る可し
 と云ひけるに多九郎冷笑つて矢庭に座を進ませ問せ給は
 らず共云でや止む可き某參りたるの壹個の趣向有る事
 成れば先づ其笹折を開きて其概略を知り給ふ可しと云ふ
 面貌の普通へらぬに愈々不審に思ひ聖人彼笹折を打開き
 見るに生鮮しき乾魚ありければ俄然として打驚き且腹立
 汝酒を過て野狐にや狂惑けん茲は是清淨の精舎にて假初
 にも入難き乾魚なるをまとい敷持來りて我を欺く汝が
 舉動こそ異しけれと言ふ多九郎聞も敢ず右手は煙草を取
 り紋麻の湖線取たる壘の敷合へ丁と立今迄の畏り居た
 しも俄かよ形ちを崩して毛すね顯はし一ト際聲を振立て
 上人清淨無垢の精舎へ乾魚を持來りたるを怒り給へども

法脈傳へ給ふ上人は御弟子の中に人の娘に密通して刺
 へ是を教唆し此寺中に隱匿を知りて知らざ顔は打過給ふ
 と其罪果して何れか輕く何れか重からん恠る不正寺なれ
 心酒も參り給ふ可く魚も愛給ふ可しと某しはく察して態
 々持來りたるを他々敷待遇し給ふと心得難しと落付拂つ
 て言ければ上人再回驚きて開の何をか云ふ我寺は申すも
 畏ふけれや無垢に精舎にして宗祖上人の法脈代々に傳へ
 て十八世貧道愚か成共此寺は主個にして藩主の御菩提所
 なるに俗人ども厭可き淫猥なる所業を爲そ者れ有べき畢
 實汝野狐の爲に恠る謔言と吐くにや有ん能く我身を省み
 て正な事を言ひやと言ふを多九郎呵々と打笑ひ某し之
 程に申せども知らざと宣まひ詮術無しことの趣きを告
 げ參らせんに驚き給ふかと期を押して小泉半之丞飯高檀林
 に在て執行中我母故有て人より預り居たる大切の娘を唆
 かし一昨夜飯高を出奔して行術知す夫より手に手を分て
 在所を搜索しは彼等兩人この關若に立かくれ居る趣き仔

細有て借のに聞知り某去斯の如く來りしなれば疾やどり
 くの論を待た速やりに娘を返し給ふ共然無く領主の處
 に懇へて白洲にて砂利を掘みて取戻し中さんが兩個に壹
 つの返答なし給へと威又高よ成て言しりければ上人は斯
 る事有とい勢にも知り給ひぬと昨日養道飯高より俄に立
 歸り來りしは彼去難き用事有ての事成んと未だ問もせ
 ざりまが緒の去筋よて我寺へ來りしよと思ひ給ひなれ
 を罵り騒ぐ多九郎を容め賤し其座を立て養道を一室へ招
 き多九郎が口上云々と語り給ひて其有無を訊問給ふに養
 道之先より此事と聞て心中竊りに驚き居たれ共一昨夜
 俄かに彼所を立出し一旦の色に迷ひてお菊と奸道は爲
 とつれ共深く後悔なしければ此上お菊の請に任せて諸俱
 に走りなば我出家の所業は有定去迎件人の趣きを告る共
 お菊の承諾ざるを知れば假し承諾たる体と示し竊りに用
 事を拵へて檀林を去りいを需めてお菊に約定を違へたる
 なれば何進多九郎が云る如き事譚成ん然れ共お菊と契り

たるは實なれば餘義無く彼と語らひたる件の事柄を打明
 約束の時を違へて彼を出し扱たる事を陳けるよぞ上人熟
 々と聞給ひ然の言へ汝其お菊と契りたるが實事成れば此儘
 に打置難し何れへ成とも立忍び行ひを改めて賦の出家
 桑門とも成りしと豫て父親半左衛門より預り居たる金子
 六拾兩を取出し是を養道に與給ひ疾く此寺を退く可しと
 言ひ給ふにぞ養道返す言葉も無く年来の恵みを謝し身の
 罪科と打罷ひ惜々として養傳寺を立放れければ上人聽て
 多九郎の居たる座敷に來り汝が言葉に就て我自ら養道を
 許問せしに彼に異しき事無にも有ねば只今寺を放逐した
 り恚れに師にも有弟子にも有ぬ養道の事に就き我寺少
 しも關係無れば汝此品を携へ立歸る可く若し又達て貧道
 を相手に取んと成べ我やお菊等を目前に集へて汝の
 言語の伴りなる事を願ひす可しと慈悲忍辱と旨とする上
 人少しく威丈高に言ひければ養道の放逐と聞て評子の抜
 たるにお菊の逃たりと言ふに空事成る身の計較の露顯せ

ん事を恐れ始めの勢ひに似せ彼笹折を持て狐鼠くくと
 養傳寺を立山たれ共思ふ事の暗と成て館堂文の代に
 も成せ空しく足と勞し錢を失ひ恚る詮無き事の有じと登
 人打咄やきつゝ來懸りたる道の邊の一里塚にて端なく養
 道に出逢けれ共彼養傳寺に在てころ相手にもすれ管笠一
 介の雲水に等しき身と成たれを何の甲斐の有んぞ是さへ
 も打咄やられて其儘に走り退んと爲るを養道コヤ〜と
 呼止めて傍に招き汝お菊の爲に我を責て師の坊より多く
 金を奪いんと爲しに其事合期せず空敷立歸らんこと然こ
 る本意無る可く我も亦汝の爲に寺を逐れて一杖の杖一介
 の笠身に齧らそ物無き落胆たる是も亦過世の約束なる
 に汝が面貌と悪事に匹なるの我先に禪越にて聞知たり
 汝若し我と同意て俱に力を竭さんと成べ我汝の爲に今
 日に儂る金儲けの藝を興へんに如何に我意に従ふやと筋
 かに心を素引けり

○第四回

奸詐出で極り無き猿兒の多九郎なれば養道が言語未だ
 終らざるに疾くも中への察きて四邊を窺ひつゝ彼が傍に
 差寄り某今回當地に來りたる事専ら和尚の身の上に関
 涉たれば取も直さば某は和尚の爲の仇敵なれ共其計る處
 太く趣向と變て竟に目的を失ひ和尚やた俄に寺を逐れて
 行處を定め是と云彼と云ひ勢まで功無く寔に詮無き事
 なりと思ふ處に計らざりき和尚某と怨を解て徳に結び
 一個の計較を示して俱に力を竭さんと成ば其爲す處某
 が心に適はば今より仇敵の思ひを翻へし何事ぞ宜し旨
 に背くまじと誓を立て陳けるにぞ養道も又一層聲を低め
 思ひしよりの速なる和尚が潔き挨拶を聞て悦び何事か是
 に如く可き和尚も既に知るゝ如く某原武門に生れ弓馬の
 業を以て名を揚げ家をも起さんと幼穉より心を小て修行
 懈怠無りしに計らずも武道の意地に依りて朋友を殺せし
 かば主君の不興を蒙り切腹して相果可ら處を上人深く憐
 れみ給ひて衣の袖に我を蔵ひ強て助命を請れしかば某

一命全き事を得て夫より圓頂染衣の体と成り君恩師恩に
 酬はんと日夜學寮に眼をさらし正念成佛の工風他事無
 りしに誤まつて和尚の家に寄宿したるお菊と契り交膠の
 語らひを爲すものから茲に迷ひの夢覺て我身を省れれば佛
 門の徒に有まらき舉動なりしと後悔臍を噛み今にして甲
 斐無くせめて俱に走らんと云彼を出し扱て壹人身と消
 めんに如走と不便ながら彼を欺きて竊に逃れ歸りしに
 和尚此件りの事を知つて逸早く我寺に來り言葉を設て
 上人に迫りたるより我身忽ちに寺を逐れ喪家の犬の類と
 成りしに始て世の中の事を思かに偶得難き人間界に生
 を亨あがら空しく桑門隱者と云れ人には木の端の如くに
 疎まれ疎く生涯を経營ん事如何計り朽惜き事成ば憑構ひ
 無き身と成たるを幸ひ和尚若し我に力を併すと成べ我心
 中の機密を打明諸共に金の藝に纏りて活計觀樂思ひの
 儘に消光こと奈に樂しからせやと説諭せけるを多九郎聞
 る取せ笑片まて膝押進め和尚果して斯の如んば和尚と

某假に兄弟の約を定め同じ日に生れざるも誓つて同じ
 日死し緩急俱に援けて骨肉も異ならぬ睦を爲んと言け
 れハ开者一段の事也と養道も悦びて互ひの年齢を照會す
 に多九郎は實曆十一年
 辛巳六月の生れにて今
 年天明二年にハ廿二歳
 また養道の實曆十三年
 癸未二月の生れにて
 多九郎とハ二年劣り廿
 歳なる故多九郎を以て
 兄と爲し養道自ら弟と
 稱し實に兩人近き邊の
 旅宿に上り酒をよめて
 暫く密談せしが何事を
 企てけん此夜多九郎は
 養道を殘し置き豈人立



出でたりしに子刻の鐘を報するよろろ歸り來りてうつく
 と睡も遣せ音信を待居たる養道を見て満面に笑を含みつ
 續て懷中より青個の包ミを取出して和尚御身の勸誘も任

せ我養傳寺に赴き辛く
 忍び入て奪ひ來りたる
 が足下が物語りたる彼
 一品又紛れなきや氣遣
 しけれ疾く打披きて
 檢む可一と言ふに養道
 は先づ多九郎が勞を謝
 して靜に燈火を掻立熱
 をと見居たりしが忽ち
 に小膝を蹴と打ち我養
 又和服に告て盗み出さ
 せんと爲しに全く此品



みて是ハこれ我宗門の僧徒等殊に尊敬して措ざる處の靈
 像にて往昔我宗祖日蓮聖人佛法弘通の爲に千般難行苦
 行せし際其弟子日朗事故有て牢獄に墜れしハ日夜紅涙

に衣の袖と浸し聖人の身の上と案じ煩ひせめては上人の
 像を造りて且暮禮拜し奉らんと牢の土を取て自ら彫刻た
 る我國未曾有の靈像この養傳寺に傳へ來るを知ハ和服の

盡力を以て是を掠奪ひ某之を携へて中山の行者と伴り
 普く諸國を巡歴なさば我宗門に歸依爲る老若男女誰か
 貴人仰ぎ尊まざる者有可き恐れバ加持祈禱に事を托して
 一時に巨利を得ん事遂に掌を指が如しこれ併しながら大
 哥の賜物なりと押頂きて傍へ差置ければ多九郎始終を聞
 て大に悦びしが飽まで好智に功たる者ゆゑ再び養道に
 對ひて和尚此御像に依て容易金銀を掠めん事素より至極
 の趣向成ども凡る神佛を以て利と射んと思はし宜く先づ
 世人の信仰を請るが詮要成バ什麼斯くれば如き計較を施し
 手始めの利益を得て夫より心の儘に諸國を打巡らば萬に
 一つ欺りれぞと云ふ者有まじと養道の耳より口さし寄せ囁
 き示しけるに之養道葉爾打笑みて此謀略極めてよ一恐れ
 ば速かに思ひ立可しとして翌日諸共に此樓を立出何處と
 も無く出行たり語説分頭爰に江戸より上州伊香保の温
 泉場へ行く道筋なる武州栢木村と云處に栢木の長者と稱
 して世々豪富に名高き里正傳左衛門と云ふ者ありけり其家

富たるに委せ男女數十人の奴婢を置き數多の土庫に金
 銀財寶山の如く積貯へ玉を敷て尊と爲し桂と折て薪木と
 爲そ其潜上ある事専ら願主地頭にも超たる當主傳左衛
 門の少壯ころより法華の信者なりければ我佛檀に宗祖
 の直作と言傳ふる日蓮の像を安置し法脈の中に彫刻に
 名を得たる日法の大黒天日親の摩利支天其外法華の守護
 神三拾番神の像を飾り付香を薫き花を供じ日夜禮拜して
 南無妙法蓮華經と唱ふる聲少しも絶る事無し然バ彼宗門
 の法師の高きも低きも皆長者の許へ到り惠を蒙る者只又
 引も切せどかや然るに或る夕邊齡は未だ壯年あり其成有
 て武からぬ一人の沙門長者が門を敲き貧道は法華の行者
 にて諸國の靈場を打廻る者成が縁で長者が慈悲善根を修
 して我宗徒を憐れみ給ふ由を聞渴望し堪えと驚がし奉
 り一椀の齋一夜の宿を借參らせたく斯くは尋訪參らせた
 りと言入けるに長者憐る事日毎の事にて更に珍しとも
 思ひねバ例の如く粗末無やう計らへよと召仕の者に吩咐

け聽て晚餐も濟たりと聞て彼僧を我居間近き所へ請じ寒
 暖の口誼互ひに終りて後ち四方山の話説と成しダ長者の
 彼僧が齡若く其姿色の艶麗なる女兒と雖及び難き趣き
 有る美質に佛門修行として諸國を遊歴すると聞て且感じ
 且痛きて懇ろに待遇抑々聖僧は何國の御方にて又何れの
 園若に在て佛の道に分入り給ひしや苦しからずバ本國姓
 名を名乗給へるしと言ふに彼僧衣の袖を掻合せて仰せ寔
 に辱り無れと貧道の名も無き匹夫にして佛門に入しも父
 母の菩提を消さ爲のみ整ひ師の名を告げ寺門と名乗りな
 ば師の坊の耻辱とも成ぬ可し此義の偏にみ免し給へ進再
 回答へされバ長者も強ては問定然バ打寛たて休息なし給
 へとて其儘奥へ入しかバ彼僧の最前の一室に入て打臥た
 るに翌日の早且も長者が門を慨しく打敲きて案内を
 請ふ者有しかバ老管ら訝しく思ひ其來由と問ふは彼者先
 づ脊の汗を拭ひ息も吻敢言ふやう僕は上總の者にて
 年來品行悪しく父母の勘當を請て此處彼處彷徨者なるが

時の竭たるより不圖善らぬ心を起し曠昔端無く出會た
 る法師に迫りて彼の懐中にしたる路用三拾兩を掠奪ひ僥
 倖と打悦びしに思ひし事空懸めにて此金を得ると等し
 く身中恰も蒸る、如く支骨痛きて堪難きも始は聊か心も
 付せ異しき事に思ひしダ熟々思へバ昨日まで最位かに在
 つる者が俄りに異しき病痾を請しは萬一や掠奪し法師の
 金に事情有る事にの有すやと悟りしを以て試みに件んの
 金を投棄れバ忽ち病痾は忘る、如く又取上れば以前に増
 し苦惱愈々堪難く茲に日來の行ひを顧みれば我身ながら
 も耻かしき哀らぬ業に耽りしを菩薩の方便に依て神僧に
 値遇成しめ僕を懲し給ふに社と二十餘年の非を悟り斯
 く心付上り曠昔の法師に追付て此金返し奉らんと欲か
 に其行術を搜索しに知る者有て告るよ云々の傳り夕
 べ栢木長者の許に一宿を請れたるを見たれば開け御身ダ
 索る法師成可しと言に漸く力を得て故意尋ね參らせたる
 に何卒御身の慈悲を以て權化の再來なる神僧に紹介し給

はらば生々世々の高思ならん嗚呼苦しや堪難やと身悶して撲地と打倒れしにぞ老管ら是を聞て太く打驚き皆諸共長者の前へ出て件んの事を語り這者如何計らひ申さんと口を揃へて懇るるよす長者眉に皺寄つゝ稍わり言ふやう是必老夕べ我家へ来りたる若僧の上に當れり我始めて對面せしが言語應答尋常の法師成老と思をもて展問試みたれ共固く辭て告されは我も強て詰問ざりしが情と光りを理め徳を隠し名僧智識にてや在しけん這者漫なり勿体無し連家内儀に打散動主僧傳左衛門は清浄なる新しき衣服を纏ひ彼僧が只今起出たる一室に到り遙かに飛退りて恭しく目禮に及びしかば彼僧驚きたる面色にて這者何事の有て斯く貧僧を敬ひ給ふにや一宿の報施さへ最る可き貧道こうお禮とも厚く申す可にて候もれをと急に起て傳左衛門を引起さんと爲るに主僧先々と押止め彼僧を上座に居しめ再回頭付て畏るゝ言やう某眼有な

ら真の菩薩を知悉夕邊よりの無禮何を以て打詫奉らん道や有可き然るよ只今壹人の男來つて聖の高徳を稱へ奉るを聞て我も又始めて菩薩の來迎を知り隨喜の涙止り難く生涯の大慶是に過る物有んと彼盜人が奪ひたる金と返さんと殊更に跡を慕ひ來りたる事を物語りければ彼僧微笑て寔は佛法の廣大なる末世の今日と雖斯の如し今何をか隠し申す可き貧道は中山の行者にて名を日道と稱し日本六拾餘州に杖を曳て我宗門に廣宣流布せん爲め名を隠し姿を衰し諸國を徘徊なせけ善を勧め惡を懲し王法佛法に背く無智の頑民を濟度せん爲成に晴昔云々處にて壹人の曲者貧道が懐中せし路用を得んと云にぞ我少しも悪びれを請がよに取せしか共懲る者を此儀打罰となを貧民の害と成且之彼自が罪業を作りて永劫地獄に墮ん事を哀し我感れに壹つの法を施し彼を懲したるのみ彼今幸ひに身の罪を知て佛法の廣大なる事を知後悔せしと成バ法を解て彼を助け得させんに疾く此處へ招き給ふ

可しと言に主僧益々長こみて彼曲者を伴ひければ兇漢彼僧を見て涙を流し昨日奪ひたる金残り無く取出何卒我罪を免して一命を救ひ給へと手を併せて掻口説ければ彼僧の靜に宗旨の工徳莫太なる事と説て懇るに誠め汝一回命に懸て奪ひたる金を我に返さんと思ふが則ち良心に立戻たる成は菩薩も汝が罪を許して改めて此金汝に賜るなれば是を資本として正しき業を復り一期を安かに消光可しと叮嚀反復説諭し彼金を與へければ曲者感涙を拭取て押頂きて懷中に納め彼法師と主僧に暇を告て悦び勇んで立歸りければ主僧の法師が塵に交らぬ清潔なる心に信心眼に銘じ尊敬始め彌増りしが此縛普く近郷近在に響き幼き背に負れ老たる杖に縋り活菩薩を禮拜せんと歩を運ぶ者引も斷き依て日道の人の勤めに任せ加持祈禱を修するに法顯著しく願われしかば皆隨喜渴仰の涙を咽びて信仰日々厚かりけり

○第五回

借も中山の行者日道の主僧傳左衛門の進めに任せ諸人の請に應じて加持祈禱を爲ると不測や奈なる病者と斷絶て癒ざる者無れば信徒日増に多く活菩薩と稱せし程に僅か十日に足せして數百金の得分付たるが日道主僧に對ひ貧道の衰に陳しする如く普く國內を遍歴なし我宗門の廣大無量なるを流布爲しめん所存なれば足下の厚志は棄難けれど翌日は一ト先此地を去り上方筋へ赴く可く疾心底を決したりと言に主僧の傳左衛門の頻に餘波を罪惜を干般に引止めなれど固く承諾ねば是非無く懇るに別れの製宴を開き聖僧既御心を定め給ひしと有止め奉らん様無く此儀別れ奉らんなれ共某父祖三代三法に歸依し偶々聖僧の如き活菩薩に値遇し奉りなから逗留僅かにして疾くも別れ奉らん事頗る遺憾成せめては道の費をも補ひ奉り度這者聊の物ながら御受納め下さる可しと豫て用意を爲たしと思し金五十兩を紙に包み恭しく取出しけるにぞ日道の淺からぬ志しを懇るに

謝し數回辭て聽て懷中に納め貧道猶一方中國を經歷し再
 回關東に松を曳バ必走又來りて今日の厚意に酬ひ申さん
 と言て打臥けるが疾くも翌日に成れば主個を始め家内
 一同へ辭別の挨拶をな
 し飄然として立出るを
 皆諸俱に送り出て茲に
 袂を分ちりて日道
 の拾丁餘りも來りける
 處に忽ち傍らの辻堂の
 裡より顯れ出たる登
 人の男前後を見廻し日
 道の側へ依り奈に和尚
 我言る處に違はせして
 莫大の金を得られたり
 と言ふに日道も又四邊
 を窺ひ伺へ貧道大哥の



妙計に依て中山の行者一偽り加持祈禱を施せしに謀る處
 少しも違ひぞ多くの信者と欺き貳百兩を得たれば是を手
 始めとして普く國內と遍歴爲バ万金を掠め取んこと何の

疑ひか有可き併し御身
 盜賊の体を爲し奪ひし
 金を某の目前へ排列
 涙を流して打詫られる
 光景奈にも真に迫りて
 甚だ感心せりと言ふ彼
 男呵々と打笑ひ某が
 勞少きに有ねど和尚
 座に坐りて殊勝なる聲
 と發し某を教誡せし
 手際り誰の偽物と心付
 く可き天晴名僧智識と
 見れて日來にハ見知り



たりと是さへに與て等しく動と打笑ひたる是此兩人ハ何
 者ぞ則ち前回到畧述せし小泉半之丞の養道と花賣お婆
 お丑の倅多九郎にて閨宿と出る刻み養傳寺の什寶日期作

の靈像を奪ひ取り養道の日道と偽稱し多九郎ハ破落戸と
 成り途にて養道の金を強奪せまに佛罰を請て怒ち悔悟し
 養道の日道へ金を返し法力と示して村郎野耀を欺ら不義

の金銀と取取たるよて有りて二人暫く談合て居たりしが多九郎發道に打對ひ和尚某が計略にて今大金を得たれば宜しく二個に分て我得分を授け給へと言けるに多發道點頭て懐中より貳百兩の金を出し既に分ち與へんと爲しが忽然と思ふやう此多九郎素より放蕩無頼の曲漢なれば到る處奈なる事と爲出し災ひを惹起さんも計り難く依て不復なれ其後亡なふ時我爲め後日後る易く思ふ儘の世の中を經らる可しと茲にますく惡逆無道の計較を思ひ立去氣無き体にて待遇て窮かに多九郎が光景を窺ふに何の心も付ざる容子なれの仕濟したりと思ひ然る二百兩の中を分ち大哥の勢に酬はん金差出を多九郎が笑片傾取んと爲る油斷を狙つて丁と突く發道の器に構れむ可し多九郎後ろへ動と倒るゝ機會に幾千似共見分らぬ深き谷間へ落入たるを透し眺めて莞爾と打笑み歎爲し置氣遣ひ無しと身繕ひして立んと爲し發道俄かに跌腕なま我談つて手振りせりと只管遺憾れ面色して谷を見

詰て居る折柄幾十人とも見分らぬ多くの人聲近付く故見咎められて之妨むと思ひ直して立去りけり話説復舊案下某生爰に下野國鳥山と言ふ處に僻名を天海と稱する稀有れ惡僧有き彼往昔の上總の飯高椋林に在て勤行怠り無く一の側に連る身分成しに色を好み酒を嗜みて品行宜しからざれに竟に彼處と逐れ夫より所々方々を彷徨うち不長徒と交際り果は強盜の首領と成り無任の古寺を撥息として惡逆日々に加りしや或時天海四五個の乾兒を率ひ下總に關宿に到りしとき水懸峠に於て艶麗なる婦人を伴ふ旅の武士を見懸しかば數多れ雲介を語ひ喧嘩と賣て挑と争ちうち彼娘を奪はんと計りしに彼武士意外に手強き故天海携たる鐵砲を以て矢庭に打殺し僥倖と悦びて辛くも彼娘を古寺へ運歸り夫より手段を設けて從ひせんとすれ共女一圓に聞入す強て迫る時は舌を噛切り自ら死せんと爲る景狀を示せしかば了得て天海も備計竭果て如何せんと思ふに此女は是別人成老高瀬五太夫が娘に

て小泉半之丞と縁組の約束したるお花成倍と思ひ付や妻彼が言語に従はせ節義を取て堅く動らざれ共網裏の魚は異成ねべいつ迄も逃る事を得可き竟に彼が爲に後辱を蒙らん事疑ひなし恚れ今にして身を護るの術を施させんべ後悔嗚も及べしと曲々思案なししが素より逞敏女兒成べ忽ちに發狂の体を顯はし或は怒り或は笑ひ又ハ傍の品を取て明りに打碎く杯思ひの儘に舉動しかば偽の發狂とい誰か知可き人皆舌を巻き退歩して言葉を交へんとも爲ず然共媚媚たる美艷なれば奈にもして長醫師に診察せしめ病氣を全治しめて心に從せんと天海も是が爲に胸を割て考へけるが世を忍ぶ強盜の隠れ家へ醫師と迎ふる譯にも成ねば心成せも日と消光しが茲に此天海が股肱耳目の小賊に小船の藤治と云る者小賢しき男成べ一時天海に對ひ囁くや頭領彼女を得給ひて既に一ヶ月及べ共未だ御心に從はざ刺へ發狂と成て千般の戲言を吐く此頃の光景實に言語に絶たり然れ共某

病に思ふに彼夜陰は發狂の体なれ共白晝の幸ひ普通の人に異らねば偽りれ謀事を以て何方へ賣代あし是迄彼の爲に費したる處を補ひ給ふ可しと言けるに今天海實にもと思ひ小船の藤治に命じて忍びくにお花を賣可き事を談合せしめしに神名宿の旅籠屋湯屋と言ふが果を聞て然る疵物とは知らせ五拾兩にて購こんと言ければ天海は再回小船の藤治に命じてお花をよき程に賤し欺きけるにお花の謀界圖に方り天海我を眞の發狂人なりと思ひ計方無く我を賣んと計較なりと思ひし故少しも惡びれ言の任意伴なはれて山寮を立離れけり忽て藤治のお花を將て神名宿の湯屋方へ心ざし或松原まで來りしに路傍にあやしけ成る小屋を立て旅客の足を休め茶を瀾たて活業と爲る老婆が見世よりみやくと呼者あり誰成んと驚きて振返れば是れ是此近邊に於て俠客と稱る瀧の團九郎と言者ありけり藤治斯と見て小腰を纏め慇懃に挨拶するに團九郎お花の艶麗なるを見て是成す女を拵撃來つて何れへ

り賣んと爲る成可しと思ひ藤治も對つて言やう足下が將
て來つる娘は此邊に稀なる艶女なるが足下が育合したる
者にても有か或は例の者なりや事此原因を告よと言ける
に藤治頭を掻て否僕が愛女にも有ず實へ去方に久しく
養なれ居たる者成少しの事故有て常陸淡路へ連行き
五拾兩に身を賣る契約調ひ只今彼が方へ出向く處にて候
と答ふるを聞九郎聞了りて怒ちに思ふやう我れ余歳に及
べども未だ定まる女房無く勿論是放進むる者有とも心よ
邁の事然るに此女世に稀なる容色有て殊に身を賣可き者
と聞バ手に入んこと容易なり候て見バやと思ひ俄に呵
く打笑ひて藤治ハ何とか言此女兒賣物なりと有バ
何方へ賣んも障ハ有せし奈に五拾兩にて某へ賣まじき
や我と足下も知如く獨身にして萬づ不自山成バ乞請て妻
とせんと思へりて他事無く望み懸るに藤治大いに當惑を
し暫く考へしが所詮實と告て謝絶んと思慮し數回後ろを
振返りて親分の某の思入あるに此女を購はんと宜かこ

る幸ひ然らバ御心に任せんと申す可き筈なるに奈にせん
此女陽にハ聊か景容に願れせして何様くの宿病有
り故に今親分の望に任せども却つて御心に違ふ事有んは
必定なれば此義ハ思ひ止り給ふ方然る可らんと畏るく
述しりバ聞九郎訝しく思ひ密かに女の面を見るに少しも
異りたる体なく端眉と打笑て佇立たるさま藤治の言語と
相違すれば情の藤治我にハ思義有バ若し我に賣よと言バ
身の代を得らるまじと思ひ事と投けて欺く成んと思慮し
懐中より五拾兩の金子を取出し是を藤治に與へ此女心
に適へバ是非とも我に賣可しと達ての望みに藤治力無
く某し親分の爲を思へバ實と告て同辭參らすと雖斯
まで乞るれバ奈に共爲難し今は御心に從はん何れへなり
共將て行給へと漸くに納付せしかバ聞九郎大いに悦びた
花を請取て藤治に別れ懸て我家へ立歸り今日途中に於て
小船の藤治に出會ひ此女を賣ひ來れりと乾兒の者へ披露
に及びしかと一同お花に初見參の口誼を述るにお花異の

發狂ならぬ温柔に應答へる体通常の者に變らざ依て愈
々藤治の口上を偽りと思ひ我ながらいしくも購ひ得たり
と聞九郎圓なる眼を細くしてお花を打眺め我奈なる果報
有てか怒る艶女と枕を並ぶる儀俤に遭遇しやと心中恍
惚として何事も拾置き日の暮るを待居たるに漸々太陽も
西山に暮き百鳥も啼へ急死其日も全く暮て疾亥の刻に至
りしかば乾兒の誰彼に課せて我臥所を設けさせ自らお花
の手を引て巫山雲雨の契りを結ばんと爲しに思ひも懸せ
お花をつりと立よと見しや小指の先を食さき我鮮血を
以て面を塗り縁の黒髪を左右にかきさびきて兩手に握り
聞九郎を見て破と睨付たる其顔貌の恐ろしさ恰も悪鬼羅
刹の如く身の毛いよ立計りなればさしもの聞九郎も呀苦
と叫びて後居に控と倒びしが茲に至つて藤治が怒るに耐
言たるを思ひ出し我懼りて五拾兩の大金を無にせりとい
管後悔せしか共今更に術計無れば其翌日より一室へ押込
め交代乾兒の者に看守させせよ又二月餘りを經過たる

が或日聞九郎何方より聞出しけん近來神名宿の宿箱蓋處
なる無住の鬼子母神堂へ法力炳然なる法華の行者來りて
加持祈禱と爲すに堂人として癒ざる者無し當代有難名
僧智嚴なりと人皆敬なせバ試まにお花の新禱を願え若
し病氣の全快せしきにも有せと思ひ伴んの趣きお花にも
言ひ聞せ乾兒持治を從て例の鬼子母神堂へ赴むるせけり

○第六回
案下某生小泉半之丞の發道ハ柏木に於て悪兒多九郎を欺
き竟に谷へ墮落し後日の愛ひを拂ひたりと打歎び夫より
足に任せて所々方々を遍歴なし到る處法華經の功力廣大
なる事を説き傍ら加持祈禱を爲すに如何の事や祈れば
必き應驗有こと比喩バ懸の物に應じ是の形ちに從ふ如く
成バ離か白徒と知可き信肝に銘じて只管敬以尊とける
程に之が爲得る處の米銀山の如く未だ幾許の日を經せし
て既に四五百兩の所得と成りしかバ心中限り無く嬉しく
思ひ此所に三日彼所に五日逗留して彼神名宿の宿箱蓋處

なる鬼子母神堂は無住なる事を聞き又々杖を止めて例の
 祈禱を始めけるに爰にても大いに評判高く老若歩を運
 ぶ者引も切定大体日々二百人より下らざりしが例加持を
 爲すの興まりたる一室
 にて病者の外に絶て出
 入を許さず惣て一日此
 處の供客池の圓光郎の
 女房發狂せし連乾見御
 治が付添此鬼子母神堂
 へ入來り何卒病氣全快
 せる様祈禱を施し給ふ
 可しと言入たるに此日
 の殊に病者の參詣せる
 者多くして六拾番の札
 を得たしりかバ御治の
 お花と俱に頸帯を符籠



び居たる和瀬く我々番に成たり迎案内者の御治を其所へ
 殘し置去來此方へと先に立て一室へ伴なひ行とお花は心
 中に可笑思へと然有ぬ体にて塵に付き然にても法力炳然

なる法師とい奈成る人
 かと筋に上段と驢仰れ
 ば年の儘かに甘酸に過
 せ色白く愛敬付て齋し
 如き美僧宜人端然とし
 て居り居たれば借も飽
 麗成る男も有バ有もの
 かなと猶能く睡を定め
 て熟々見るに道者奈に
 此僧は是別人成せ我良
 人と定りたる小泉半之
 函の猶道なりけれバ呀
 苦言さと思ひ走も走り



寄て衣の袖に取絶りよと計りに打込に予養道も斯と見
 て打撃を暫くの間も出ざりしが稍有てお花に打對ひ借も
 移らしや御身通々開宿へ來られ志操の程も聞え給ひしか

其師の命懸重成バ再回對面爲る事叶はせ給て其日剃髮の
 姿を成り裝程無く飯高の椀林よ赴く可しとの事に依り開
 宿を立出水懸畔まで來りたるに無慮や御身の父御朱に染

て打倒れ居給ひしうバ千般に介抱あしけれ共疾半日も程
 経たる事成は奈にとも爲る能はせ某又師より時限の添
 状を携へたるに依り止を得せ傍の窪き處へ亡體を押し
 れ心計りの回向なして立去しが是必盜賊の所業にて假
 令バ御身を奪ひんと爲しと父御手強く防がれしうバ殺害
 に及びしやも計られず左に右御身の上も氣遣しけれバ其
 儘に飯高へ立越たりしが俄有て更に關宿へ歸り又もや彼
 所を出て身を雲水の行者となし普く諸國を巡歴なす途中
 なるに思ひきや吾妹子の恙無き姿に見ゆんとはとて只管
 奇遇を感下けるにお花のはより落る涙を止て妾御身と過
 世の契有て妹と春の約束は結びしかど其事は只春の夜の
 夢と成て御身關宿へ赴き給ひしと聞き父御の慈愛に依て
 偶面を合したる悦びの未だ盡ざるに忽ち哀れを生じ水
 懸峠とか言所にて數多の曲瀆に捕へられ既に此身を辱し
 めんと爲られしを幸く其場の運れたれ其夫より賊首天海
 の許に抑留せられ幾層の艱難を蒙りたるをも誓て節操を

破らせ云々の偽策もて偽り眠せしも又もや瀧の關九郎に
 身を購ひれ日夜妾を捕へて心に従へと云ふ其事極めて迫
 りしうバ再回發狂の体を示し容易彼を欺きしに近來法力
 炳然成る聖僧この鬼子母神堂に杖を止め多くの病者を救
 ひ給ふ由を聞て關九郎情慾の念偏へに止まらば妾少病狀
 と全治せ想ひを遂んとして乾兒勘治に妾を伴はせ茲へ送
 り來りたれバこそ絶て久しき御身又端無く還近嬉しきに
 付て哀しきと今迄少しも知ざりし父御の盜賊の爲に命を
 縮め給ひしとか若し此縁逸疾く知バ父御の歸りか夫な
 るも掛く可き一刀恨まんものを夫さへに六日の萬蒲と成
 たる妾が木意なきを察去給へかしと言て流る涙瀆の如
 し發道の道理有るお花の述懐を聞て俱に哀れを催せし
 少氣を變て種々に諷め屬し越方行末の緯問もし聞も爲た
 き事瀆の眞砂の眼りも無れど今日は一且何氣無休に立歸
 り御身關九郎又言れんにに妾を病痾中々一日二日の祈禱
 にての痾難くせめての一週も堂籠りして信心懈怠定バ必

定應驗有可しとの事成バ妾身不便と思さバ七日の間
 身の暇を給り彼所へ送り遣り給ひれよと言んにに彼御身
 を飽迄思ふ事成バ果して望の如く成可し然らバ心置無く
 打語らひ參らす共離か異しむ者の有可し御身既に知如
 く未だ數十人の病者彼所に居バ御身登人に太く墮入り
 萬一人に疑之れなバ後日の妨げとも成る可しと細うに言
 諭去謀を含めて再會を約する物からお花の余波惜きこ
 一口に之踏されねど何様養道の歌へに委せ關九郎を謀り
 て首尾能く脱出し爰も來つて行末の事談合せんにに如す
 と僅に思ひ返し詞と番へて一室を辭し聽て乾兒の勘治を
 引供し關九郎の住家へ立歸りける程に先づ養道が法力を
 歎稱し彼が言るま、辨を巧に詩望むに關九郎は委細を聞
 て太く悦び若干の食物を齎せ七日の賄ひに充よ迎此夕邊
 勘治をして重てお花を鬼子母神堂へ送り遣りたれば養道
 も大に悦び賄男七助へ些の鼻藥りを與へて其口と絶し
 め竟に兩人一緒に在て打語らひしが素より相思交情と

言ひ一旦夫婦の契まで爲たる事成バ心駒走りて止ら
 せ折しも有れ軒を旋る夜嵐颯と吹入て枕上の燈火を打消
 たれば道者不意と吹ながら果の如何なる物語と成けん
 増近く秋を送る蟋蟀の聲のみ聞て夜疾や亥中を経過
 たりけり話説分頭茲に瀧の關九郎が乾兒あて養にお花
 を送致來りし彼勘治は此來打續きて仕合熟るく賣なる物
 に疎れしかば然る可き博奕場に臨みて端鏡を乞んと半幣
 の垢付たる女衣袋を纏ひ豆絞りの手拭に面と隠て壹人排
 徊するどころに入洲廻りの小吏提灯を上げて勘治を目送
 りしがアレ召捕よと下知されバ畏りぬと應答も敢ず探
 偵吏の面々手毎に十手振翻かし御誕さうと言ながら前後
 左右を取替けるに不愕然として打聲ろきし勘治と途を失
 ひ忽ちに捕縛れんせししが恰も好月の雲に入て善惡も分
 宅利さへ夕邊の雨又道泥濘て自由の働き成ぬも探索更共
 先を争そひ思ひ走も轉て提灯の火と失ひしかバ勘治得た
 りと一ト聲喚て二三人を突例し雲を霞みと逃去しが道程

一里計り息も叻走走りたる成バ咽喉乾きて堪難く身体又
 勞れたるゆゑ暫く休息せんと傍を見るに豫て案内知り
 たる彼鬼子母神堂なれを基幸ひと思ひ寄に椽の下に潜伏
 て捕亡の小吏を遣り過さんと辛く遠達たるに案の如く大
 勢の小吏勘治と遠懸来りしか共よもや此堂の椽下へ忍び
 入たりとの知されバ皆々爰を走過行くに予叻と一息吐て
 聽て立去んと爲るに異しむ可し奥の方に男女機密に打語
 らお容子手に取る如く聞えし故借の何者り忍びて密會と
 遂るにこそと思ひ打笑つゝ耳引立て聞に女の我親方兼野
 圃九郎が妾にて爰に自個送り來りまお花と思しく又其
 男と云るの活菩薩と尊敬せる法華の修行者日道なりと悟
 りしかバ膝と打て大に驚き彼等向者成迎懸る大喉き所業
 を爲しけん此件りの秘事我耳に入つるぞ幸ひ是より親分
 に告知て諸俱に謀られたる腹癒爲んと怒り呟き漸く外面
 へ道出一散走り飯りて發道お花の始末ク様く云々な
 りと具に注進及びびけるにぞ圃九郎顔色忽ち青くなり

赤く成り圓なる照を逆立しお怒り心頭より起り堪難くや
 有けん秘藏の一刀を腰に帯び勘治を始め四五人の乾兒を
 引連れ揉に揉んで急がせしかバ幾程も無く疾や鬼子母神
 堂の此方迄駈付しかバ圃九郎乾兒に耳打して手筈を定め
 同時ドツと押寄たり案下某生鬼子母神堂の賄男七助の
 宵に發道がお花の事を打明て這は我が未だ關宿に在つる
 時の女房にて兎漢の爲行方知れせ成しが今日不意圃九
 郎の許より病氣新癒と頼まんとて連來り三年ぶりにて選
 遇たれば堂籠りに事托斯の如く伴りて招き寄たりと眞事
 偽事説交て物語り聞するに田舎兒の通常成を深くお花が
 薄命を憐れも少しも疑ふ事無く夫婦久々の對面を悦び
 聞えなどして聽て臥房に入つて麻たりしよ丑三ツ頃と思し
 きに不圖目覺しが腹中迫り堪難により圃九郎行んとて暗
 室をくりぐりながら椽へ出んと爲るに誰共知れず
 四五人の曲漢新々大刀を携え親ひ寄る体成バ嗟苦言て驚
 きしが若や彼等踏込なバ發道お花の爲懸かる可しと思

ひ震へ慄き足も空さまに兩個が臥房に入つて事情の素より
 知る由無れと云々成バ御身等兩人爰に在んは最危かし疾
 く間道より後ろの山に逃給へと手眞似して其状況と語る
 を聞兩個の吃驚起上り楯の圃九郎我輩の謀とを知り深
 夜寄來りて恨みを晴すと覺えたり然り始めより覺語の事
 成せも運るゝ丈の運れて見ん誘給へとて敢ものも取敢せ
 走り出る發道に引續きてお花も裾端折り既に駈出さんと
 爲る處へ飛鳥の如く走り來る圃九郎お花ありと見しかバ
 何りと耐ん猿臂を伸して首筋を引搦ミソレと言て傍へ
 投付れバ乾兒の者共居重りて高手小手に縛むる圃九郎
 の遙かに逃行く發道の跡を追懸たれ共竟に行方を見失し
 がお花を生捕たる事を悦び理無くも引立て我々住居へ運
 來り奈にして體借を晴さんかと思ひしが逆も助け置く可
 り者成ねバ充分に弄殺して腹癒んとお花を庭へ引摺出
 し二本の松の樹へ左右の手を確と結付て身動き成ぬ様に
 爲し備き圃九郎の明光々たる大刀の鞘を拂つてメカク

と進み寄り奈にお花汝何者成バとて我が大恩を思ひせ偽
 狂氣に成て我を欺き加納成せ鬼子母神堂に堂籠りすると
 偽り旅僧と杖を合せて情慾を逞ましうし我面を凌辱るこ
 との甚しきや我故有て此件の事と聞出まゝかバ兩個共
 擲め捕て不義の成敗をささバやと思ひしに彼僧逸早く何
 方へか逃れ行たれば諸俱にころ殺ししせね追付け在所を
 搜出し我々一刀に引導を渡す可けれバ汝壹人先達て黄泉
 の道案内せよと刃をお花の眼先へ翻かして散々に罵り騒
 ぐをね花の密事の顯それたりと悟りし際より命の豫て無
 ものど觀念なし居たれば威丈高に成て脅迫る圃九郎を靜
 給かの道理有に似たれ共抑々小松の麻治に連られ神名宿
 へ赴く途中我身と購給ふ時麻治我病ひ有ことを告が只管
 固辭しかども御身疑て聞入給はず強て五拾金に換られ
 たるの御身が穿鑿の足ざるものにて人を咎むるに據なく
 又我身を金に換たれば心の儘なりとは宜まへぞ开者只御

身堂人の思慮にて妾始りより承諾したるにも非き怨れば
假令何者と密通なしたり逆何ぞ御身の恨みを聞く可き況
て今宵語らひたるは我年來行方を尋居たる我夫あるをや
御身自らの智恵深く思
慮乏しくして却て妾を恨
み給ふは何事ぞやと言
返すを四九郎聞も敢す
確と睨付け汝口賢く言
逃れんと爲すと雖も争
でか死さん我藤治の許
より汝を購ひ去時我未
だ女房無れば此者我に
買よと言し汝其所
に居たれば必ず覺え有
んよしや然無逆五拾兩
の金に換たる汝我が目

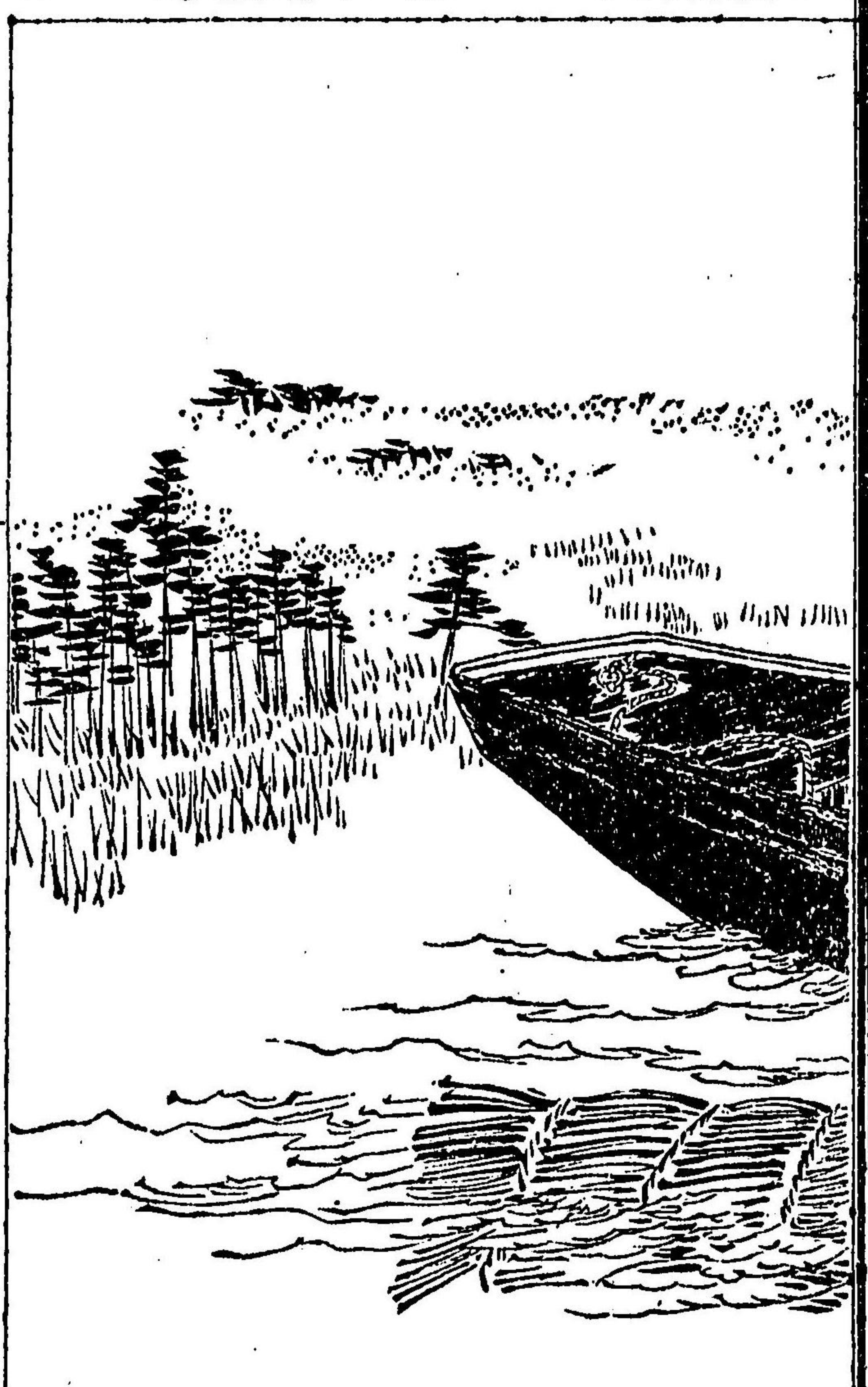
を忍びて不義密通なしながら飽迄道理りうして我意を貫
かんと爲る共如何んぞ誑されん覺悟をせよと詰寄つゝ
泣叫ぶとも事共爲る面部手足の差別無く廿八ヶ所の疵を



被らせしかば可得のお
花今は疾や聲さへも揚
得と聲されたるまゝ一閃
へ苦しみて思絶しん哀
れと首も懸かたれ

○第七回

さて四九郎は思ひの儘
にお花を弄殺みたれば
少しの怒の胸を治め乾
兒の勘悟三八杯言者
に課せて死體を古き袋
に押包と夜の明ぬ間に
急がし立て鳥川へ棄さ



せしが是より先達道ハ賭男七助が報知に依りて慌て忙
さ後の山へ逃んとして一町余り駈出せしに我に積きて逃
れ出たりと思ひしお花の姿も見はせ足音さへ聞えざれば

借とれた花逃後れて愛目や見つる最惜しとは思ひながら詮
術知を忙然として居たる處に忽ち四九郎の聲と思しくて
術妻の疾く捕へたるに奸夫何處へ走らんと爲るやと疾風

の如く退懸来る容子なれば再面打驚き斯ては叶ハトと疾
走に裏里餘り透延しかば漸く追來る聲の遠退たれ其前面
は聞ある鳥川の急流成を進退殆 究よりて遠近を見渡と
に曉の星影にも夫予と知るき辻堂有ければ是屈竟ど
思ひ走り入て裡より戸を閉固め息を殺して窺ひ居たれど
梢と渉る松風と里近き入聲の鶴を聞のみにて絶て退來る
者有ざる故栗立たる毛穴も奮に復りて稍や蘇生なる心地
しついつ途斯て在可き何れなり共落行んと感て辻堂を
立放れ川に沿ふて二三町歩み來るに船柏子可笑解頭
ながら此頃の霖雨に水嵩増て平日よりハ水勢射るが如く
成とも事共爲と此方を投して漕來る一膳の快船有しかば
賽道太く促びて思はせも聲張上げ是は法華の行者よて旅
する者成るが今宵盜賊に出逢ひて辛く一命ハ取留たれ共
身に一錢の貯へ無く前面へ渡らん便無れば御身一点の厚
意をもて某を打乗せ向ひへ渡し給はんには然計りの陽
報無らさや聞分給へかしと數回叫びしに船頭漸くに聞

付て开者いと易き事成ども見らるゝ如き急流成バテ程の
船よて横斷る事ハ覺束なし但し茲より拾丁餘り川下にハ
船寄岸も候へバ夫だに厭ひ給はせバ伴ひ參らせんと云ふ
よ何か倍此河堂ツ越たらんにいと思ふを以て賽道再回聲
揚て獨千般に頼みしかば船頭は感て船漕寄て賽道を打乗
せ疾や川中まで到りしが明行く空に顔見合せて船頭驚き
たる面色しつ端折たる裳と静と下して船端に低頭裏に法
華の行者にて候する者と宣ひしに 某も彼宗門成バ痛ハ
しく思ひ斯ハ誘ひ參らせたる少思ひさや御身の是我が親
子の恩人に在さんとは今迄の無禮は忍辱の佛眼もて御免
し給ふ可く情も何等の事有てか未だ夜深さに此邊傍をバ
呻吟て山賊に出會給ひけん勿体無く候へとて頼り又敵ハ
尙ぶにぞ賽道訝しく思ひ 某は遠國の妙門にして絶て御
身と見知らぬ共何と無く相知る人の如し抑々御身の何處
の人にて我を斯く見知り給ふやと云ふに彼益々身を賤し
めて頼付つゝ 某は此邊に住て漁り爲る力松と申す若

るが我母久敷病に臥て生命且夕と迫りしを遠近人の臨め
ま任せ某し鬼子母神堂へ將て參り陰に依りてさしもの
病恙霜の朝日に向ふが如く全癒侍りしハ全く法力世も著
き活菩薩の恵み成とて束の間も忘れ奉らず親子が身も取
りてハ有難き恩人に在するものを某何とて身忘れ奉ら
んと眞實に始終を物語りしハ賽道春の汗を筋々に拭ひ
て情ハ然る山縁有人とも知らず里諺云ふ一河の流れハ
不測の對面せし事互みに竭ざる縁しよこそ是彼打語り
行く程ハ力松水面を透し眺めて居たりしが阿那思はしの
聖天と云つゝ棹を止て突出さんと爲る体の尋常成ねハ賽
道異しく思ひ是も又等しく河中と覗くに年老くしかも艶
麗なる女の奈成る罪に依て切害せられしや面部手足の差
別なく全身都て繪の如く切さいあみたるを古き儀に押入
投込なりと見えしハ賽道我を忘れて道者無懸ある光景
かちと云ひつゝ再回能見るに紛ふ方あきか花成バ更又
一層の驚きを勝し倍ハ四九郎ハ花を捕へて斯く殘酷く殺

したる成可し遮莫茲もて不意死體の我目に懸りしも能々
深き因縁成んぬ此儘鳥の嘴に懸け魚の餌食よせん事も
不便ありと思ひ慌て、力松の袖を扣へて最離氣成る事
がら此女見知りたる者よ違はずよし人違ひにも爲よ我に
出逢しハ佛縁有る者成よ波のまにハ流し遣ん事忍び難
き事あれバ和服我爲に奈にもして骸と引揚げ然る可き方
ハ非むらせ給はりよく 某少しの貯へ無れど左も右も夫
程の報酬を爲可き疾く我望みを適へ給ふ可しと云ひし
ハ委細打聞て力松合點つ然バ引揚げ參らせんとて疾や
五六間も流れ行たる役死骸ハ乗付け右手を延して漸くに
引上船側に仰向せて自個が濡せし袖を絞りつゝ頻々死骸
の顔差覗き居たりしが賽道ハ去氣無き体して心中に回向
を爲しあがら倍何方への船と着て奔り遣んと暫く考へ居
るよ奇しや此死骸忽ちハ蘇生ハ眼を見抜き物言んとす
れ共疵所の痛み烈しきと以て言語を交る能ハず只雨をど
打泣くよど兩個愕然として目と見合せしハ賽道ハ力松に

嗚きて斯ての暫しも捨置難し身心當り有る何方成り共
 將て行て命を助け給ふ可し道に我先も云りし通り我知
 音に紛ひ無しと云ふも力松首と傾け然宜ふ共尋常人成ぬ
 怠る姿と成たるものを預るものも有まじけれ誰彼とナ
 さんよりい僕が家へ伴ひ参らせ我母共談合して能
 勤り参らせんと云しうバ發道大いに悦び然有は愈々後ろ
 安しと都て力松お打任しける程も力松の船を旋轉てさし
 もの急流を押切り半道計り息も喘ず乘返し川岸に矮少成
 る奇しの草屋有を指さして彼所が則ち我家成バ安堵させ
 給へとて岸へ船を寄と見えしが我人先立つて我家に走り入
 り稍や有つて再回出来り發道を先立せ息吹返したる女
 の骸を安々と小腋よかい込て案内する程に六十余りと見
 ゆる老女門口まで出迎へ恭しく一室を隔て又彼女を見
 て太く驚さるる休かれバ發道さもこそと思ひ是は我俗
 縁の者よて素より奇しき者に非されバ必ず氣遣ひ給ふ
 奇迎言詞に任せて欺むと賺す親子の只發道が法力の奇

駭あるも心酔して菩薩の如く景暮居たれば少しも疑ふ事
 無く是より我家へ止宿て醫師も懇させ只管看病よ心を
 竭せしうバ消さんとせし玉の緒を取留て未だ口の開され
 共日を逐て本復す可き容子されバ力松も世話甲斐有と悦
 びしが商業の爲め重て關宿へ赴く可き用事出来り迎事
 の概略を發道に囁き告げ留守の事共我母に委ね置て出立
 たるが如何しけん十日程絶て音信も無く然るに一夕三十
 路計り成る商人らしき者力松が門口を差覗く事稍や暫ら
 く成しが人有共思はず發道端無く出来りたるを透し見て
 急に馳を返して慌しく駈出し行くを發道不審に思ひ赤
 がら心にも懸ず此夜も例の如くお花が傍に打伏居て力
 松の母熟睡したるを見濟し切は四邊を見廻してお花が側
 に摺寄昨日迄の左右に隔る事の最繁と身絶て物語り
 をし給ひされバ我又強て言葉を發さず打過たりしが今日
 の顔の色の少しの見直したると口をさへ言給へば争で今
 宵こそ委敷事情を訊問参らせんと思ひしお花も去る夜

神名の鬼子母神堂にて俱寐の夢と破られ我の逸早く追れ
 出たれ共身跡より来り給はざれば心よ懸る物のら勉
 ひ取て返したり迎身寸鎌も帯されれば強悍不敵ある輩
 と挑み争そん事石を抱きて深きと臨む後悔有んも計
 られどと斯様く取こしらへて力松船に打乗つ向ひの
 岸よ越んとせしに未だ夫婦の情縁絶す身身に廻り會さ
 ら斯く淺間しと姿と成れし事言れずとも我大方の悟りし
 を以て蘇生られしを幸ひに致し忍びて斯く看護参らせし
 り醫師の功御れ給ふこと煮豆に花咲たる身の悦び之に
 増すもの有ん心強く思ひ給へと低きて言バお花重き枕を
 僅に遷げ然バとよ委も身跡を尋ひ追れ出んと爲しに
 圓九郎の爲に捕へられ怒る姿も成りて捕へ包み鳥川へ投
 入けん然るも又圖らずも身身に救われ此家よ來ること此
 上無き悦こびよ侍れバ疾くにも件んの概茶をも物語り参
 らせんと思ひながら世を忍ぶ身の上故人の聞ん事を恐
 れ疵所の痛も紛らして今迄の故意と告げ参らせざりしと

言ふも最苦し氣おれバ發道もお花が横難を干般に慰さめ
 てしめやか打頼らひ居たるも外面假か又騒がしく大勢
 の足音して此草屋を取懸たる容子成れば疵持足の發道打
 驚かてお花の耳も口差寄せ言語急しく囁やきて枕上なる
 燈火を打消し間に紛れて庭の方へ身をひそめ立出る處へ
 二三人の男入來ると見ぬしが發道ありと呼はり前後左右
 を取附みしにぞ南無三寶と砂を蹴立て連れ走らんと思ひ
 し寄手の摸様絶て圓九郎の類ひ有す頭人と思し武
 士縁取袴割羽織と着したるが赤房の十手を取つてスカ
 スカと進み來り右視左視て忽ち塵振立て故は是神名の宿
 稍盤所ある鬼子母神堂に於て老少の男女を欺き祈禱と号
 して許多の金を騙取りたる中山の行者日道と云る者にし
 て公廳の得手當有しと聞て先夜彼所を脱出たる趣きに付
 探偵の役人を出して嚴重に取糺せし處故膽太くも此家
 へ隠れ居たる始末今日訴へ出たる者有バ斯く召捕に對ひ
 入り速やかに覺悟を定めて領主の廳へ罷り出よと疾や

中儘かに安堵我祈禱の爲に取入るる金銀さよ有ね共業よ
 り奪ひ取たるに有されバ假令領主の廳に出る共聊か恐る
 るよ足すと自ら分別を
 定めて更に一言も出さ
 す恐て頭人の力松の母
 を呼出し此者云々の罪
 有て召捕りたるが何等
 の縁故有て隠蔽置たる
 や真直に白状せよと威
 丈高に成て鞠問あせ共
 老母の只我身の病ひ全
 快たる願ひよと俸力松
 が伴ひ來りし儘我家へ
 養ひ參らせたるのみ何
 事も存じ候はずと恐る



頭人
 力松

恐る答る趣き養道の陳供よ進りされバ頭人の土地の里長
 何某を呼出して老婆を預け養道を追立て馳て立歸り行た
 るよ始めて生たる心地の爲れ共夢に夢みし如よて只管力

松の立歸るを待察すに
 生憎一月も経過たるよ
 そよとの音信も無く家
 よいか花が終日嘯と苦
 しむ体の一ト方成ねば
 宛ら打も置れず彼と言
 ひ是と言登人胸若しく
 日を消光よ養道召捕れ
 てより五日計り立て領
 主の庭より力松の母と
 召れ種々尋問れしは是
 より日毎召事一日
 も透無れば老母大に倦
 勞れて力松を恨み罵り或は養道が上お花が事杯途ふ人毎
 よ言出て深く恨み啣つ光景成バお花養事の數として世に
 存命んとも思はず妾既に團九郎の身に病したらんには斯



迄に心の悩まゆりしを生てあうくの物思ひせんよりの
 寧ろ再回團九郎方へ往き彼が手に罹りて命を棄んに如
 ず殊更我良人の生死存亡是とても定め難さよ頼み無さ浮

世に何樂しくて命を賣る可きと窮心定め一夜主個の老嫗の打臥たるを窺ひ心強くも只受人竟は彼所を立放れ杖を起りて歩め共廿八ヶ所の重産成バ息はづみて路上に打倒れ又起上りての轉びつる難難音ふ計り無も念々心を勵まし道道の成る團九郎の家門口まで兎角して歩行者たりけり

第八回

恠てお花の團九郎の構外は行立少選く室内の景色を窺ふに衆齋睡成たりと思しく寂寥として厨の聲のみ聞えければ時機好と思ひ豫て案内知るる厨の締りて押明辛ふじて道しらんと為たれ共支体數ヶ所の重傷成り打續き精神を腦ますこと多く加旃一里餘り行程杖を便に歩み來りし事故今も息も絶々成り我も有す物に眼も揉地と倒れたる屏響凄涼りしうバ壹人の乾兒忽ち目覺しが何どか悟りけん慌て忙して團九郎の臥房に赴き某等醉睡て前後も知ざりしに只今不覺眠ると同時咽喉の濁

ける儘水一杯喫べん連厨房の方へ赴かんとせしに大勢の捕亡闖入たりと見え夥多の人聲せしかば其聲の措て走り來れり親方此隙は疾く何方へも逃去給ふ可しと息も吐敢す陳ければ團九郎斯と聞て岸破と踢起用意の一刀を掲帯つゝ慌しく後門の方へ走らんと既にして戸口まで出さりしが漸く沈思耳に手を當動靜を聞定むるに誰壹人挑み争ふ音も無く靜閑として亥中の月高く澄昇り野末に集く虫の聲の最幽成のみ成故緒の此奴寢惚耳に何事を聞誤りて我を驚愕せし成んと散々罵罵し自ら紙燭して俱に厨房より立出見るに誰やらん倒れ伏て蓋さ居る者ある故不審つゝ火影に熟々と見れば是は獨日我手に掛て正しく殺戮せし骸を烏川に投入するお花は紛れ無れば且呆れ且畏れ暫時の物も得言ず打視り居たりしにぞお花の然もこそ有めと思ひ徐に頭を擡げ妾身が仁恕に背き刺へ加持祈禱に假托神名の宿禰靈處ある鬼子母神堂に宿りて禮ふ舊夫と密通し故を以て妾身の靈怒に觸れ斯る姿と成

たるの汝に出者汝又返る自ら願しるる災禍成バ絶て憾どし思ひ侍らす借も過夜荒蕪は此身を包れ烏川の急流よ沈められしと迄の覺えしガ其以降の事を知らざるも其夜さり我夫の發道の烈しく妾身は追詰られ此所彼所潜行て團らず彼川の邊りへ出し際折能く醫方松船の漕來るふ出會連れ去んとて妾が骸の漂ふを見出し哀れに思ひて扱け上げ種々に勅りしに命數未だ竭せず有けん其時蘇生けれバ互ひも命を拾ひし如く打悦び聊て船人力松が家よ寄寓て忍やうに醫師を迎へ療治に怠慢ざりし我夫妻道從前諸所に於て法力を顯し病人を救し故活菩薩也と敬ひ稱へるも有と又の鬼を役し神を仕ふ妖術ありと疑者も有由にて早晚公廳の高きに附え追捕嚴ら成しとも知す彼が家より十日餘りを經過し妾身は知れん事を太く氣遣へ共然絆の勞思ひ知で在けるが爰に隠れ居たる事顯れ一日多くの捕亡唐突は踏込み妾身ありとて強て發道と召捕り行き其儘團圓は聚れり怨れば妾も又哭禱身及びて

諸供に團圓を送らる可し遮莫二世迄と盟ひし良人と同じく一緒に至らん事残りて物を思はんよりの中々に心安しと専々法術の音信を待ち口へこそ首も出さね再回捕亡の入り來り連行れん事をのみ請望みたりしに思ふ事の如く我良人の行法の疑敷に依り开を取札さんまでの事に團圓へ繫れたるにて女犯破戒の罪に有ざるありと確乎に聞然バ妾も名乗り出さば敷を敵いて蛇を出し杖を矯て幹を枯す後悔其所お詮をいし思惟し只管身を謹しみ真人が免されて歸り來るを待つ絆一日千秋の心地成れ共奈なる仔細ありや其以降の生死存亡聊かも知る由無く餘りと思腦みし爲め一層の病苦を増し露の命且夕と迫るよつて情々原因と案するよ妾探を破らじとの事ながら先お烏山の強盜は拐掣されて遊女に賣る可りしを妾身五十兩を以て購ひ給ふ夫さへ有に伴て發狂の人と成り飽迄も情無く待遇しるるを猶思し共思し給はず病を癒さ

ん迎鬼子母神堂へ赴し給ふ彼と云是と云事皆妾の爲成しと思ひひがめ任意心なればはぬ迄も報ふ可き由も有可きとさりと心付す夫と邂逅しを悦び彼所に止りし恩を荷ひて思とせず仇を以て報ふ等しく然ればこそあれ皇天の悪しみを請て身身に擗へられ刃の鋒と成るるあり然らば後世の苦患も易らぎ快く佛果も得らる可き罪障願ふ消滅爲す人も有んよ又彼夫に救ひ上られ奈万與見の甲斐無き命を取止めし幸ひよ似て幸ひ成す今若し病苦の爲に三寸息絶て旅魂宙宇に彷徨ふ共戀しと思ふ良人に對しては何等の益無く而して思み深き身身の爲に愈々影護き事限り無れば徒らに坐して死を俟んよりの如す存命て隠れ居たる事を告げ現まよ身身の手を掛らんと壯裏を決し今宵深更に及びしも厭はず斯く参りたり重ね重ね身身の面を汚しふる妾切弄みて息の音を止め鬱憤を晴し給はる可しと始終詳かに説了り脊向になり掌と合せ題目數遍唱へて覺悟を定めたるお花が丈夫の魂に

さしも鬼神をも畏れぬ團九郎あれ共氣を奪われ左右無の打も掛らざりしが稍有て言やう寔に國亂れて忠臣顯われ家食うして孝子出ると汝難難の裡お在ても探を變せず又我乃掛るも幸ひにして蘇生たれば叶はぬ迄も逃延んと計るが大略の事情あるも然り無くして迎も助のらぬ命成る再回我手掛り思みに酬はんと志操貞と云義と云軟弱さ婦人より多く得難き心底を聞我木石に有ぬ身の何て感慨の心を抱のざらん哉右も左も一命と宥め宜しく後來と誠しめて逐拂ふも又珍らしと爲るも足す然れ共一旦改の爲に恥辱を蒙りながら更み故に逢つて説破せられ其色に愛其香にはだされ阿容命を助けしなど事情知らぬ輩の誹謗を請ん事奈もも殘念あれ望みの如く一刀兩斷と爲し欺られざる恨みに酬ふ可し然り有れ見る處風前の燈も異成ぬ汝が光景なるのみ只今事を擧げん無下も大人氣無く我又男なるの所爲に非ず世の胡應に成ん事と畏る故今日より我家の客分となし厚く手當を加へ以前の支体に復

しかば其際充分に切弄みて腹を癒を可し迎馳て乾兒の者と呼立云々の由と語り聞するに最前より主客の問答を大概の問居たれば皆々一義にも及ばずお花を勸りて静かなる一室へ伴ひ其語朝より近郷近在の有る名醫を迎へて法の如く療治を施せしうり里跡よ云ふ薄紙を割ぐが如く二月餘りを経て痕を遺れ心地清々敷平常に少しも變り無し到りしとぞ憇てお花の一日沐浴櫛りて身軀を潔め身軀を更めて主個團九郎の前へ恭く額付けて言やう頼み少の妾が命成しお身が陰氣と國手の庇蔭とよ依て今の全く快癒する身の悦び何事か之よ如ん斯てと妾が志望も適ひ身も面を起さる可ければ何卒今日を限り妾が一命と斷ち本意を透給ふ後は更荒蕪お包て烏川へ投入給ふ可し罪障深き妾切て魚族の腹を肥し今生の善根と爲す可しイサ疾々と際しけるよと團九郎合點茶にも汝が支体以前も復りたる以上の死す可も非ずと其趣きを乾兒の輩よ告げお花を引立て庭の片隅ある處へ赴しめ自個の鏡

近所に索めたる秘藏の名刀を携へ徐歩香しくお花の乾兒が持來りたる荒蕪の上に坐をしめ題目二三遍唱へ合掌して覺悟せし体衰れにも又勇しよりき倍團九郎の一刀を引抜きお花の背後へ廻り觀念せよと言ながら大喝一聲所下たる刃の下に憐む可しお花の頭を滾々と落たりと思ひの外刃の宗を以て打たる成バ一命の極悪無にお花思はずも後を振り返りて此期に及び何とか戯れ給ふと言顔色徒容として少しも變せざる故團九郎の蕭々と打見て數回數息なし我今年四十五歳に及び吉凶難易生死存亡の境に臨みたる事幾回と云辭を知す多くの衆傑にも値遇せしと雖も未だ曾て汝が如き者と見ず我無念既に晴たれば汝是より何方へも身を落着け良人養道に仕ふる共或は他に活業を索むる共余に於て少しも憐む無しと頗る感激したる容子を見て獨にお花と養道が鬼子母神堂にて密會せしを團九郎に告知しる乾兒の勘治進み出て云やう僕幼穉より軍談小説を好み聊り和漢の故事を聞せも此女の如き大

丈夫ある者と聞ず親方故恨を棄て助けんと宣ふこと寔に當然の理とすす可ければ就て僕熟々願ふに親方此邊の俠客にて博奕を以て商業と爲る、故遠近の浮浪日として問ざる者無し然るに未だ家を委する姉娵在さず萬事に事欠こと妙あらで娵身日來之をのみ愛ひ給ふに有すや忌れバ今彼夕罪を宥め娵身の妹分として家事を委させ給ハ、彼貞操を破らざるを悦び恩に感じ、故に依り災を幸ひと變するの吉事有んと何の疑ひかあるべき勿論彼以前の醜態麗さ



る容色ありせば世の人娵身と譏らん事影護り事あれども夫さへ娵身が刃の爲めに數ヶ所の重傷を負ひ身邊渾て疵成ざる所無く見る者誰り娵身として色を好む者と云可

さや能々勘辨有まはしう候へと爽に陳るに満座一同に拍手て勘治微妙すしたり、僕等何れも其通りなりと雷同せしう、團九郎僅ま打合點お花に對ひ汝目前開くが如く我乾兒の者共汝が氣性の優れたるを愛し命を助けて我妹分と奇し家事を任せんと云汝若し此意に従がハ、長く兄妹と成て再



回汝に迫る事有まし奈に承諾やと思ろなる團九郎の詞にか花始めて安堵し親方妾が罪を宥し給ふのみ成す我宿昔の志操を矯す妹として家の政を委ね給はん、有大恩何

の世にの忘る可き妾愚の成共此頭に換ても爲し果ハんと悦ぶ事限り無を見て團九郎其他乾兒の者も皆諸俱に打悦び富夜席を設けて團九郎お花兄妹の盡を取樂せしに

やうに獨言やう我斯る姿にて徘徊させば誰の物有と思ふ者有可しと思ひの外今日同伴と成るる旅人我懐中の金よ眼を著け容子を窺ふ休奈も氣支はしければ彼が熟睡したる裡旅屋を脱出只走り来りさればさしも鋭き眼光を発れたり云つゝ懐中に爲たる壹箇の桐巻を取出し然云へ今にも有れ心着て追來る間敷にも非ず然際ハ勢して功無のみ成す吾一命も危けれハ幸ハ此堂何方へか取隠して用心爲るこそ宜れと其邊此邊見廻しゞ不圖鬼子母神堂と書たる額の有しを見出し是屈竟の窟ありと埃りの目口に入を撰ひ塞鏡函と踏臺として頼裏ハ押入れ是も氣支ふ緯無しと打戯れ放馴たる者成ハ僕て携へ居たりし成可し小ぢ布團を荷物の中より引出し徐々喜連格子を押明て堂裡進み入んと爲るを最前よりの獨言も金子を所持爲ると聞不便に有と此奴と殺し此金を奪ひ先行の路用も充んと肚裏に計劃居たる養道物陰より窺ひ出つ手拭を以て唐突に老人の咽喉を巻付けサツと噓て引締

ければ機ひ可し七竅より鮮血滾々と流れ出眼と見張り齒を切り悶々苦しみて息絶たるハ機間しありける最期あり養道の老人の口に手を當て息の根の止りたるを熟と見認め死骸を傍らへ投遣りソロソロと棟の上へ出脊を高くして四邊を窺ひながら月光よみて見て置たる額の裏を捜すお果して物有故葉剛と笑て押頂き其儘懐中へ確乎と納め直ち走り去んとせしが里蔭より毒を嘗れば血までと云ふ此老人の荷物窺し置しとて何の益無し恚れば彼が衣裳を剥て我又千ヶ寺と姿を變替く所々を經歷るハ後易く又もや金の袋に取著く便宜ども成可しと臆太くも度胸を定めたれと衣類ハ血の爲に染りければ刺こと能はず只其荷物奪ひ夜明かバ六うしおらんと思維しけん未だ夜深さに茲を出て何處共無く逃失けり話説分題爰に飯高樓林の門前住する花賣お婆アお丑ハ吾兒多九郎と謀を指示合し彼を關宿へ赴しめ一廉の金お爲んとて目論見て出し遣りたりし多九郎養傳寺へ詣りしの上人に説伏

られ判らハ養道も寺を逐れてうららん島も無く路用の金若干を引したるのみ何の功も有ず此儘阿容と歸り行ハ母のお丑に口汚く罵れん事を畏れ只管躊躇して在し養道は山會ひ免お彼と異性の兄弟と成り夫より養傳寺の什賣日朝上人の彫刻たる蠟像を掠り取柏木の傳左衛門方に始めて多くの黄金を騙取しが道よて養道に欺りれ千仞の深へ墮落され生死も知ず成たりとい聊かも知されお寄留娘お菊に心を配り領を長くして多九郎お音信を待と待暮せ共そよ吹風の便りも無く其年も暮て明れば天明二年春如月の頃と成ける故今ハ斯と思ひ定めお菊を賣て其身の代の金を奪ひ一期を安らうに經過んと種々に手段を設け居たるお彼お菊の養道と密通なしたお丑が賣んと云事を聞て養道と約束しつ其夜諸供は關宿へ走らんと辛ふじてお丑の家を脱出たれ共是より先養道の既に走りて檀林に在されバ時刻移りても出來らず餘りに思ひ腦みたる折柄生憎多九郎に出會養道容子を聞て養道は出し扱れた

るを恨み憤りしう多九郎が關宿は行て左も右も談合爲可し迎母敷云けるを切ても心の遣に是も又多九郎の歸り來るを心中ハ待明そよ夥の月日を重れども音信絶て夫ありに成行けるにぞ楫と失ふ船も似て寄邊ハ絶て無きものから恚て在んよハ主個のお丑再回悪心を起して我身を沾んと企つ可し然れ共身を寄る知音も有されバ逃去ん事も叶ひ難しと日夜泪に昏て居たりしが倍と思ふやう父上冤罪の科に依て關宿の裡は没れしと聞母傳前と俱に千ヶ寺詣り出さるハ諸國の靈場に到り父の後世の菩提を吊ひ參らせん迎の緯にて古郷を逐れたるにハ非ず常盤村にハ母の兄も在し其外親しき輩も在ハ斯て在んお増ことハ素より成ハ争で信濃へ赴かんと思ひざるよハ有されども道程百里の長途なるに路用無て走らん事難ある可しと今日迄ハ歇止たれど人の一心よハ神佛の冥助も有と聞ものを運を天に任し道々乞食しても一回古郷へ立歸んと漸くハ胸を据筋に便宜を窺ふお丑ハ怒る事有んも知じ

と常に少しの油断も爲されど元來酒を好みて飽くことを
知されば一夜充分も過して熟睡せし隙有しを天の助けと
勇み悦び像て心構へせし衣類を包と爲して忍びやく春
戸へ出し惜ま自備の圃
へ行く察容して静りに
庭へ出彼包を背負つと
毒蛇の脚を逃れたる心
地し喘々急ぐ程中夜の
中五六里と去り脱け歸
朝名も知らぬ宿場も着
たれば只有る茶店も憩
ひ有ぬ偽りを設けて持
來る衣裝一個兩箇を賣
置りの金も換て遠邊に
行て便船を頼みけるに
海上穩よて些の浪風



六十四

も無く乗と其儘一夜過て大江戸へ着船おしけるにぞ茲ま
で來れば最早追人の來る可き心支ひも有まじと思へど世
よわる人の旅寝おらねば都界の地ながら足も止めず直ち

に中仙道と心指板橋を
過て戸田の河原も出し
時り大陽四山に傾き時
急ぐ鳥の聲哀れお聞
へけれバ此河一つ越た
らんよの宿りを索めん
と思惟し馳て渡守の老
翁が居る怪しき小家も
到りて向ふへ渡らん事
多頼のども當時の控に
て黄昏六ッ限り渡船を
停止されバ未だ暮六ッ
を報せされ共人顔も定
かあらぬ彼誰時氣の毒あがら叶ひ難しと情なく云をお菊
の彼が袖も絶りて涙ぐみつと云やう處の掟と宜へば开を
強もごん譯ならねと妾年來故郷を離れ上總の國も旅寐



して思ひざる災厄に逢ひ既に此身を賣れんとしつる銚先
を辛く追れ逃げ來りし者も彼既に跡追掛て來らん事計
り難けれバ身が情けを以て此川だに渡し給ひ生々世

奇さ斯くてお丑の家にて徒らに月日を送らんより妾も
 又關宿も赴きて伊身に逢ひ左も右も成可しと思ひさるゝ
 の非ざりしりと並々成ぬお丑成れば必ず伊身が方へ逃行た
 る成んと推量し急に手
 配りして取押へられな
 べ勞して甲斐無き身の
 破滅と其所等と思ふ故
 彼所へは赴ひうす故郷
 へ志し待りしあり然
 るに過世の縁し深き故
 にや思ひ懸無く再回廻
 り會ふ悦びの戸田の川
 も猶淺く侍りて養道
 も捨られたるを少しも
 恨みたる景容なく物語
 りけるよど養道も只管



頭を掻つゝ我飯高に在りし頃伊身が情も曳れ假寝の夢の
 結びしと雖も圓頂黒衣の身に有まじき事なりと思ひ覺
 る伊身が俱に走らんと宜ひし時干般も押止められど強て

承諾ねば伊身立所も命
 を落し給はん權あるれ
 ば故意と附濟みたる体
 に待遇し某只一人體
 林を脱出しの伊身の身
 に誤り有せじとての事
 されば太く恨み給ひそ
 備も其後の絆今の勸
 解りて荒増の知りた
 れ共此所も居給ふのみ
 絶て思ひ合する事無し
 と甚だ不審るにぞお刺
 せん先づ養道と伴ひ彼草



の屋に入て坐定りて言ふやう妾お丑の家を出て直ぐと便
 船して大江戸に出昔日戸田の川原迄來りしに渡船時遅れ
 たり迎回辭しを漸く願み附之し事よりお丑が追懸け來

りる事夫より陸へ上りて浦和の宿へ急ぐ途中乞食の爲
 に取圍まれらる途を詢短く囁き既に乞食の爲に取らし
 き目に逢んとせし處へ此家の庄園端無く通り懸り彼乞食

を廻ひ拂ひ助けられたる上此家へ伴ひ厚く勤り具たる深
切に感し身の上の一伍一什を告しに茲も又恩者の住居に
て助けたるを思ひ着せ我身を賣りて金よせん云々邊夜
一夜妾に迫りされ共妾固く承諾のすされ一旦助りたる
恩義も有る遊女の外の奉公成り假令奈成腹腹事ありとも
浮心に背りしと首ひしに体能く遠れんとの下心成りし
に主個再回妾を對ひ浮身の詞偽り無れば幸ひは能口わ
り開け益より二里餘りの在方ある家富に船越丈一郎と云
ふ者有て日來美しき側室を索めん迎此邊りへも専々其購
有る遊女を懐ひ給はば側室と成て金綱へ某へ與へ給へ
と首に今更否とも言兼て淫々承諾たれば彼太く悦び今
朝風さよ我身を縛り縛り置て何處へか出行たるよぞ這の
忝しと思ひ竊りに此家へ出て街道へ出んとせし抑々
此村の不思議の處にて行共く別の道へ出る能はず廻り
廻りて元の處に到る事不思義に熟々思へば斯る處成
べこと妾一人廻し置て出さる成ん惚れれば越ひ越を返ると

も出口に必ず用意在て容易に走る事能はず取押へられ
ん事疑ひなし然らば徒らに勞するのみ退も又得策に非ず
左も右も彼が首語に任せ其方構み至りてのち陸術の幾ら
も有可しと思ひ直して一人歸り来るを待居さるる浮身の
尋ね來給ひしに神佛の冥助とや云ふ可き奈もして此家
主個と談合し妾が身の上を救ひ給ふ可しと泪片手に勸
りけるに妾發道の聞こと毎に打驚き只管お菊が薄命ある
を歎じ我斯の如く廻り逢たる上へ速うに主個を謀り浮身
とバ救ひ取可し迎お菊と出し拔き一人關宿へ歸りさるの
ち惡漢多九郎尋ね來りし事より今日までの事共聞して惡
きと思ふ事い皆其餘の殘らず是故えりやう打詰らひ
居さる折うら主個の男歸り來り斯と見るより端無く入
す暫く外面に在て景容を窺ひ顧て一室へ入來り發道を見
て不審げよ浮身の何國の者にて又奈ある事情有て我家に
來り此女と親しく勸誘り給ふよや蓋の擗竹の柱も我爲の
據ある主個の家には有ぬも憚らず踏込給ふの無漫あり

と苦り切て云ふを發道の打笑ひ何様事の原因を知されば
不審と思ふも尤あれども某の信州松本の藩士あるが先
年之ある妹お菊を惡漢に拐擧され何方へ行しか行方知す
然るに我父日來此事と打嘆き汝奈もして妹の在所を尋
ね速りに立返る可しと達ての情願も我も又只一人の妹ゆ
る望むところと國を出普く諸國を探索させ共少しの便り
も有されば余義なく一旦歸國せんと今日計らす茲に來り
思ひ懸かく妹は遂に一伍一什の疾脚たり汝我を漫ざりと
云ども斷りなく他人の娘を止宿せしめ剩へ之を遊女と
して身の代を食んとする其罪何れり重く何れり輕き
汝の返答により此儘に拾取難し言譯有る言へ聞ん奈に
如何と詰寄たる發道の最益と詞よさしもの惡漢も荒肝ひ
しがれとむね突き夫のと計り口籠りぬ

○第拾壹回

て忍らば躊躇さ辭の轉末知らせ給ふ上の隠しても詮無き
事成り現在に陳す可し逆我計劃の程を發道に打明し既よ
某先刻に彼方へ赴き追付け當人を召連れ來らんと云ひ
置手付の金若干を受取り來れ共浮身が妹兒も在しかば某
が自儘の擧動も成り難ければ其辭の思ひ止りす可し恠
れば速のよ女兒を將て歸り給ふ共一言の異存あしと頭を
疊に擗付け只管打託たるに手強あらんと思ひたる曲者の
然程も有す一言の元元屈服せしに妾堵したる發道のい
菊と顔見合せ密か打笑み居りしが聽て懐中より小判三
枚と取出し汝一旦惡意を狭むと雖も我詞を聞て直ちに
過りを改めたる心底奈も殊勝されば恨みの恨み思ひ思
我妹乞食の爲に辱められんとせしを助りさるる必竟汝
が思みされば遣者聊ちがら恩義に酬ゆる我所存ありと
曲者の前へ差付しかば彼の益々身を縮めて左右無くの受
納せず數回言れて漸くに取納めしが斯く示談の整ふ上の
故き恨みの有るも有す互ひの胸も暗たれば今宵の越止

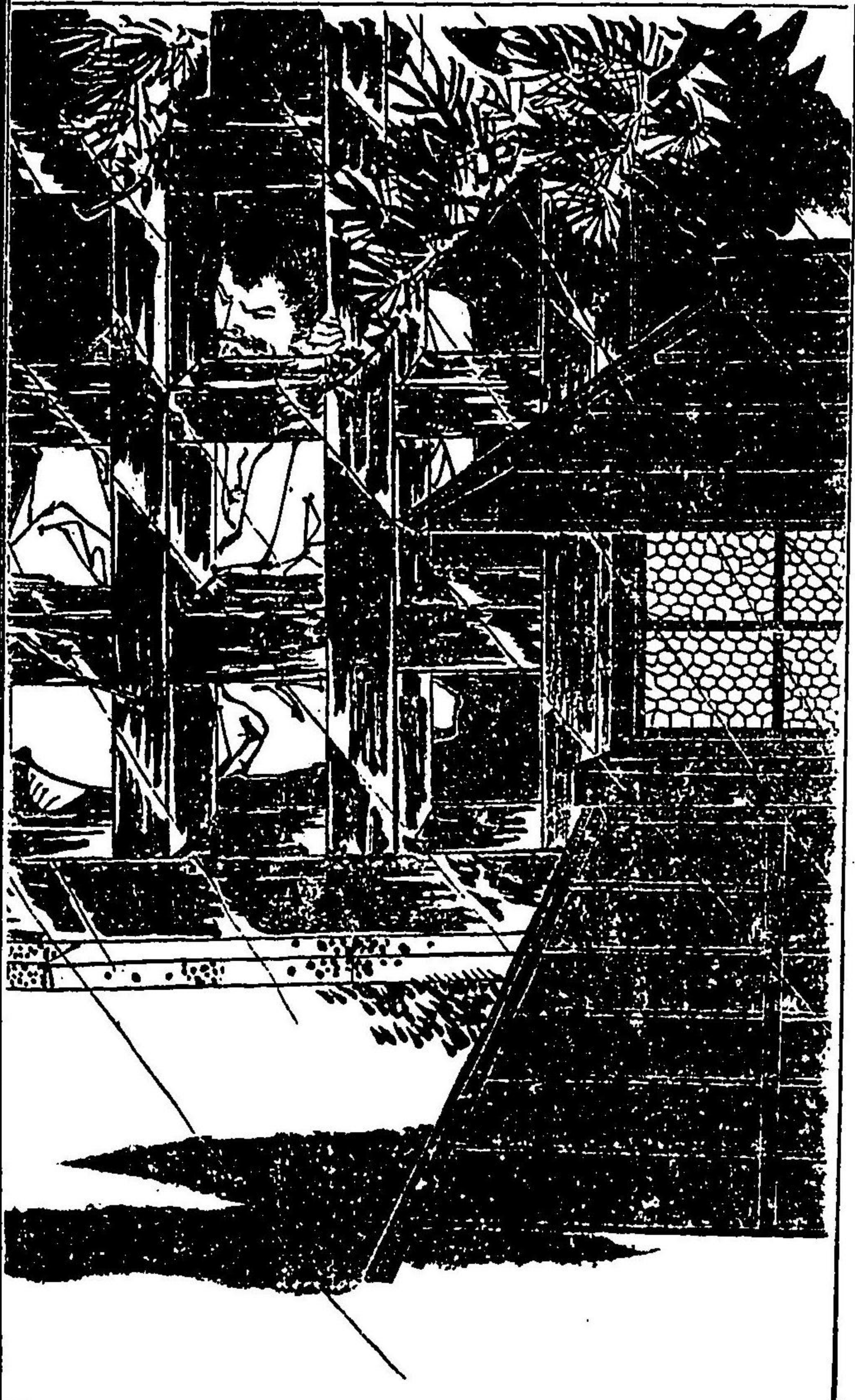
め参らせ某が心計り待遇し参らせんと眞實立て云ふも悪からず養道の曲者の云ふがまよゝ急ぐ旅行に有ぬ故お菊も其心を留さしめ竟に兩人此家より泊せし其詰朝養道不圖風邪の心地ありとて打伏したるまゝ枕上らず只の旅籠とも違ひ少しの油断も出来さればお菊が心勞大方成す枕邊に在て頻りに看病すに主個も驚きたる体にて近き透りの醫師を迎へ種々手を竭したる故二三日もして全く癒はれればお菊の悦び一ト方成す徳て養道の是らの爲めにお菊が眼も合さで晝夜看護をさる志操の忝さ餘り或日主個の留主を幸ひとお菊に打對ひて云ふやう我病ひも大方快く最早幾干成すして茲を立去らん事必定あれど行先も又旅あるは身の上難を逃げてより早十日餘りの旅寐あるに雑々の串出来て心を安んずる間も無く浴をもし給はぬと思へり然るに先此主個が直隣なる家にて風呂を焚されれば入り来らんと云ひて其まゝ出行きたるを知れば主個が歸り来らば其間も身彼所に行き譯

を断して頼みなば聞入る事や有可き拵へて見給へと云ければお菊も心得て専々主個の歸り来るを待つに既にし陽の暮んとするころ主個の一小樽の濁酒と一種の有竹の皮に包みて急がしく歸り来り候先陳しが如く隣りの風呂へ出行きたるに相知る者に出逢ひ圖らずも馳走も成りて是見給へ此種々を賞ひ来れり身も幸ひ病苦も薄らぎ給ふと思しきま喰べ給ふて心遣りとも爲し給へと云ひつゝ呵々と打笑ふにぞ養道も同じく打笑て我々兩個不思議なる事にて身の方止り斯く懸る成る待遇しと請る事何の悦びの之に如く可き最早病苦も怠りたれば日ならず故里へ旅立可しと思ふもつけ妹お菊の先に身も知らるゝ如く上綱を立てより十日餘り浴さへ爲て有ことの物置ければ苦しめらす隣家も頼みて切てハ身体の垢をも落させんと思へり此事如何思ひ給ふと問ふに主個並び打笑ひ何の差支の有可き我身斯て有れば聊かも心配無く疾く彼所に赴き我名を告て頼み聞え給へしと答

へければお菊の馳て養道が喫べる藥を七輪に懸置さるが今少しもて濁く可ければ能ころも喫べ給へ杯言ひ置ソコに出行きたる跡の主個と養道の兩人のみ自餘の人も居ねば種々の物語り又時刻を移し居りし主個の形ちを改めて養道に打對ひ斯く唐突又陳さん事最無禮なる事ながら身と始めて對面せし時信州松本の藩士にてお菊の爲に兄なり迎お菊の行衛と尋ねんと父の命も依り故郷を出給ひしと聞て候何の思慮も無く寔に然る事やと思ひ只管身の罪を説て我家に止め参らせられ共情々身身兩人の素振りを見るゝ其の兄妹に非ず必ず事情有る妹脊の中成る可く且女兒の飽迄身身を慕へども身身却て彼を厭ひ給ふ心根を推計れば必定彼が身より多くの黄金を引出さんと計り給ふに紛れ有らず蛇の道に蛇こそ知れ僕年來夥多の女を拐擄し其身の代を奪ひて渡世と爲し居れり争で心の付ざる可き地と打櫓の外ゝ共僕が見る所少しも違ふまじ依りて身身愈々彼女兒を以て金

に扱ふと思ひ給はゞ幸ひ此邊より程遠からぬ敷村と云る處に船越丈一郎と云ふ者有り家も巨万の財を積み土庫夥多建列ね奴婢共多く召仕へども素是種多の棟梁なれば年四十路を越たれ共未だ定まる妻も無く閨房淋しさに堪す此頃妾を得んと索め給ふて身の代に請ふが儘成共大略二百兩の出す可しと云り遣者彼女兒を遊女に成るを思し際僕既に此縁を結らす只家富の家まで妾を欲しと云バ赴き給ふ可しと進めたるに只今委敷告たる敷村の船越が事あり怨れば身だも承諾さ給はゞ現在二百兩も有付可し奈も承諾給ふやと思ひ懸無き主個が圖星の言葉又養道心中に驚きしが其事無きも有すお花が生死も未だ分明显せず殊も又もや法華の行者と云ひ立愚夫愚婦を欺きて多くの金を食らんと思へばお菊を伴ないん事安きに似て安うらず然速彼が眞實も捨難く奈よせましと取つ置つ考へて居たる折柄主個の詞の意外の幸ひ不便に有れどもお菊を欺き丈一郎の妾と成バ路用夥多を得るのみ成す足

手摺ひを攘ふありと情け無くも心と決し前後を見廻して
 數回打合頭汝既に我心腹を知る上の我が身の上の勿論彼
 が事をも語り聞す可し是より飯高も居たる始めより今
 日迄の絆と残らず物詰
 り世も便り無さ彼が絆
 不便との思へ共大功と
 成す者の細証を顧みず
 との故人の金言我前途
 猶大い成る志望有るよ
 彼を伴なひなば萬事の
 障りと成可く此絆にの
 み心を腦みたるに聞
 が如きの寔な意外の幸
 ひ成ば欺さ透して事能
 く綱へんふ知らず奈か
 る疎り事と以て容易く



賺す事を得可さや故思ふ處有バ語り聞せよと言ふも主個
 茫爾り打笑ひ養道の耳よ口寄せ稍や暫く噤さ示し合ふ所
 へ浩る事との卵の毛の先中置く露計りも知らされバ裕し

果て心地晴々敷成る
 に打悦びイッくとし
 て歸り來るお刺斯とも
 知ず偶々の事成バ太く
 時刻後れたりと寤て坐
 り付バ此方の兩人も然
 有ぬ面持して漸しを他
 り粉らし此夜の何事も
 せで各個枕に就きたり
 しが真夜中過る頃より
 養道最苦氣する聲にて
 傍らに眠りたるお菊を
 揺起し宵の程の然迄に
 も覺えざりしが胸の痛み堪難く心地死ねべく思ふありと



苦氣も言けれバお菊の驚きて其儘起出種々を勦りつゝ昨
 日今日の病苦も薄らぎ給ふとの顔の色もて大方の悟ら

れ悦びて侍りしは倍の未だ癒給ふより有さうしうとて早
 泪組て脊中を療り勦る程に主個も目覺て出來り諸俱に介
 抱して其夜の少しも睡ます斯て其詰朝早速醫者を迎えて

新之橋

迄暫く身の暇を給はる様夫等の事も聞え上げ給ずしてハ
 萬づも便無る可しと云ふ云でもの緯とい思へ共了得も言
 ひも懲されねバ主個丈一郎に對ひ件んの概略を物語るに
 船越の暫く頭を傾け言
 るる處道理は適へハ何
 迎違背す可き遮莫身
 の代を渡したる上ハ我
 側室あるも手放ち遣ん
 事ハ我も於て心成す思
 へハ婦人夫等の事を願
 ふと成ハ養道ぬしハ今
 日より我家へ迎へ療養
 を加へ給はハ然らバ當
 人の情願も適ひ我も
 心を勞する事無く双方
 是も増す分別ハ有まじ



さう奈も承諾給ふやと言ひけるよぞ養道ハ菊ハ深く悦び
 て竟に一札と引換てお菊が身の代を請取り密りよ三十兩
 の金を善四郎に與へて此私事の口を留たり借此日善四郎

ハ船越の首尾充分に整
 ひ養道も又彼所へ引取
 り療養するとの事成バ
 彼が携へ来る千ヶ寺の
 荷物を持来り之を養道
 に遞與し此回の緯思ひ
 の外斯く滞り無く行
 届きたる互ひの悦び之
 に過す怨れバ豫て宣ふ
 如く五十日過て心地全
 く成たりと披露し茲を
 立て何處へ赴き給ふ共
 一度ハ我家へも立寄せ
 給へちと懇ろも聞え置て立歸りけるが丈一郎ハお菊が艶
 麗なる寄置に心動きて今宵の裡にも枕を代さんと思へ共
 彼養道が病苦の忘る迄ハ枕席を俱にし難しと最前に望み



るを承諾たる上ハ押付たる業も出来ず然れど我家へ止
 め置バ遠くらす望みを遂ん事何迎違ふ可き先づハ養道
 を刺り深切を冠せて彼が心を結ぶ可しと母屋續きある

一室を養道が菊兩人の部屋と定め朝夕の事懇ろに待遇し
 ければお菊の件金の金を以て善四郎が方まで掛りたる醫
 師の某を招きて藥用の手當と施せしに素是か菊を欺くた
 め言合せたる事成れば然も無き絆も有願に眉打皺め最重
 重敷言あして日々の様に incoming たるが凡そ十日餘り過て
 養道の病ひも少しの快き容子にお菊の大きに悦び妾が
 一遍の誠届きてさしもの大病漸く全癒り給ふ事此上
 の悦びや有可き藥の代費したる金の僅りに償ふ事も
 安なる可ければ傍身の休以前に復しなば兎も角も言こし
 らへ彼償ひだに調達さし給はば我身肌を汚されずして事
 止む可くと思へりと言ふ養道は物を言はず打合點く居
 たりしが此日八州の役人渡邊金彌と云る者一人の小盜賊
 を捕へ來りしがいつも捕物の有時に此船越の家も來り止
 宿する事度な成れば丈一郎の其筋の免許を得て屋敷裡へ
 假りの牢を補理へ役人滞在中の發者を其處へ入置有りし
 とぞ恠て金彌の今日生捕り來りたるの年格廿四五まで何

其我本名を知られたる人成ば最頼母し抑々誰人よと云
 へば養道は再回格子へ口を寄せ借も久しや去年神名の鬼
 子母神堂にて汝我女房のお花を連れ來りし爲め圖らさ面
 會したる悦びの忽ち悲しみに成り或夜團九郎襲ひ來りて
 われり兩入と逐ふ事最烈しく辛ふじて其場を遁れ出たる其
 頃日道と呼たる行者の名の養道あるを見忘れたりや
 と云ひければ勘治も太く驚き寔に不思議の對面あり連互
 ひに奇遇を感じたりしが箱や在て養道が云く御身奈成る
 罪を犯して斯く捕はるの身の上と成りたるや知り難け
 れど今若く我爲にお花の成行さを語りあべに酬ひとしと
 我此牢を打破り御身を還く走らせん奈に承引やと云ける
 よ勘治大ひに悦び開の最安事なり彼女兒の上の千般
 の物語り有て今猶存命て存せど中々頼云ひ場と可き絆
 成ねば左右某しを救ひ出し給ふ可し其上にて始終と告げ
 參らと可しと云ければ養道しばし打合點き廳で一室へ
 歸り來りて彼お菊が身の代貳百兩餘りの金を確乎と肌

様一併有可き者ある由奴婢等の噂を聞養道の何氣なく
 端居して外面を眺め居たるは彼惡漢細付のまゝ通り掛る
 を見るは何と無く見知れる者の如く成る心中千般も考へ
 しや確と小膝を打ち我神名宿も於て加持祈禱を爲し時彼
 奴お花を連れ來りしよて見覺え有る團九郎の乾兒勘治も相
 違なし我不意なく彼に逢たるこそ幸ひ奈もして彼も近
 付き尋ねなば容易くお花の行方をも問出す事有可しと思
 ひ何氣無き体にて日の昏方を待つに夕刻より結陰りて宵
 過る程は雨振出し雷光凄まじかりければ忍ぶに屈竟あり
 と悦びお菊が疑息を窺ひ筋りに一室を脱出し夫と無く開
 置たる假牢の邊りへ忍び寄るも裡に曲者只一人睡りも
 遣す何事あり嘘を居たれば養道の折好しと思ひつ、靜か
 に格子に取付き奈に勘治我を見忘れりやと小聲あ言ふ
 よ曲者の訝しき面持ちにて透し見れ共鳥羽玉の闇夜成ば
 少しも分らず然れ共我名を呼びたれば必ず知音成可しと
 思ひ同下く小聲にて生憎空の暗ければ誰人あるか分らね

よ結び付け借奈もして牢を破らんかと思へ共鍵を奪ん
 の容易からず幸ひ雨風の強ければ鑿を以て格子を切破り
 助け出す可しと思ひ靜りに遠方近方を捜し索むるは恰
 好番匠の置忘れしと思しき一挺の鑿を見出しければ天の
 與えど打悦び再回假牢の邊りへ行き件人の鑿と勘治へ渡
 しければ勘治大ひに悦び程無く格子二子間を切破り外面
 へ出たれど番人の目覺ん事も覺束無れば此邊りも長居せ
 んは危ふしとて竟に兩入塙を乗越外面へ逃れ出共僅五六
 町も付す逃行きて儘に心を休め借お花の行方如何よと
 訊問ければ勘治は彼夜團九郎のお花を捕へて廿八ヶ所の
 疵を負せし事より養道が召捕れたる後生死存亡の知れ
 ざるより再回團九郎方へ尋ね來り手は掛りて相果んど云
 ふ殊勝なる心底も感じて團九郎が妹分どおし同宿へ旅籠
 を披きお花茶屋と呼たる事共打語りければ養道の又放
 免の後ろ所々へ遍歴を以前飯高にて契りたるお菊も廻
 り合ひ事情合て彼を船越方へ伴ひ逗留中なる由眞偽事取

交せ物語りお花今に世に存命居たらんに何卒面會致ま
たく然らば是より直ち神名宿へ赴く可しと相談を極め
けり

○第拾三回

恠て發道ハ善四郎引別れ急ハしく道を賣りて行程又二
日過て神名宿へ到着せまかバ先づ身裝を飾り直ちお花
茶屋を尋ぬるの宿の中央にて廣大なる結構ありと聞夫
是かど見渡ると浩る可しとい露知らざりしか花の大勢の
奴婢は何事やらん差圖して居たりしが不圖外方と眺む
れば道者什麼年來戀慕ふ發道が我門に立て御の容子と窺
ひ居たるにぞ夢か現かど慌て惑ひ走り出んとて心付き
我身を顧みれば身おは數々所の刀痕有て昔しの面影少し
も無く我身ながら恥かしと思ふ者をいかに事情を知りて
在すとも端無く出んの愛想も竭ぬ可しと急々登人の婢女
又囁み汝彼所へ行て御出家とば伴ひ參らせ云ふ計りて
奥の離れへ伴ひ參らせよと吩咐しがバ婢女は心得て走り

せ一お後の主個委敷事柄を断せしを以て大方の知ると雖
御身再團圓九郎方へ到り給ひしとい香曉の夢も想の
す必定世を果みて自ら身を投じ川の底に沈みたりとの
み思ひしが斯く健くなる光景を見る事日來の憂りしも忘
るゝ斗り行末も又頼母しと云ければお花も又限り無く打
泣て一伍一什を物語り然るても妾團圓九郎が妹と成り茲
に在る緋と知て尋ね來給ひしか夫共又知くと思へも來
懸り給ひまり餘り不審しくころと云ふと發道ハ此回些
の事情在て武州敷村に在し頃團圓九郎が乾兒勘治が八州役
人渡邊金彌の手に捕へらる船越の假半又繋れたるを救ひ
彼の口より洩て御身の在所を知りしなりなど彼一句は一
句閑談最もしめやか成りし恠てお花は主個が義心と以て
其身を助け呉たるのみ成す此後發道と添送る共少しも
云分無しと云ひ専ら發道の所在をも尋ね居る事を断し恠
れバ今日より此家より給ふて是より後の緋兎も角も斗
り給へ尤團圓九郎此頃商業の事繁くて野州足利へ赴きた

出車卒附に侍れ共此家の主個の中し付て候得者疾く
此方へお通り下さる可しと叮嚀に陳ける故發道心中は諸
のお花我姿を見て斯く誘ふもの成んど聊さかも辭を彼の
云るまゝ奥まりたる處へ伴なれ入りしかば坐敷の光景
を見るに床の光起が極彩色の花鳥の一幅と掛け古銅の
花活は早咲の高瀬を挿し疊六疊斗り敷たる最清潔なる一
室ありけり倍暫く經て新敷衣の音さやくとして入來る
者有れば之定めてお花成可しと思ひ久し振の對面成る發
道も景容を改め扣へ居るゝ纏て襖を明てお花靜か又席に
就きしがさ一日來は大丈夫の魂ひよて男と磨く瀧野圓
九郎も舌を卷て畏れたる程の者成共了得此道は格別の
物にて嬉しさ哀しさ取交て頭も擡げ得る發道の豫て彼勘
治よりお花が事詳らか又聞居たれば更に驚きたる面色
も無く我不意團圓又繋ぐれしより御身が緋如何も心よ
懸り罪免されて逐れ一時直さま力松の方と音信れたるよ
彼親子ハ勿論御身も在ぬに肝潰れ慨しく其次第を尋問

れ共此月中洗はは歸り來る可ければ對面して萬づ打語り
かバ世渡りの便宜をも得給ふ可く思ふに優たる頼母敷漢
もて侍りて云ひければ發道も差向き是と云ふ工風も出す
懐中へのお菊が身の代の金夥多有は幸ひ暫く足を止め其
内宜敷に就て身の振方を定めんとお花の詞も從ひ逗留す
る事との成ぬ倍一日發道の餘り又引籠り居て心地例成す
連登人近き邊りお立出邊方近所漫歩して有けるも誰共知
れぬ登人の大男天庭又發道の後へ廻り襟首取て引寄な
がら双の眼を活と見開き明るさ所又は王法有て之と糺し
唇さ處は神明有て之を罰す汝肝太くも此邊りに徘徊し
て何等の惡事を工せんと爲るやと云ひければ發道呆れ賦
ひて言句も出ざりしが素より武察も疎からせ小力有物故
取れたる腕を振切り何者かと振返りて見るは是への發と
關宿と出て柏木の傳左衛門方へ到り一時専ら惡事を語ら
ひたる飯高の多九郎成ば這者好らぬ奴又出會たりとい思
ひながら彼強惡成共其質惡鈍なれば我一計を施し容易く

味方は引入て詞敵さども爲す可く且柏木の山中にて我儘
 くも日朝の作ある宗祖の靈像の彼が懐中より有る忘れ其儘
 誤まつて谷へ蹴落したれば邂逅しころ幸ひ若し今に所持
 して有れば欺きて奪ひ返
 そ可しと疾心中も其邊
 を考へつゝ然有ぬ面色
 して多九郎又打對ひ足
 下の恨むの道理成共過
 きたる事今更云ふ
 も甲斐無き事成べ我身
 の悪きい説もせん先づ
 何寄りには差當る大金設
 けの目論見有れば故き遺
 恨を水として一ト肩入
 んと思はれおは舊の好
 身又身の誤りを償ふ種

よも爲可しと打笑ながら敢喰せば案は違はぬ多九郎が
 金設けと聞よりも疾や今迄の機幕又打換りたる容子と辯
 ひ我油断して和尙の爲に千俵の爲へ蹴落され三丈餘りの



大蛇に此身の半身呑れ
 し處折能く多くの狩人
 が慙くを見るより鉄砲
 みて彼大蛇を打殺去我
 一命と救はれし最も
 不思議の身の傍伴ひ夫
 のみ成る身の裡が聊か
 疵を蒙らぬと餘りも奇
 しき事なりと人も語れ
 ば我身も思ひ爰も情も
 考へれば和尙と始めて
 關宿にて悪事を工む手
 始めは養傳寺へ忍び入
 り春び取たる靈像を懐中
 小爲し故あるりと程經て思ひ當
 りしかバ夫より以降千般の憂難に達たれども彼一品
 の肌身を放さる見らるゝ如く定めたる商業の無き哀し



よの海松の如くお揺垂たる拾壹ツを纏ふのみ三回の飯も
 充分は腹に入ねば斯く瘦たりと首ひつゝ阿々と打笑へば
 養道は仕済したりと同じく打笑み我の爰より遠からぬ神

名宿のお花茶屋に逗留すれは直ぐは御身を彼所へ伴なひ
 何かの事を談合す可し誘給へとして先立ちけしは多九郎
 の竟に養道の跡お付きお花茶屋へ来りけるにぞ養道の竊
 かよお花お對ひ彼か成立を詞急しく囁き示さ此夜お花よ
 も引合せたるのち懐中の金若干を出して新敷衣裝を調へ
 之を多九郎に懸へせ自個が友の体言ひなし内外の思ひ
 くを塞ぎしが是より兩人如何なる事を企てしかお花も未
 だ知らざりし程早くも十四日經て主個圓九郎歸り来りけ
 きお花の養道が圓らせも乾兒勘治を救ひて我身存命居
 る事を聞尋ね来りたる始終と其後召仕ひの男多九郎と
 云者更來りて兩人共今猶逗留する趣きを語りしに圓九
 郎斯くと明て打合點然らば今宵改めて養道主従に面會
 す可しとて表坐敷の廣やか成處へ酒肴處狭き迄排列茲へ
 招きけれは養道と多九郎のお花に誘ひれて其席に連なり
 又圓九郎のお花が貞心と養心の厚きお愛て妹分とあり
 たる絆を告げ御身斯く尋ね来り給ふ上此所よりお花

と俱に商業と營み給ふ共又外に望み給ふ事有は彼と將て
 立去り給ふ共深澤御身兩人の思ふ儘なる可しと深切なる
 一言は養道は思はずも頭を下げ某等肝太くも御身の眼を
 掠め損せ成る舉動有しも御心に掛給はせお花を厚く惠
 み給ふ上お今又某が事迄然程と思さる、絆共感謝と堪
 せ何れの時か恩惠お願ひ奉らん恚れは宜ふ旨お就て此
 所より止る共或ひはお花と伴ひ投す方へ赴くとも致す可き
 少當然ながら未だお花も告されば彼も知らざれ共此頃
 不圖思ひ付く事の有りて一度上総の國お立越志去を果
 したく女兒を伴ひ參らん事も影護ければ願ぬところ今暫
 く彼の此儘お茲に在しめ異日某再回來る迄御預り下さ
 らば此上の悦びは之有まじと陳けれは圓九郎快く承諾
 て我方に任意登年三ヶ月此儘お在んども少しも厭ふ處
 無く却て商業の助けと成ればお花の上の心に懸給ふな某
 儘かに預りたりと言ふも養道も打悦び此夜は多く酒を
 過して養道多九郎の兩人共枕も着さしが其翌日養道の

お花は對ひ我思ふ由云々と語り翌日は一旦爰を立て上總
 の知首と赴く可し然らば遠からば吉左右を告げ越すか或
 は我自ら來りて御身と伴ひ行可きと暫しが程待給へと云
 へばお花合點て御身彼地へ行て渡世の道と索め給ふと有
 を妾強ちお止め參らそよは有ねと上總へ道の程も近
 からぬと聞く此所は在して圓九郎とも商議し給ひ彼
 所へ行くと優る事無らそやと云ひけるを養道は耳も懸
 せ何程御身の詞一理無きよ有ねと我の素より佛よ仕ふ
 る身成り世渡りの道なり道外へ何をか索めん到底行法を
 修し病人を救ひ夫等の謝物を得て口を養ふに過せ然るは
 茲にての難に我が加持祈禱と請たる者も多く又我が公庭
 に捕へられたる始末を知て爪弾きたる者も有可し依て再
 回法を修し共諸人の寄依せざれば何を以て後來の目的を
 定む可き御身も既に知らる、通り上總は宗門の信者軒
 を並ぶる所成れば萬事は就て都合能く日成を望みを達せ
 んこと目前成るの故のり斯る次第成れば此回彼所へ立越

んと多九郎が云ふに任せ我も又豫て此心有れば惜こそ假
 んと思ひ立たるありと詞を巧く陳けれはお花も然りて
 止め得る然程に迄思ひ込と給ひ何れ止め參らせんいつ
 にても有れ御身の儘は旅立給ふ可しと承引しかば養道の
 二三日が間に身装をこしらへ大寺の聖人法用にて旅行す
 る体は拵且ち多九郎の又夫が供人の姿と成り愈々明日此
 表を登程する旨お花より圓九郎お云せければ此夕邊再回
 盛んある響應を祈して兩個の首途と祝せしとぞ併疾くも
 詰朝と成りける故養道多九郎の兩人は改めて圓九郎と面
 會さし長らく厄介と成りたる禮と兼てお花の事と厚く頼
 み聞え多九郎と伴ひ神名宿と立去りたるは實は是天明三
 年夏五月朔日の朝旦ありけり話説復舊情も養道が病苦を
 癒さんとして船越が妾と成り我が身を貳百兩の金に換た
 る例のお菊は窓打雨の凄敷も不斗目を醒し側らを差眼
 くに養道の在ざれば不密く思ひながら剛へ行し成可しと
 深く心お止せ居ざりしが程立共歸り來らば雨の益々烈

しくて登人在んも心細さよ自ら紙燭して圓へ赴ひ共養道の在ざるも忽然と疑惑を生か心中に訝るやう此二三日分て心地煩しどて打臥て居給ひしうバ夜と分て看病なしたるも今宵は少し苦痛の薄らぎたりと宜ふも心安堵我にも有でいざた無く睡りたるの我身思か成る故成れば詮無き事ながら然るにても尋常の身体も在さず殊更面も向難き大雨を犯して何國へ行き給ふ可きやと取つ置つ考へしが不圖心付きて我身を預りたる我身の身の代を疊に善四郎より送り越したる養道が千日寺詣で用ひたる包みの裡を改むるも少し服紗は其儘有れ共金の早晩空蟬の空敷からど成りし故借りと俄かに吃驚仰天餘りの事涙も出き呆れて暫く伏沈みまが斯く迄心を竭す物薄情も欺きて我身を茲へ捨行くとい類ひ稀なる男の心底遠くは行まじ追懸て恨みの存分ヲ、然うじやと軟弱さ娘も一生懸命逆立て齒を切り小襦さりと引擽げ外面方投して出んと爲るを誰共知れず登人の男貌ひ寄て遮り止

め遣じと斗り舞めきたり

○第拾四回

お菊の只今外面へ走り出發道が踪を遺懸んとしたる處へ忽ち人有りて遮り止めしかば何者ありやと之を見るに是輒ち主固船越丈一郎ありけり其時船越の袖切りに逃んど悶くお菊を確と抱き止めて云ふやう御身何事の出来て斯く慌しく何處へ行んとし給ふや抑々過日御身が兄御又身の代と與え我側室と成したるからの其夜直は驚蕪の襖を重ね比翼の語らひも爲可りしし御身云々の願事有て兄御の病苦を看護り全癒たる後みこそ宜ふは是只御身が都合のみにて我も聊か益無きも御身が飽麗なるも心迷ひ其心を失はせむ逆夫さへ許またる我心榮と知り給ひい夫程の酬ひは有可きも兄御と呼取り今日迄養ふ惠みも思ひを剩へ病者を捨置き遁き去らんとし給ふは心を通ひす人有て始めより我と欺り給ひいか宵曉の寐さめも忘れお慕ふ真心と哀れと思さやと舞と抱き付て干股

お孫口説をね菊熱々聞て嗟嘆堪ははるり落る涙を拭ひて敷成ぬ妾の身を大枚の黄金に換えいと惜と思ひ給ふを我身の勝手をのみ云募りて御心に従はず夫のみ成す今宵遁れ去らんとせしは寔お人たるの道お非ず恨み給ふは道理なれ共抑々妾の養道が妹ありとい根も無き空事にて實に上總に在しころ二世の固めをあしたる我良人ありしよ不意事出来て互ひに暫く引別れ侍りに縁盡き過日圓らまもたぐり會頼母しく思ひける裡我良人病ひ起りて苦痛甚敷價高き薬りを服用せざれば容易くは癒難しと醫師の云ふが哀しきも奈にもして良人の病苦を救いんと彼善四郎もて御身を偽り側室と成て金調へしし只夫のみの事に侍りしよ斯く迄探を守る妾を捨置き今宵身の代の金持ちて良人は何方へか遁れ行しを只今心付たる儘跡追ひ懸んどあしつる成れば御身此上の情に妾をして養道が跡を逐しめ恨みの限り云して給ひらむ其時お菊が御心よ從ひ參らせんよ此緯叶へ給ひる可いと云ひしよぞ主固

太く驚き借りの左様にて有けるか左の聊かも知ざりしが然開バ猶更御身をばなして遣り難し遮莫養道が薄情なる我さへも悪しと思へば御身の怒り給ふの少しも無理成すと思へば時を移さ追手を懸て引戻さんよ其時御身恨みの限りを宜ふ可しと云つ、慌しく人を呼ぶよ老僕と思しき者喘ぎく出来り借も宵の程雨の強かりしまゝ見廻り嚴重に付置たるも何れの隙も切破りけん預りの盗人勸治とやらん半の格子を鑿もて引切り逃げ失ていゝ如何せんと思も吐敢て訴へければ船越と再回驚き這の抑奈もどて手の舞足の踏處も覺えず罵り騒がしが養道が事は我私の手成れ共八州役人より預りたる盗人を逃しては後難斗り難しと俄か多の人数を蒐集め彼は何處へ是の彼處へ銘々も部署して二三拾人慌しく追跡せしむる騒動大方成ざりし夜明おるも皆諸共歸り來り僕等仰又任せて隈無く捜し索めたれ共勸治の素より養道が在所少しも分らず無據一旦戻り來りたりと云けるよぞ船越

額を病して頻り太息吐きたるが今と成て詮方無れば
 老僕某へお菊の見守りを委ね置き我身は直様三三人の供
 人を召連八州役人が出役先へ赴き件んの趣きを訴ふるよ
 先づ幾包みか竊かよ賄
 賂を送り媚を献じて哀
 訴及びしかば思ひの
 外に片付て此事の内聞
 と成り先づ安堵したる
 もの、お菊の養道も捨
 られたるを恨み憤り
 一旦彼を尋ね出し恨み
 を云ざる限りの假令奈
 程迫る共心よに従はせ
 若又开を悪しと思ひ給
 はい速かよ一命を絶ち
 給ふ可しと晝夜涙よ昏



れ偏ら發狂し人異成されば強て共云ひ兼て只管胸を
 焦けるが此丈一郎元來惡敷病ひ有て年毎伊香保草津
 の勿論名立る温泉に浴して身体を養ふ事有りければ今年

先亦箱根も赴きて浴み
 爲んと思ひ夫よ一ても
 彼お菊を程能く透して
 彼地へ伴ひ心長く口説
 き裕さバやとて一夜お
 菊が住む一室も詣り四
 方山の断しの序も言ふ
 やう寒やらん御身が夫
 養道の此地を逃げ失せ
 て直ち江戸へ走り夫
 より武藏相模路も入り
 現も鎌倉も在て加持祈
 禱を爲し居たるを故有
 て養道と知り我身へ竊も告る者有り然れ共道程二三十里
 も有れば捕へ来る事由も成を然れ共養道が在所の分明
 せざる程の御身我心も従はせと宣ふもさかしく依て某



今度箱根の浴を説く御身共は彼地も赴き養道を捕えて
 御身の爲も遺恨を晴さより我身の情願をも適へつ可く
 思ふなるも御身の奈も思ひ給ふと云ふお賢けれ共船越が

詞の巧なると養道も常々鎌倉へ赴き法力を願し宗門の繁昌を求めんなど云ひ居たる事さへ有バ丈一郎の詞を偽りありとい知らせ心中は大に悦び御身果して我が爲養道を捕へ日來の無念を晴し給はは是は優る恵みいひはせ妾は異存の無ものを左も右も伴ひ給へかしと一讀も及ばす承諾し船越の仕濟したりと悦び夫より支度何くれと爲して供人二三人とお菊を駕乗せ其日江戸へ出て品川より箱根に赴きしが二三日過て湯本に詣り茲に一週日入浴して有るを菊の素より浴みせるを好むより有りぞ只船越が詞を聞て鎌倉と養道が在る事を知り一日も疾く彼地へ到らんと思へバ日毎催促すこと急されども素より根も無き事成バ左右言ひ紛らせて有けるが餘りも等閑りさば菊怪しめて我を疑ふ可し然らバ却て毛を吹き疵を索むるの類ひ成バ如き鎌倉へ立越更に分別を廻らして我が情慾を遂せんものと漸く心定め竟る箱根を立て焚木こる鎌倉の地入り雪の下と云る處の旅店澤瀉屋

と云るは投宿さつ故郷と人を走らせて養道が容子を聞合せるも然る事知らずと云ふ者のみ少しの手懸りも有まど云は素よりの事ながら強く困じたる面色して丈一郎のお菊を招き御身も既お知る、如く我斯までに種々心を探して養道の所在を穿鑿せれ共今も於て聊も便り無く都界の地と違ひ慙る邊土なれば養道此邊りも在て加持新禱を事とせれば此地も在者誰か其噂を聞ざる者有ん然るを誰も問ても知ずと云ひ正しく赴へり來らぬ成る可しとれバ御身も思ひ絶て左も右も葦村へ立歸り猶ゆるやかに彼が所在を尋たさふ可しと本意なげ言聞るもぞお菊の然とも心は細しみる事も徒ら成り養道を尋ね可き手掛りも絶たりと聞哀しき限り無く搦て加へて今い憚る處なしとて丈一郎が挑まん事も方見くて顔も撞げ得せ只雨々と打泣居たるを船越の慰さめんとや思ひけん宿の女は事由を告て酒肴と處せさまで取寄せ我も吞又お菊もすゝめ忍びやか云ふやう難く御身養道等の奸計

よ掛られ我家へ來り給ひ我妾となるの約を結びて黄金を養道と渡したる以上の御身と養道の間假令何なる事有とも开者我開る可き事ならは恚れバ其夜より御身と襖を俱よせん事素よりのひなれ共御身養道が病病本復する迄猶豫せよと云るの最趣ありとい思ひ其心を無為を請がまへ其望みを許し其のち養道が影を隠せし時御身の宣ふ通り都て聊かも其心よ背かま又今此地も來りたるも事皆御身が上と懸りて夥多の費へを服ひせ彼と云ひ是と云ひ我真心れ厚き事御身も心付れし成ん恚れば養道の行方を知何を限りと定む可き未遠なる年月をなとて此儘も打過さる可き御身も又物の哀れを知ぬ人にも在とまじき又斯斗り慕ふ我心を露ほども可愛しとい思ひ給ひせや心強さも限りあれと圓ある目涙をうかめ播口説たる一伍一什絶て理あしども聞えざればお菊はいとゞ哀一と増り向と岩間の苔清水涌返る胸を定めて漸くに頭を撞げ數さらぬ妾とバ然程迄も事給ひ給ふ御心の淺のらぬ

を何とて鬼々しく思嫌ふ可き然り有れ養道も委まて告せぬらせたる如く彼養道とは假初ならせ云代したる中なるを彼人情無くも妾と捨おき身代を奪ひて逃去りたる虎狼も等しき無情さをいかで現在りも恥めたる後御身が御心も從こんど固く誓ひまわらせたるに其事もはや叶いぬバ何までか我私しの都合を主張り御身の御心も悖る可き今番ころ左も右も御身の自由と成侍らんお是迄つらかりし我無情を許し給へかしと涙の間と泣々承諾しかバ丈一郎の暫く明たる口の塞ぐ術も知れ餘りの事の添けなさに手の舞足の踏ところを覺えせ笑片付けて合點のみ稍有てお菊も對ひ奈に資金の勢ひと借るとい言へ我身の斯く老たるさへ有る悪き病ひ持身の人並に御身を戀ふこと無かし方見くも思されんが是只御身の不仕合と思ひ請らぬ我煩惱の熱をだん覺させて給へらば千々の資金も何か惜む可き御身の爲あしや命と失ふとも絶て遺憾とい思ひ侍らせなど打語らふ間も早晩其日も暮たれば萬づの後よ

物語らんと今日何りにかゝせらる未だ入湯さへ爲され
 此間一風呂入来らん御身の此邊を取片付け臥房の
 用意したまへかしと丈一郎の氣もそゝる勇ま立つ、手拭
 引下げ湯殿の方へ出てゆく後見送りて彼お菊の懐へく
 し溜涙ワット斗りに伏轉び我偽りの言語ども悟り給はず
 いそぐと悦び給ふ痛ましき妾か死しる事を聞たまひ
 情け無き舉動といと強う惡ませ給へんと思へば空恐ろ
 しくの思ひ侍れども何か付て拒み參らせしも始めより
 御身お肌と任せんとし思ひ侍らば養道が病苦と救ひ黄金
 をだに調へなば其時身の暇を請ひ請けんと思ひしか千
 種又言語と飾りて言進れたるも養道が奸計は降り斯く成
 果る上り今更な奈よ其詮術なく所詮生甲斐なき世も存命
 て愛を見んよりいと今宵此家を這れいでて淵川へ身を投
 と侍る所存あるに重ねく、欺き奉りたる此身の科は草
 の蔭より詫奉つらん免させ給へど打泣つゝ暫し後ろ
 影を伏拜み纏て竊かに家の後ろへ出て素足のまゝ五六町

逃延げつ只有る松の根方より到り豫て淵川へ身を投んと
 覺悟しされ共土地の案内と知らぬ身のいつまでも呻吟居
 て若し船越が追手に出會へば最早言逃るゝ術有まざる借と
 思案を定め我へ来りたる腰帯を解き松の枝に打かけて忽
 ち縋れ死せんと爲しかと只養道に置去れたる巧惜さ胸お
 満て思ひ栗がたく雨々と打泣居たりしが思ひ直しけん泪
 を掻拭ひ彼腰帯の端を取り題目數十遍唱へも敢ず既今
 縋れ死なんど爲る所へ年齢四十路餘りの大男脚半合羽に
 身を扮裝長き脇差を指し手に小田原提灯を引下つゝ來懸
 りしが此体と見て懐々まく駭奇矢庭よお菊と止め危き命
 を救ふや否や又此者の何者あるか开者後々又説分るを見
 給ふ可し

第十五回

郎ども頼を交へて此辭を語り出今一月も音沙汰無れば遠
 くも有ぬ所故此方より使ひを立安否を問バやぞと打語り
 居たる裡一日の事成とか年齢四十路餘りにして身の裡都
 て肥太りたる旅の修行者お花茶屋に入來り今宵一泊の造
 作あつかりたまと言ければ奴婢等さし心得て奥の間へ
 通し常の旅人を扱ふ如く待遇居たりしが此日お花は些の
 用有て近村お赴き此辭を知らず歸り來りて奴婢より修行
 者の宿りたる事を聞然バ妾も挨拶へ行バやとて高坏へ菓
 子を盛たるを右手お持ち静々修行者の居間へ赴んどす
 る折も彼修行者は奴婢の知せに依り入浴せんとや思ひ
 けん手拭片手に持ち障子を開きたる途端圍らすもお花と
 顔見合せまが何とやらん訝しげに早々案内する方へ過ぎ
 去行しにお花も又誰かお見覺え有る者なれば故意聲をも
 掛す暫く彼の方を打眺め居たりしが何事を思ひ出しか忽
 ち面色と變じ慌しく主個圍九郎の身邊より走り寄傍り妾
 環てより御身も聞け置さる我父五太夫を開宿の水掛味

ひて殺害し妾を拵撃て飽までも愛目を見せたる烏山の強
 賊天海が云々の扮且よて今夜我家ども知す泊り合せて侍
 るを只今正しく見請侍れば何卒日來の情け助太刀して敵
 と討せ給る可しと思ふ吐敢と囁き示し疾立上らんとせし
 かば圍九郎委細を聞て女の扱き所存よて一途にはやるハ
 道理おれ共彼今我家よ來りし上りの綱の中の魚牢の中の
 獸に異からず討取ん事容易ければ少しも疑ぐ可らすとて
 猶能くお花を開し纏て乾兒のうち近來便り來りし早乘
 長次と招き我仔細有て久しく烏山の天海を慕へども縁無
 くして未だ一回も面會せず然るも今宵旅の修行者よ扮且
 我家へ泊りたる者は骨格尋常の人物成せ殊に寄り我尋ぬ
 る所ハ天海なるやも知れず汝は常陸の生れとさゝ暫く聞
 徒よ立交り居たりと聞若し其天海を存じ居バ我爲に彼和
 尚を此坐敷へ伴ひ來らんやと云に長次暫く考えしが信と
 打合頭某故郷に在し時賭博の賭場よて二三度出會さる
 事有ば其面を知れり依て彼修行者の居間へ赴き親方の宣

ふに違はず寔の天海成んよの某誘ひ來り申す可しと早
 く修行者の一室へ出行たれバ團九郎の纏てお花も謀を
 言合め身輕よ扮且せ襖の彼方へ忍せ置其身の秘藏の脇差
 と傍よ引付然有ぬ面
 色して待居たる處へ彼
 長次が先に立以前の修
 行者を連れ來り團九郎に
 打對ひ某親方の仰よ
 依り只今修行者よ對面
 せし御身が鑑定の通
 り此御方ころ鳥山の天
 海大人よてはと言けれ
 ば天海景容を正し某
 の他方の浮浪素より名
 も無き者あるよ奈よし
 て卑名と足下に知れけ



ん某こそ鳥山の天海ありと恭しく陳けるも團九郎
 も借ひお花の言葉の如く此奴こそ五大夫を殺害したる曲
 者よて有しかと思ふ心を色にも出さざる是も亦姓名を告げ

修の團九郎

口誦を陳べ某久く
 豪傑の高名を聞欣慕に
 絶ざりしに天斗らずも
 今日茲よ足下と會する
 事を得せしめたる實よ
 是千歳の一遇悦び何事
 う之に加へん先づ打寛
 ぎて一盞を傾たまへ
 とて長次其他の奴婢へ
 吩咐種々の美肴を出し
 最町時を饗應けれバ天
 海も團九郎が客を愛と
 るの深意無きと感じ心
 を酔し蓋さを引受報酬時を移し或は笑ひ或は唄ひ稍暫く
 酒宴の興を添居たりしが團九郎最酔たる面色して和尙の
 是天下の豪傑よして我輩常よ高名と聞て皆其威風よ忍



る殊更武藝に長じ文道も明るく夥多の國々とも經歷せら
 れいと聞バ定めて珍らしき物語の澤山名も可し何も坐興
 よ些斗り語り出給はずやと教峻す元來此天海豪傑無道

の曲者おて酒を喚事蛇の如く着を食ふ事鯨の如く剩へ酒
僻悪く人を人とも思ひされば始めころ包み隠しもそれ薄
次に酒氣を帯て前後を背みる迄も無く呵々と打笑ひ家
主箇の首ん處都て某の身に當ら定英雄豪傑ちど稱立
給んは中々片腹痛事おれ共 元來武藝を好み分て
火術を練磨して彼百歩の外に柳の葉を貫く養由基が弓勢
よ劣る可は思は虚空を翔る鳥あり共恐らくい 某が筒
先を逃る、能のせ故に鉄砲をもて人を害め高くと言れぬ
事ながら昔關宿水掛峠をて云々の事を働か其娘を奪ひ取
たれども惜む可し彼物犯し女故竟る五十兩の金よ買
せたりし小悪や彼使ひ立たる者の爲も其金を奪はれ何
方へ逃走しや夫限り行方知す恠れを彼其女を賣たるや或
ハ又諸共よ走りたるや今よ於て聊かも便り知れ老年來種
々の事を爲しつれ共餘程までも遺憾と思ひし事いひはせ
と酒が言する高調子身の舊惡を物語り口おもせりして居
たりしかば篇と聞果圃九郎疾や充分の證據を得てお花が

斷しよ符合されば助太刀おて討せんものと豫て合圖を
定めけん手よ取上げたる 蓋を後の襖へ投付れど丁ど開
きし此方よりお花はけり、敷拵且て怒りの面色朱を漲ぎ珍
ら一や鳥山の天海汝我父を水掛峠よ於て殺害なし我を誘
拵して情を遠んどせしよ妾父が討れる事い知ざりしか
ど汝に辱められん事を哀しと熊と發狂の体よもてあし汝
を欺き身を逃れ仔細有て此家の主箇圃九郎の妹と成しが
是より先夫半之丞よめぐり合汝が父よ殺害せし事をさし、
無念心隨い徹し奈で汝に出會なし恨みの一太刀授けん
ものも明暮祈りし甲斐有て思ひ懸無く今日今宵茲よ汝よ
見えしし言繼の浮水侵量華の花もち待たる此身の幸い適
いぬ處と觀念おし頭を渡せと置りつ、刀を閃りと引抜て
衝立上るよ天海の餘りの事よ呆れつて言葉も出さず居た
り一が過 其嗚呼がましや汝等如き瘦腕よて討て取る、
天海ならぬ居ぬと廣言吐き用意の懷刀さりと引抜
き寄り切んと身捕へたる壹人の男も耻かしき天然不思議

の女丈夫が鱈を討んと勢ひ込め壹人の身お見上る斗り
肥太りたる惡僧が怒り立ちたる光景は宛然龍虎の争ひも斯
やと思ふ互ひの權勢優り劣らぬ二箇の側よは主箇圃九郎
が是も又胸差取て身捕へち一若やお花の手に餘らば助太
刀なさんと詰寄るよ然でも夥多の乾兒の面々事こそ起れ
出せやと罵り騒ぎ銘々お待物くを携へて一室の内外よ
滿々たれば天海奈ある曲者あり共逃れ出可き様も無く一
期の浮沈と見えたりけり恠て烈婦お花の引拔たる一刀眞
甲よ振翳し天海目掛て切付るを此方ハ目疾く身を轉し空
を打てて手元へ付入り只一ト突と懷刀をヲツと喰いて突
出せよ此方ハ強者引外一足引て横さまよ兩個におれと
切拂ふ烈婦が鋭き太刀先よ天海和尙ハ兩足を脆くも撲地
と難倒され後お控と倒る、處を再回付入るお花が機轉片
腕丁を切浴し今こる思ひ知たるかど登し掛つて天海が咽
喉グと差貫くよ了得不敵の天海も一念疑たるお花が及
よ呀苦一聲叫びしのみ忍ち息ハ絶果しよ有合ふ者共聲張

上げ天晴姉御出來されたりと等しく動と響しよ圃九郎
も機嫌よく是も思ひす扇ぎを開き一たりくと稱美して
俱よ手柄を悦びしとぞ倍お花ハ年來尋ねたる怨敵天海を
討たるも偏圃九郎の高思なれば是より一層心を用ひ
能く家事を治めて聊かも私せ専ら圃九郎の爲し心を
竭したればお花茶屋の日増お繁昌なり遙か後に至るまで
最榮達て連綿たりと是ハ是後日の物語なり案下某者惡者
小泉半之丞の養道ハ同類多九郎を従へ憂お神名宿を出立
し程經て上總の國一の宮よ詣りけるお茲も同國の蓮長寺
と云るは養道が未だ飯高居居たるころ親しく交りたる
僧よて口秋と云者住持し居たれば暫く茲よ足を止め緩々
一計と案に出さんと多九郎へも其意を示去夫と無く時節
の來るを待居たるが元來養道ハ珍らしき方法を設け多く
の金銀と貪り集めんとの下心おれば竊かに種々の意計を
旋らし居たるお茲も此一の宮よ番匠をもて家業と爲る善
四郎と云る者有しが彼の妻お常が先頃より名も得知ぬ病

ひも懼り晝夜物狂はしく苦しみ悶ゆる趣きをさへ是必世よ云ふ狐付の類ひある可一我壹ツの手術を施し此婦人を助くる時よの聲名一時又聞えて容易く大金を得たる可しと巧の次第を多九郎は囁き示し足下云々と流言して我を導び給へと云ふ多九郎一議にも及む承諾な一忽ち彼家の邊りお到り夫と無く家の容子を窺ふは癖の如く病者の爲お家内の者強く艱難とるに聞き馳て其方さまの者に付て余所寄がら養道の法力を揚發し御身等なとて猶豫したまへる其生普隨に現み此道長寺に杖を止め給ふるのし手又取る如く教唆とよ田舎人の正直も多九郎の口前お乗られ大い又悦び彼番匠始め二個三個一同打連て道長寺に詣り客僧養道ぬし又對面せまはまき趣きを申し入まの養道の仕濟たりと悦び何氣なき休めて一室へ請じ其來由を問ふに三個の口と揃へて伴んの由と陳べ聖人願くば不思議の法力もて病苦を救ひ給ひたる可まど頭を下て只管頼み聞ゆると養道の態と驚きたる面色なし貧

道の名も無き貧僧いかで然る病人を救ひ得可きやれ高祖上人の利益をもて容易に助かる術も有んは奈もしと救ひ參らせんと異議無く承許ければ三個は甚だ打悦び直ちに養道を伴ひ我家へ歸り來り一室お請じ茶菓を供へて懇ろな待遇し誘此方へと病間へ誘なふにぞ養道は殊勝氣は珠散つまぐり案内し連られ一室お到り見るは病人と珍らしき美人なるが病苦の爲は太く疲勞きたりと見え肉落ち骨頭れ見る影も無き姿おれと養道を見て目を怒らま口を尖らせ此和尚何の爲お我臥房へ入來りまると言ふ其体たらく絶て女子との見えず必定狐若成可しと思ひ養道の静な經文を誦し意の中は思ふやう世の愚俗等猥も稀有の説を好む狐若と云る者夥多われ共畜生の分際とて何ぞ人間の皮肉も分入り障碍を爲と謂れ有可き是醫師の説處氣病の類ひ成可しよし我一ツの手術を施し現ふ不思議を見せて此病人を救へんと思案を決し其日の

其儘道長寺より立歸りしが其夜多九郎を以て一疋の大いなる狐を買來らせ之を經文の箱の裡へ隠し翌日申刻過とも思ふころ再回番匠の家へ赴き貧道昨日病人の体と見たるよ之年經る狐の目さみれば今養法力をもて彼を逐出し容易く救ひ參らそ可し依て某彼狐と祈り出すまへ御身等口々の締りを明け彼が出行く道と塞げたまふなど眞實しく欺くと雖壹人悟る可き委細心得いどて病間の襖の勿論與表も悉く明放し片唾を呑て窺ひ居たりしとぞ恠て養道の持せ來



図景

りたる彼經箱を病人の前へ据させ法華經の功力空しからせバ病氣の根本たる惡狐を逐かよ退散なさせ給へと丹精を抽て祈り上へ既よ夜の初更も過るまると一同の目を盜

み竊のよ右の経箱の蓋を取しかば昨日より此裡へ入らざ
 苦し居たる狐も何とて猶縁を可忍ら踊り出東西わ
 馳廻りまかば主個を始め一坐の者共憐る不思議驚かさ
 らんアレヨ〜と叫ぶうち狐は一方の逃道を求め何方ど
 も無く逃去しりバ一同の更養道の法力に感佩し病婦も
 此光景を見て始めて夢の覺たる如く神氣奮復したれば
 是より自ら藥効も著しく顯れ幾日も有せ全く平癒を
 したりけり然奇を傳ふ人情の都鄙の區別も無く何處も
 同じければ到る處養道の噂高く誰云ふと無く近郷近在に
 傳播し謀つて狐を顯はしたる事と知ねと只是養道の法力
 ありと思ひあやまり病氣も悩む者聞傳え〜加持祈禱を
 乞ふ者運長寺の門前に市を成しければ養道の我計略の斯
 までの思ひざりしを竊も多九郎と打語りつゝ乞るゝ
 ま〜加持祈禱を爲すは是また偶中りは全快する者尠から
 ねるべて養道と推尊み當世無二の生菩薩とぞ稱しける
 恠て養道の或日多九郎は嘔くやう我義も關宿よて足下と

兄弟の契約と結びし際盗み取せたる日期上人の作ありと
 云ふ宗祖上人の靈像の今猶足下が納め居たまふにや事
 紛れて問ざりまが我此こる壹ツの手術を考へ右の靈像だ
 ん有ば手を濡さずして數千金と得る妙計あり奈も未だ失
 ひ給ひぬやと言バ多九郎阿々と打笑ひ和尚氣の能き事
 と宣ふものかな我御身の爲は柏木の山中まで谷へ蹴込れ
 したとき大いなる蛇に吞れしかど少しも我全身に傷つか
 ざりしと不審と思ひしが後又想へば全く彼靈像を懐中お
 したる故ある可しと悟り合せ最有難しと思へるまゝ其以
 降種々の難難も出會しも決して之を賣る今猶懐中も有り
 是樹はせとて恭く取出して養道を見せければ養道の深
 く悦び此佛像有バ我計略速かゝ行はれて大金を得ん事
 現在りみ見るが如き先夫迄は御身大切も保存すべ〜と多
 九郎又返し楮一段を低めて云ふやう我當地も來りて情
 々風土人情と考ふるは人民律義として宗教を尙む事甚た
 敬恠れバ我今運華養生と云るを企て先づ大なる唐銅の

蓮華を作り出し往生を望む者を此裡へ入れ竊も其下へ穴
 を明け給をもて突上るバ鮮血少しも散れせま恰も入寂し
 たる如く見ゆん事疑ひ無らん依て御身は是までの極ひと思
 ひ我爲み給役を勤め給ひ御身と我のみ絶て人お知るゝ
 憂ひ無れば世も洩る心配り有まじ然し假も出家たる者
 の所業も非ずと思さば速り又斷り給へ我も又此席限り思
 ひ止る可しと言聞す又殘忍無頼の多九郎何の分別有可き
 金をさへ得る事なりせバ親の首へ繩を付んも物數とは思
 ひぬ物を然斗りの事何迎辭ふ可き委細必得申したりと即
 坐に承諾しがば養道は深く悦び猶種々お談合せり最惡
 ひ可き曲者ありけり恠て養道の其翌日我逗留する運長寺
 の住持日秋と對面して言やう貧僧素よりさせる才徳無れ
 共幸ひは宗祖上人の御蔭に依り世の病者を救ひ禍ひを轉
 じ福ひと迎ふる加持祈禱を爲す一ツとして過らたる事無
 きん既貴僧も知るゝ事なるが茲に不思議なる事こそ有
 れ开者余の義も非ず夕邊亥中のころ宗祖上人貧道が夢枕

よ立て宣ひ汝我宗門に深く歸依し年來夥多の人數を功
 くる事我に於て甚だ嘉する處なり就ては汝只空蟬の息わ
 る者をもみ救ふを旨と爲るは汝も未だ煩惱の垢を洗滌能
 はざる物とや云ん寔佛法の廣大ある事を周く世に擴め
 んと思ひ汝法力を顯はし云々の聲を設け往生の素懷を
 遂さす可し恠れバ我を信する善男女は法華の功力も依り
 天上に生を引事聊かも疑ひ無え斯てぞ汝が法力は無窮も
 傳へ誰か奪み仰がざらん勤めよや〜と宣ふかと思へバ
 愕然と我も返りて始めて其無想なり〜を知と雖も覺ての
 ちも肉骨動きて今猶目前に在が如し是も依て情々思ひ見
 るに五十年の星霜の權花一切の榮ぬまて元の平末の露
 離りは壹人免るゝ者有ん然らば後世の營みころ管要成ん
 ん今幸ひは宗祖上人の御告も有バ貧道法力を顯ひ〜往生を
 望む者に容易く本意を遂さす可う思へり知れ貴僧は何と
 思さるゝよと忍びやかに云ふは此日秋は才も無く徳も
 無き貧僧成は養道が日來の法力も眼昏み且の宗祖上人夢

の御告なりと聞て只管驚嘆あし更に一讀も及ばず同意
 なし、よにぞ發道の竊かよ悦び像て多九郎と語らひ置た
 る通り大さやか成る唐銅の蓮華を造り新たよ八間四方の
 家をも出来之と其正面
 備へ一段高き所よ日
 朝上人の彫刻したる例
 の尊像を飾り付け川邊
 全く調ひしかば更お多
 九郎を説て我と同じく
 出家の姿とあし密々八
 方へ赴かしめ今回遊長
 寺の客僧養道上人宗祖
 の夢想を蒙り人有て往
 生を願ふ時の蓮華の臺
 に座せしめ經文を讀誦
 し給へば少まも苦まひ



修之助
阿茶

宗祖上人の御導きなりと心得一日も早く天上へ赴き無窮
 の樂しみを請んものと財と擡げ米穀を齎し來つて往生
 を望む者一日くと殖ゆくにぞ養道多九郎願望思ひ
 のまに叶ひ金銀財寶を得る事限り無を悦び後よ右の
 金銀を見せて實事と明一竟は遊長寺の日秋始め其他の惡
 法師四五名を味方よ引入れ思ひのまよ遊華往生と行ひ
 たるに不敵と云も餘り有り話説齎又復る茲よ小泉養道よ
 誠を盡したる彼お菊の雇主船越丈一郎よ口説立られ奈に
 共成難く身の薄命を歎き鎌倉の山中よて縊れ死なんど爲
 一時來合せて助けたる男と云ひ則ち此一の宮よて世に知
 れたる俠客法華丈助と云者ありしがお菊を種々に諫め諭
 し竟よ我止宿する旅籠屋へ伴ひ徐かよ其死あんと爲る願
 末を訊問しかばお菊の養道よ欺かれたる始終丈一郎の情
 慾を避ん爲る覺悟を定めたる趣さあど涙のひまよ語りけ
 るよど素より義氣有る法華丈助大いよお菊が薄命を憐み
 某し上總の一の宮よて丈助と呼る者なるが此回些の

所用有て小田原へ行たる歸るさ此鎌倉にも用事有て態々
 來り夫等の事も片付て翌日古郷へ歸ふんと思ふ處なれ
 ば御身誰よ便せん術無バ我方よ來り給ひ後御身の指方へ
 赴き給へ然らば茲よ徒らよ死するよは遙優り早晚其養
 道と云る惡僧よ面會して恨みを陳る時節も有可しと眞實
 見えて説諭しけれバお菊は丈助が深切を悦び其意お任せ
 一りバ丈助も言甲斐有と悦び竟よ我家へ伴ひ歸り女房お
 米も件んれ始末を晰し夫婦懇ろよ憐みを加へしゆゑお
 菊の再生の思ひを爲し丈助夫婦を父母の如く朝夕心を込
 て立働さ居たりしと然るよ主個丈助或日他行して歸り
 來りお菊を呼て囁くやう偕も今日商法の事に依り其處此
 處を駆歩行しよ到る處遊華往生の層高く开者法華の行者
 にて養道と云る上人なる由然るよ和女が貞節を無よ成し
 旨く欺さて和女よ辛き目見せたる法師の名も養道と聞た
 れば若や其奴よは有ざるや御身明日より遊長寺の境内へ
 小さき小屋を設け參詣人の休之所として其處よ在バ自然

と養道も出逢ふ事有可ま構へて油断給ふなど義も勇む丈助が深切の言葉よお菊の太く悦び委細心得侍りたるは事能く調へ給ふ可しと云けるよど丈助は其翌日遊長寺へ赴き茶店を設ける旨を云入れ乾兒を命じて早くも一ツの小家を出來此日よりお菊と彼見世番と爲しけるよ豫ても言る如くお菊と元來優れたる美人なれば参詣の老若も目を側びて、其飽麗なるよ驚きしとぞ惜お菊は此日を始めよ毎日此茶店へ來つて専ら養道と逢ふ事を欲すれ共生憎に便りを得ず必頻りに焦燥して在しよ或時登人の出家の急がひしく我見世先と通り行を何氣なく打見遣は怪むし可一件の法師は我飯高よ在つる頃愛目を見せたる花賣お婆アお丑の一子多九郎おれば驚き呆れたるよ要こそ有と忽ち腹振りたて多九郎ぬしに在さずやや喃々と呼止めたり

○第廿回

借も今お菊よ呼留られたり則ち多九郎よて今い表面養道

郎を賺し歸し自個の直さま見世を片付彼丈助方へ歸り來り今日斗らばも飯高の多九郎法師日托よ面會ひし養道が舊來の悪事と今回企てたる遊華往生も怪しき討割ある事など多九郎よ聞ゆる通り詳らかに物語り恠れば分明日養道よ對面なし一回成せ二回三回欺れぬる恨を陳んと聞教荒く陳されば丈助の暫く之を止め袂に女兒の所存よて一時よはやるの道理あれ共是只御身と養道と只兩人の上のみよて世の人よ害無れば然るまで急きて面會せざるよ及ぶまじく只拾遺難きは養道が悪計とも知彼よ欺かれて非命の死を遂る者を救ふ事はなり然れば何事も我よ任し其證據を見給ふ可しとて千般にお菊を諫め諭し夫より平常我家よ出はいる乾兒子方の者を集め今回養道が企てたる遊華往生の愚民を欺く奸計よて決して正しき法力よ非を然らば迎確としたる證據も無し切りの手を下されと今日まで扣へ居たりしが計らずも悪事の緒を聞出しられバ我の云々謀りて容易く養道を生捕彼の爲よ非命

の弟子と成り名も日托と改めしが思ひ懸無くお菊よ廻り合ひ驚く事大方あらお菊の又養道の便りを聞出さんと思へば能く馴々敷待遇し飯高よて別れたる以後今日よ至るまで千般の難難よ逢ひ斯の如く落ふれて水茶屋の雇ひ女と成りたりなせ口から出るまよ欺き賺し竊お養道の實否を尋ぬるとい心も付でや多九郎の日托にお菊よ別れ關宿よ赴き却つて養道と腹を合せ所々よて非道の振舞をかしたる概略を品能く嘯き御身一旦出し扱れたる恨われ共今養道現在よ居れば對面せまはしと思ひ、某手段を以て容易面會させ申さんと云けるにらお菊は日托の物語りにて遊華往生の悪計の勿論其餘の事を委しく聞たれば一應主個丈助の物語り其上よて養道に逢ひ恨みの丈を陳んものど心中よ思ひ定め今日の日暮るよ間も無く客足も最繁くて寛りと物語りも爲し難ければ明日妾竊よ養道ぬまの借切居るよ坐敷へゆき久し振よて對面致し侍らんお其時ころ萬つ御身の庇蔭を仰ぎ参らざるありと多九

の死を遂たる我一郷の人よ代りて天罰を蒙らせんよ御身等參詣人の中よ交り我彼遊華より歸り出たるを見バ速かよ諸々の悪徒を押へ俱よ官府よ訴へ出よ又誰々は竊よ身をやつて彼等が術を行ふ様の下よ忍び行き場中よ於て我痛く叫ぶを聞は是又手を下して其者共を召捕可し併いあがら我運命空しく彼等の爲よ最期を遂たらんよは汝等我死骸を申し請宜敷全体を改め我爲よ穢を捕へて官よ訴へ出よと殘る方無く手配を定め是より先女房お米をして縫い置たる經帷子を着用な一何やら懐中へ押入れ用意萬端整ひ一かば壹人遊長寺よ赴き養道に面會な一某未だ四十路よ過ねお若きより無益の腕立を好み多くの人畜よ傷けたると悔嘆し居たるよ圓らおも御坊此地よ杖を止められ有難き法力もて往生の正覺を得せしめ給ふと聞湯仰よ堪ず親戚家族よ暇を告げ今日來つて御坊の引導と請參らするありと若干の金を取出之を養道に與けるよ日來奸智よたけ一養道なれ共多九郎の日托がお菊よ逢ひ悪事の

緒々断たりといふ少しも知ず且法華丈助の此宗門の信
徒ありといふ像で聞處も今其丈助が往生を望み益々我爲
の好機ありと心中み悦び異議無く承諾雖て彼蓮華の元へ
到らせ廿餘人の法師其
前後を圍繞して經文を
讀誦しさらば往生の望
を叶へめんといふ管題
目を唱へたまへと怒る
よ云開け再回丈助を引
て像で設けある唐銅の
蓮華臺に坐せしめ又々
經文を高らかに讀上る
と八葉の蓮華次第く
よ丈助を引包みかば
參詣の老若男女の等
く題目を唱へ居たり



が養道の暫く有て最早成佛せられ成と兼僧も下知を傳
へ蓮華を開かせ見つるよ丈助合掌して目を閉端然と座し
居たれば養道の仕濟たりと思ひ參詣の老若も打向ひ諸人

既に見らるゝ通り丈助
往生の素懐を望みしよ
宗祖上人の導きよ依り
斯くの如く往生したり
と殊勝氣を打陳べ再び
蓮華を卷戻さんと爲る
折しも死しよと思ひ
し丈助忽ち又衛立上
り我像てより賣僧の惡
計を知ると雖も未だ親
しくい手段を知らざれ
ば今日わざと賺された
る体よなし試みたるよ
案に進め我尻の下より鎗を以て窺ふ者あり依てもあら
し來りたる鏡を以て之を防ぎたるが察する處汝等非道
よも多くの男女を欺き恡る手段を以て無慙の最期を遂さ



したるよろ有ん今速やかよつみの次第よ白狀し公けの
さばきを受可いと言ひも敢て躍り出たれば養道を始め衆
多の法師ども事願はれたりと悟り強く驚き立んと爲るに

腰痠へ走りんとするに足すくみ一言も無く忙然たる様
て丈助も語らねれたる乾兒子方の者共頃謀略を見出した
り疾く生捕らせやと罵り立忍ち養道を取つて押へ法衣を
剥して高手小手を縛めけるうち其場は有合ふ法師二十人
も皆く一同にいまいめければ心地よといひつゝ竟に
丈助を先立て代官の廳へ廿餘人を引連訴へ出んとする
處へ乾兒十四五人多九郎の日托は細打證據の鎗を取持せ
引連來りし又出會しりバ丈助の什合せよしと打悦び代官
方へ急ぎ行き嗚呼人盛んなる時天は勝ち天定まつて人
に勝ど宜なるかな小泉養道悲徒多九郎の輩さしも奸計
を以て多くの村翁野娘を欺きつ連華壘又座せしめ之を連
華往生と號けて金銀を掠め取り不義の榮利を目論見たり
しが既く前回はも詭たる如く法華丈助と云る俠客の
爲は其惡策を見破られ無慚も縲洩の辱しめを蒙るに至
る事豈痛まざらんや哀まざらんや借も法華丈助の惡黨養
道始め進長寺の住職日秋其他之は關係したる法師廿人と

多九郎等一同と引立つ乾兒等前後も付従ひて幾程も無く
一之宮の代官なる菊地折右衛門の屋敷へ詣り恭しく一
通の願書を捧げ事云々と懇へ出ければ代官の委細を聞き
大い丈助等の手柄を稱美し直ぐ右の科人と白洲引
据一ト通り吟味の上取敢せ入牢を命じ丈助より追て何分
の沙汰有ば早々罷り出可いと嚴かに言渡し其儘身の暇を
與へまよむ丈助等の執れも勇み立て我家へ立戻りしと聞
けし憚て代官菊地折右衛門の翌日養道始め廿餘人の法師
原を白洲へ引出し證據の品を以て嚴しく拷問及びけれ
バ流石の養道も包み隠さず年來の悪事を詳らかに
白状せしければ代官より此旨領主へ訴へ出則ち領主の
差圖り休て養道等一同の宮へ於て斬罪を所せらるゝ赴
き甲一渡一愈當日も成けをバ一町四方は矢來を結檢
使兩個養道等へ改めて所刑の旨を申し渡し太刀取役人後
へ廻り一時矢來の外俄か騒がしく壹人の女小吏も就
て云入るやう妾の養道と二世の約束致したる神名の花

と呼る者なるが彼と別れて久敷相見ざるを嘆き主個の
免許を受けて遙々尋ね來りたると思ひさや同人義の法と犯
し今日此處に於て御仕置に相成るよし何卒廣大の御慈悲
をもつて一ト目かん逢下されたいと頻々嘆願ゆれども何
逆許を可き懇ろに論じて追跡し竟に養道始め残らず斬罪
に成り替木も懸られたること惡の報ひと知れたり恠て
お花の養道は面會を免されず剩さへ獄門となりたる淺間
敷姿を見て紅涙袖とひたし忽ち縁の黒髪を切て尼法師と
成り神名宿に歸り來りて一の宮の顛末を物語り是迄厚き
團九郎の情けを謝し養道の爲に生涯出家遁世せん事を
請ふかば團九郎も哀れと思ひ快く是を免さるゝお花が
養道も廻り逢ふる彼毘沙門堂の無住なるを借受け茲にお
花の住所として不自由無く一期を送らせたりとか又法華
丈助の養道の悪事を見出したる功を賞し領主より夥多の
褒美を賜りければ悉く之をお菊も與へ彼が父母も後れ
寄邊無く是まで養道の爲に種々艱難の位置に立ち今回多

九郎より養道の事を聞と雖も自個の恨を后よりて逸早く
丈助へ告知せたる心底を報んと改めて親子の約束を爲し二
三年を過て或豪家へ嫁らせ生涯を氣安送せたりと聞えし
編者曰く此一編の講師伊東潮花が得意の讀物を親しく
開取り筆を寫したる物ありとは既ち緒言も陳置たる
通り専ら其脚色の違はん事を畏れ少くも私意を加へず
然るに本文中其地名も就て少く疑ひ無き事能はせ开を
奈よと云ふ先づ關宿の水掛峠又神名宿等は是なり余素
より彼地も昏く只兩総全圖或は富士見十三州繪圖等も
據るのみ故有無の判断は惱み有の儘に書綴置たれ共本
年の久き約束を解ん爲め千葉縣下へ漫遊する筈成り寄
々土人は就て更之を正す事有可し又本編の都合有て
第廿回を以て肩を結の計畫あるより充分端一難き處も
有んか是の編者が未熟あるに云を待て其止を得ざる
事情有事成んどお馴染甲斐も見逃し給くらん事を是請
ふ

柳葉亭繁彦

大石良雄七代孫大石多久藏題辭 柳葉亭繁彦著 稻野年恒畫 ○赤穂 雪之曙 美諷	西洋綴美本全一冊 定價 郵稅共金九十錢	吉田忠五郎編 寫真木板肖像入 ○新内閣大臣列傳 西洋綴美本全一冊 定價 郵稅共金五十錢	柳葉亭繁彦著 尾形月耕畫 ○愉快 閨秀 奇談 西洋綴美本全一冊 定價金 八十錢	春永情史著 落合芳幾畫 ○淺草 鳴神 乙一 西洋綴美本全一冊 定價金 一圓二十錢	柳葉亭繁彦著 尾形月耕畫 ○名筆 土佐 給手帖 和製美本全一冊 定價金 五十錢	山東京山著 歌川豐宣畫 ○教草 女房 形義 和製美本全四冊 定價金 一圓七十五錢	歌齋閑士著 歌川繁宣畫 ○新田 功臣 錄 洋製美本全一冊 定價金 八十錢	山東京山著 歌川國直畫 ○琴 聲 美 人 錄 西洋綴美本全一冊 定價金 壹圓	柳葉亭繁彦著 歌川國直畫 ○土鍋 調練 噺 聞書 洋製美本全一冊 定價金 八十錢	柳葉亭繁彦著 歌川國泰畫 ○新編 競 牡丹 洋製美本全一冊 定價金 五十錢	柳葉亭繁彦著 歌川國泰畫 ○春色 行 路 柳 洋製美本全一冊 定價金 六十錢	白頭丸柳魚著 歌川國直畫 ○武藏 坊 辨 慶 異 傳 西洋綴美本全一冊 定價金 壹圓	柳葉亭繁彦著 應齋年方畫 ○勇 立 春 若 駒 和製美本全一冊 定價金 四十錢	爲永春水著 尾形耕作畫 ○明 烏 後 の 正 夢 洋製美本全一冊 定價金 壹圓
---	------------------------	--	--	---	--	---	---	---	---	--	---	---	--	--

明治十八年八月八日板權免許
同 十九年六月十六日別製御届
同 月 出版

定價六拾五錢

編輯人

東京府士族

中村邦太郎

京橋區鎗屋町十三番地

出版人

東京府平民

森川林三郎

同區南鞆町七番地

東京日本橋區新葎町

山本良助

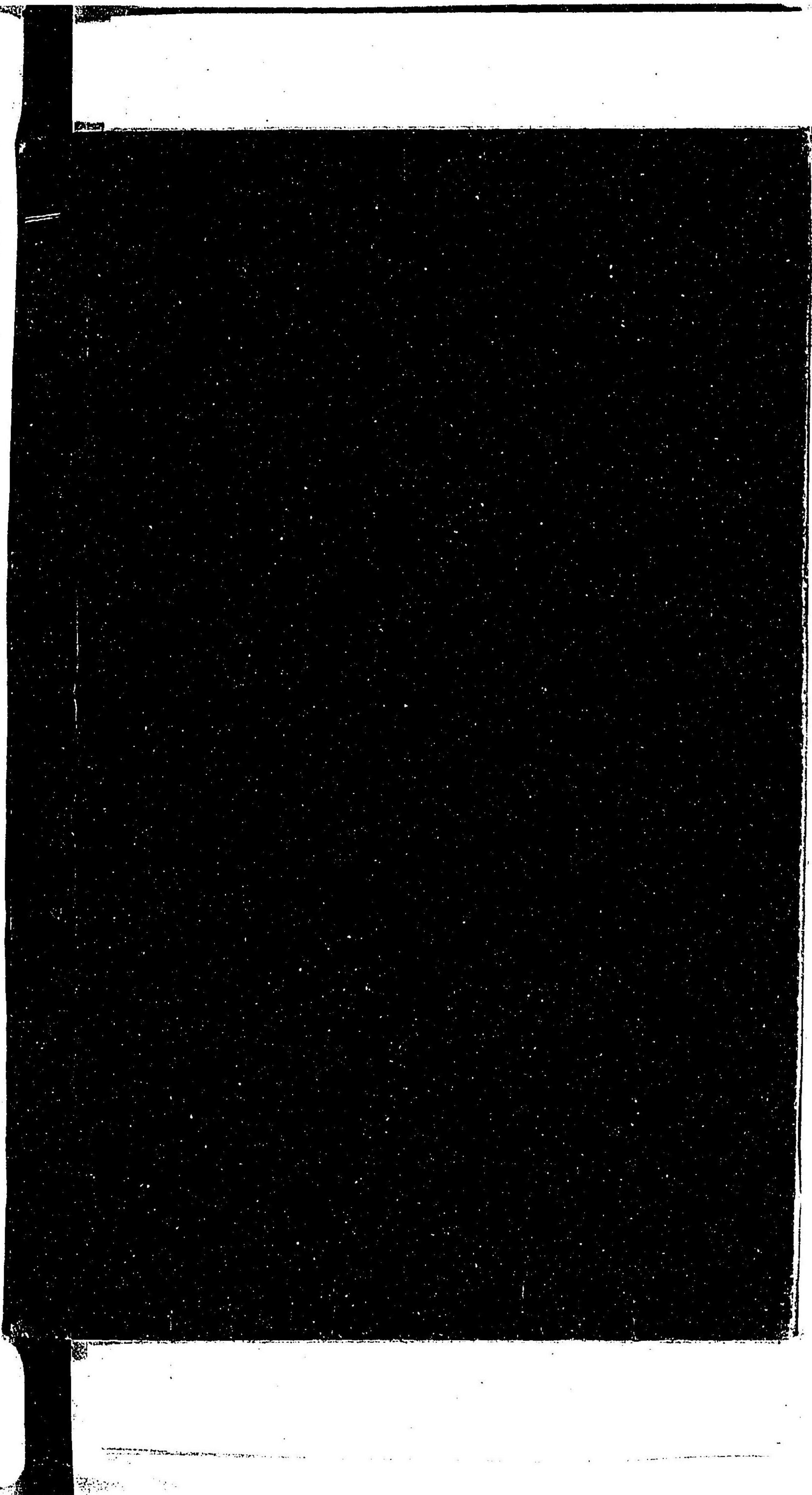
同區日本橋通四丁目

丸屋鉄次郎

同區日本橋通壹丁目

伊勢屋金次郎

大賣捌



特40

68

091554-000-9

特40-68

蓮華往生鮮血台

柳葉亭 繁彦 / 著

M19

DBN-2547

